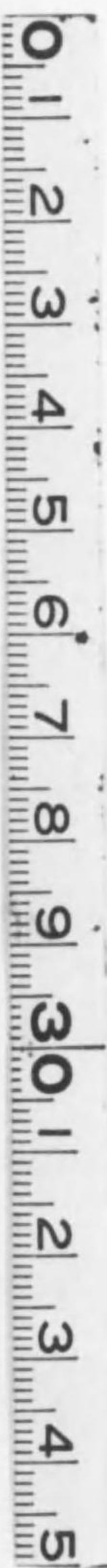


特279-74



1200501131880

澤菴和尚全集



始



特279

74

一篇應評許渾十

叨依

俊矩以之芳顏

宗彭

東漂西泊只隨緣

撲面風塵似未蠲

江上眺望詩思濕

一篇應評許渾十

凡例

- 一 此處に蒐めたるものは禪門近古の大宗師東海澤庵宗彭禪師の著なり禪師の傳記は前にも記したれば茲に言はず其高德を慕ふもの若し此書を座右に置かば親しく慈顔に接して慈訓を耳にするの思ひあるべし。
- 一 書中の珍蹟隨筆は禪師の遺著として最も有名なるものなれども板行日久しく今は容易に得べからず此處には文政翻刻の書に依り二三の與本を集めて密に校訂を加へ以度幾は誤謬なきを得む。
- 一 不動智神妙錄は禪師が柳生但馬守に與へて劍道を論じたる是れ亦有名の書なり澤庵法語は世に禪師の著なりと云ひ否すと云ひ議論紛々たるものなり讀者熟讀して其眞贋を辨せよ編者は別に説あれども茲には言はず。
- 一 歸西日記と鎌倉の記とは某家秘藏の古寫本を請ふて此處に掲ぐるを得たり古寫本には歸西日記を鎌倉日記と題したれども今其

成る所以に徴して改め題しぬ茶器詠歌集は禪師が洒々たる襟懐
を見るに足るべし簡は森大狂氏の藏本を請ふて載せり。
一卷首に掲げたる禪師の眞蹟は禪師が柳生氏に與へたる和韻の詩
にして岡本貞休氏の珍藏に係れり殊に記して同氏の好意を謝す。

明治三十年十日

編者識

東海澤菴宗彭禪師

澤庵禪師、名を宗彭といひ、天正元年をもつて但馬の出石に
うまゐる。姓は平氏、三浦義明の遠裔秋庭の族なり。おさなきこ
ろ邑の唱念寺に投じ、薙染して淨土宗の僧となりしが、久し
からずして又勝福寺にうつり禪を希先西堂に受けぬ。先の
歸戒を授けかつ法諱をあたへて秀喜といはしむ。後また董
甫仲に宗鏡丈室に従ひ朝參暮扣倦むを知らず。仲京に歸
るにおよんでまた隨ひて大徳寺に至り名を宗彭とあらた
む。時に明堂古鏡禪師和泉の陽春に居して接化殊に盛なる
を聞き、たゞちに和泉に到りて鏡に依り書牕に研覃す。一袖
冬をしのぎ一葛夏をわたる、ある日海念寺に祭あり師また
あづかる。然れども身に着けるの葛衣甚た垢汚せるをもつ

て身づからこれを井水に濯ぎ朝日にさらして其乾くを待
ちぬ。同行の木の戸を叩いていはく、共に齋に赴くべしと。師
葛城の更被すべきものなく赤裸々たるをよて戸を閉ぢて
出でず、彼をしてまづ趣かしめしと云ふ。鏡近江にうつり又
和泉にかへる。師常に隨侍す。鏡寂するにおよんで乃陽春祖
塔をまもりぬ。慶長丁未和尚歳三十五、一衆推して以て大徳
第一座に置き黄徳禪席を繼がしむ。山に住すること三月退
鼓を鳴して衆に辞し出で、和泉にかへる道俗勸迎して前
後に相隨ふもの甚た多し。須更にして豊臣秀頼師の道譽を
きよ使を遣はして特に大坂に招く。然れども師固辞して起
たず。細川忠興一寺を豊前に創してまた師を招く。又辞する
こと再三つるに就かず。八月朔京都の大僊院に住す。これよ
り南宗に大僊に一往一來處に従ふて衆を匡す。師天資隱逸
を欲して世事を厭ふをよて、紛冗を和泉の天下邑に避けぬ。

元和丁巳給前守黒田長政宰府の崇福寺をもつて招けども
就かず。大和の漢國におもむきて、共林菴に寓し、また山城新
の妙勝寺に到りて一菴に僑居す。のち但馬の枋里にかへり
草廬を宗鏡の山後に結びて屏居す。丁卯の歳たましく出て
京都に入る。天皇師の風采を聞き召して見ると欲す。師固辞
して朝せず。ふたゝび但馬にかへる。和泉の谷氏祥雲寺を創
し師を延いて開山祖とす。師すなはち檀命に應じて開堂慶
讚す。これよりさき將軍徳川家康法禁を大徳妙心二寺に下
していはく、道機僧臘兼備せざるもの猥に住山を許すべか
らずと。然れども家康死して後聽に達せず。勅を奉じて大徳
に出世するもの凡十四五輩。寛永丙寅幕府かさねて嚴制を
兩寺に加ふ。次の歳師玉寶翁の法嗣正隱知を擧げて本寺席
を董さしむ。こゝに於て。幕府師及び玉室江月を江戸に召し
て是非を詣る。然れども師玉寶と固く執りて前心をあらた

めず。幕府すなはち司に命じて玉室を奥の棚倉に請し、師を羽の山城に貶す。居ること四年にして幕府その老を憐み、召還して京都にかへらしむ。後水尾上皇師を仙宮に召して禪要を問ふ。奏對旨に稱ひ御問相續く。尋いて京都を辞してまた但馬に過く。明年さらに幕府の命を受けて草廬を出づ。將軍家光師及び玉室を江戸城に召して禪要を問ふ。師應對皆旨にかなふ。これより屢城内に侍して恩遇甚た渥し。成寅師京都に趣く。上皇特に國師の號を賜ふ。師固辭して受けず。因て奏して大徳二世徹翁に譲らんことを請ふ。上皇その言を嘉し。徹翁に追諡して天應大現國師を賜ふ。寛永十五年家光地を武藏の品川に相して新に巨剎を創し。山を萬松といひ。寺を東海といふ。次の歳家光特に師を請じて開山第一祖とす。師また偈を作りてこれを慶す。酒井忠勝長松院を創し。堀田正盛臨川院を創し。細川光高妙解院を創し。小出吉觀雲龍

院を創し。みな東海の境致たり。家光さらに邸館を江戸に賜ふて栖止休息の處となす。構營甚た壯嚴なり。既にして嗣法を斷絶するの意あり。故を以て家光一夕山に入りてこれを諭す。師退きて衆徒に謂ていはく。台命太九重し。雖も老僧更に兒孫相續の心なし。後また京都に赴く。上皇告勅をうく。それ正法は相續し難くして而も涙滅し易し。曾て聞く和尚法孫を斷絶せんと欲すと。朕常にこれを以て憾となす。門弟のうち發明者を選んで正法を付嘱し。まさに世間の眼となすべし。師乃一圓相を盡して自肖の眞に擬し。かつ一点をその中にくたし。書していはく

昔月仰嶠已燒六代圓相龍抓蒼海重錄九十九個蛙輓泥
沙南泉曾畫一圓相歸宗坐其中麻谷作女人拜趙壁本無
瑕類相如漫誑秦家今此圓相包天地無外窮塵刹無涯無
邊世界如麥似豆此裡衆生似粟如麻九流分列門戶六藝

起修籬笆、彼諍麟鳳、此決龍蛇、人物是太敍、俊入亦不些、十方薩埵、列星宿、五百羅漢、出雲霞、我爲其主張、法王法身全體顯、諸人見我麼、時雖中間、不待後進彌勤、不慕前來釋迦、阿難捧窻蓋、葉抱袈裟、宗彭壯多、卻增聲價、阿闍世王、妄起嘆嗟、不尊文殊師、頻呼衣蒲童子、課湯果、不窺維摩詰、急引金粟如來、役詐茶、下方聲聞、待我履、四果聖者、御我車、有意氣、時添意氣、請見閻羅老、斫額以望我、寫官等踊躍如得爹、我猶乘勢、縛嶽卒播、扭械捉憤鬼、負鉄枷、五逆衆生、扑野喜、奈落罪人、得時誇、快然快然、我這裡、今日萬般已治、藥病相瘥、佳衲子、只莫所取、無好底法、莫所捨、無嫌底法、若任違順、境家山路、猶除、噫、此法從前、絕等差、求中正者、落邊邪、佛經祖傳、錄方語、點檢將來、空裡華、

正保二年臘月師微恙をしめす。家光特に使をつかはして慰問せしむ。十一日衆しきりに遺偈を請ふ。師筆をとつて夢の

字を書し、筆を抛つて坐化す。壽七十三、臘五十七。遺言していはく、全身を後山に葬りて土を掩ひ去るべし、誦經設齋するをなかれ、道俗の吊賻を受くることなかれ、塔を建て像を作ることなかれ、碑を本寺の祖堂に入ることなかれ、年譜行狀を撰せされ、著衣喫飯平日の如くせよと、衆命に導ふて後山の西北の丘に葬る。たゞ封樹するのみ。

玲瓏隨筆卷之一

一佛と成るとは、いかやうの事と云ふぞ、信は覺也、覺に至るを佛になると云ふ也、されば覺を開くほどの智慧もなき衆生の念佛稱名すれば、覺顔の人これを笑ふ、更にいわれなし、覺を開くほどの智慧なき衆生、念佛をも行せずば、愈日々に悪は長すへし、其悪事を重ねるほど悪業を感せは、いつ覺を開く世あるへきそや、念佛稱名は覺の樹の種なるべし、種を蒔かずして菓はなるへからず。

一業とは萬の人のなすわざ也、其業に善惡あり、善をば善業と云ひ、惡をば惡業と云ふ、其元身口意の三業より萬の業も出づるなり、身三口四意三の名也、殺生、偷盜、邪淫、これは身になす三の業なり、妄語、綺語、惡口、兩舌、是は口になす業あり、貪欲、嗔恚、愚痴、これは意のなす業なり上の身口意の三業身になすをば身業、口になすをば口業、意になすをば意業と云ふなり、身口の二も意を離れてわざをなさぬれば、つまる處は意業なり、故に貪嗔痴の三毒とて、意業を一切の惡業の本とす、貪欲より起つて屋燒人殺をし、人の物を取りて我私にせんとするより、千般萬端の惡



事もいづるなり、嗔恚の怒より發りて、親子の間にも不禮不義をなし、兄弟朋友の間にも争をなし、切りつ切られつ、討ち討れかんとするより、さまざまのと出づる也、又愚痴は暗鈍なる故に理をしらず、万事につきてひが事を以て理となす也、人は理をもちてはひか事に隨はず、隨はんを隨へんとすれば、喧嘩にをよふ、此等は世間にありて人我相争ふ上の義なり、此外愚痴の罪數ふへからず、此世は夢なり久しかるへからず、財寶多くあつめ持ちて悦ぶ、雖も、枕の夢に金を得て實の金と思ひ、悦ふこと限りなければ、覺める時金にあらざるか如し、夢の中にこれは夢なりと知らぬもの也、覺めて後こそ夢とは思ひ、然れば此世も夢なれど、夢の中なれば、夢ともしらず、財寶を多くもちては實の財寶なりと思ひ、屋宅を結構にしては是屢樓化城なるをしらず、實の結構也と悦ひ、人と争ふも夢なればさめて相手なし、然るを實の人と我れ也と思ひ、勝つときは則ち悦ぶ勝つことを悦ぶ故に、専ら人我勝負を務む、願くは勝つことを悦ばず、負るとを怒りぬ心になりて、夢の勝負を勤めずして勝ちも負けもせぬ人たらんば如何そや、専ら勝負を勤めて勝ちつ負けつする人とならんや、又勝負の修羅を止めて、勝ちもせず負けもせず、心平穩ある人とならんか、勝負の修羅を勤むる人、負るときは則ち嗔恚の焰をもやし、身を焦し、胸をやく、これ身の損に非ずや、又勝つときは則ち悦ぶ、此悦も、何程我身を潤色することありや、只笑ふ聲空に聞ゆるのみなり、人よ

き衣着れば負けじと我も是をつとめ求む、人よき衣を營めば負けトと我も是れをつとめ營む、只我に相應の心もたんに如かし、人と智を争ふせば我も負けトと争ふ、莊生も云ひしごとく、智也者争之器也、人高きに比れば、我争て卑きに處らんと勤む、水は卑きに下る、争ふことなしとて、老子も道德に譬へたり、此世のとを書かば盡きじ、言ふとも窮りなけん、都て愚痴のなす處なり、貪嗔の二つ痴より起れば、つまる所愚痴の一つ也、人間のあるあらゆる悪事は、皆愚痴よりすると思ふへし、此愚痴は生付きて改められぬ物なりと儒者は思へり、佛法にては貪嗔痴の三毒は、修行して取除ける者なり、愚は黄蓮の苦く、甘草の甘さが如くにて天然なれば取除けられぬ物なりと思ふに愚なり、愚取除けられぬ物ならば、人間の一切の所作は、一も仕課られぬと一切の所作につきて皆其所作の上の智と愚と有るへし、弓作か弓を作るにかうすれば弓よし、かうすれば弓知りて悪いと云ふとを心得せられぬ、弓を作る智が暗くして、現はれざる也、然るに弓を能く修行したれば此智發す、この智發明すれば愚己に剝け去る、愚既に剝け智現はる、修行せずして物の上手と云ふとなし、矢造も同じ、太刀、長刀作る者も同じ、百工の所作、何かこれにかはるへき、まして又三教の道や、然れば愚は剝ける物なり、之を剝がして智者にならまじきことならずや、一能をよく修行すれば、一能の智者なり、其能の上には愚なし、是愚を剝がして智を現はしたる人なり、此の如

一切の上に一切の愚あれども、修行すれば一切の愚皆剃げて一切の智現はる、道は一切にわたる物なれ、道をあきらむれば一切の上に智明かなり、或人云く、さは承はれども道者と云はん人に、馬乗らせたらは、なるまじきと云へり、應さも候、萬のことに事理の二あり、事は其業なり、業をする人は業をばすれども其道理を知らず、理を知る人は其業をば作さ、れども其道理を知る、馬の上に能く保つ人も、馬を我儘にするとは未たならぬことあり、是れは馬の心と人の心と感せされは也馬と人と心々相感すれば、駆けふども留めんども右へも左りへも人の儘に成るなり、鞍によ、保つ人、此道理を待たらは何か有らん、此道理を知るとは理也、鞍上によく保つとは事也、工は刀子の柄で、萬のことをすれども、刀子をうつとい治工の事なり、刀子の切れる切れざる金の堅く柔なるぞ木竹に合ふ合はぬの道理をば、工の知るところ也、刀子を作ることは治工の事なり、金の堅きは竹を削るに不可也、金の柔なる可也、木を削るには是に反せり、かやうの事は刀子をつかふ人の知る事なり、是は理なり、治上のなすは事なり、事をする者この理を知れば、事理相應すへし。

鈍根與利根之辨

一儒道に云へるは、氣の純萃清明なるを禀けたるは、利根智慧あり、雜駁汚濁なる氣を受けたる、鈍根愚痴なりと云へり、一往きこへたり、濁れる水に月の映り難き如く人の氣濁りたる故に、見るこ

と聞くこと心に移りかたきなり、故に物を得ると遅し、又澄みたる水に物の影早く移ることく、心へ見ること聞くとか能くうつる故に、物の道理を心得ると早し、是を利根と云ふ、此理明けし、譬へは同じ爐火にて温むれども清酒は疾く温まり、濁酒は遅く温まるか如し、濁りたるには火氣遅く入り、清酒には火氣疾く移るか如し、利根は澄酒の如し鈍根は濁酒のことし。 一不審

○澄める氣を受け利根也、濁れる氣を受けたる故に鈍根也、すめる氣受けたらん人は、百様の事皆利根なるへきに、只一能一藝には年十歳にして五六十の人も及はす、其外の所作は常の人の鈍さにかはらざるは一能一藝ばかりに天より澄める氣を賦與へたるか、因碩と云ふ者は、九歳にして三つの碁を打ちたれども碁の外の智慧は世上の並なり、又濁れる氣を受けてや萬事に愚なる者も、一能すくれたる處あり、其すくれたる所作は、同年にしてならい稽古し、も及ばざる能作あれば、生れ來てよりの修行をなしけれども、違ふ處あるは、其一能にかぎりて氣を別に一分受けたるには有るへからず、此辨別如何ぞや、傍に人あり云へるは、斯様のことも只自然の理なりと云ふ。 一不審

○鈍利は己に氣の清濁なりと云ふに付き、立ちたる不審なり、然るを自然の理なりと云へば、氣の清濁と云ふ處をば破り玉ふか、儒にて儒のとを破り給ふは、我刀を把りて我身を破るか如き者なり。

一不審

一化育流行して萬物生成することは目前なり、花咲き緑立ち、葉浴ち根に歸して、又春にかへること
 萬物皆此の如し、人も又物なり、鳥獸蟲蝶に至るまで化育にあへり、然れば天地の間の萬物は、天
 天を造り出せるといへり、しかれども植ゑたる粟を如何してか天生すること能はず、植ゑざる柿を
 是生するといはば、梅桃の菓植ゑずして生することなし、一切の種物うゑずして生することなし
 されば粟をば唯粟自ら造りいだし、柿をば柿自ら造り出すは天にはあらず、天は唯化育を施すはか
 りなり、是を譬へて云は、天地は一盤の茶磨の如し、下にある磨盤は地に喰ふ、回る磨は天に喰
 ふ、即ち回り動くを陽にたとへ、磨盤の常に静なるを陰にたとへて、これ陰陽備はれりと云ふ、始
 めて手を懸けて回らし始めたる所より、回りに又元の所へ回りかへるは、春夏秋冬と回りに又元の
 春に回りかへるにたとふ、回りは變也、又本の所へかへるは通なり、即ち變通これなり、其間に茶
 を入るゝときは則ち抹茶をるゝ、薬を入れれば則ち薬粉となりてをるゝ、百の品を入れて挽かんとせ
 まよ、百の品各々にして磨盤へをつる、萬物生々此比喩なり、然れば磨回るときは茶にても、薬に
 ても、其已々色をあらはせども、磨其品々を造り出すにはあらず、磨は只回るばかりにて、をるゝ
 所の物は茶はちや、薬はくすり、已々と持ちて出て、其品々をわらはすなり、天地の化育も唯此の
 如し、天地の化育と云ふは、春は暖に、夏は暑く、秋は涼く、冬は寒く、又春に歸り、夏と變して

茶磨の回る如くなる、此化育ばかりを施せば萬物は已々持ちていつる物なり、縦令又茶磨終日回る
 ども、茶にては薬にても此方から入れされば、其色をあらはすこと有るへからず、天地は回れども
 種を下さしれば生せず、名もなき野の草も已々か種ありて、地に落つれば天地の化育にて生成する
 なり、天一々を造出すには非ず、然れば一草一木も其始なきの始より、粟と成る始る時に粟と成る
 道理ありて、粟となるにより、又終なきの終に至るまで、粟を植ゑて柿と成ることなし、梅を植ゑ
 て桃となることなし、已々か業を引きて梅はむめとなり、桃はもゝとなる、有情非情ともに此の如
 し、万物一々已か業を引きて生成する故に、引業と云ふ、万物相並んで滿業とす、引業とは一物々
 々の上を云ひ、滿業とは万物とこめて云へり、儒道には万物一氣の理也、天造り出せり、自然なり
 と云ふ、決定天造り出すと云は、種をさる梅今目前に生すへき乎、植ゑざる桃今目前に生すへき
 乎、自然と云は、梅を種ゑて桃ともなるへき乎、唯歴然梅は梅の引業にて梅に成り、桃は桃の引業
 にて桃となる、天は唯化育を施す計り也、梅桃は梅桃か自ら造り出すなり、天にはあらず、此外の
 道理あらは其答を聞かぬ、我門の小子答之。

一易に曰く廣大は天地に配し、變通は四時に配し、陰陽の義は日月に配し、易簡の善は至徳に配すと
 云へり、廣大とは易を褒美して云へるなり、易とは即ち天道のこと也、易道の廣大なることは即ち

天地に配すと云ふは、配すとは配偶の義なり、引合せてたぐらへて云ふ義あり、易の廣大なること即ち天地に配すれば也、天地は實に廣大也、變通は四時に配す、易の變通をは即ち四時を以て配して云ふなり、四時ば變して行く者なり、春の暖なるは夏の熱と變し、夏の熱は秋の涼と變し、秋の涼は冬の寒と變し、又取て返して春と成つて暖なるを通と云ふ、去年の春の暖なるに通すると云ふ義これ易の變通なり、故に變通四時に配すと云へり、變通とは即ち四季の變通なり、陰陽は即ち日月なり、日出て月升る即ち晝夜也、春と云ふ名も始めはなし、氣升りて暖るを春と名けたり、本是夏の名もなし、氣空に浮んで熱するを夏と名けたり、秋本秋の名なし、氣降りて天漸く涼き時を秋と名けたり、氣下に沈んで天甚だ寒き時を冬と名けたり、四時の變じ行くを變と云ひ、變して又本の春に歸るを通と云ふ、故に變通四時に配すと云へり、天道は此の如くやすくとしたるを易簡の善と云ふ、然ればやすくとして万物皆此化育に依り生成しても、かくやすくとしてしかも化育を受くる所廣大なる故に、簡をはをひなりと訓せり、人間の所作も、名人と云はるゝ人のする所作は、力を入れず、やすくとして成るものなり、天道これ也、故に易簡の善は至徳に配すと云へり、至徳とは聖人の至徳なり、聖君やすくとして寶殿に座して居たまいて、天下の四民百工やすくと世に住んで己々か所業は、己々と勤めて國安穩也、聖君の徳を至徳と云ふ、天道易簡の善を聖人

の至徳に配偶すと云ふは此を夫と二をなつて合せて見する義なり、聖君國を回つて田作るか、蠶するか、角せよ兎せよとは云はすとも、田作る者は己、田作り、蠶するものは己と蠶し、四民百工己々とす業なり、聖人は只天道の易簡にして、万物己々と生成する如くに只天に法る、國の亂れざるやうにして居給へすれば、民は己々所作として身やすきなり、細々教法などを上から云ふ物にあらす、ひもいさことは己々か身に覺ゆることなれば、食を求むる業を己々かすして吐わさるなり、寒きことも己々と身に覺ゆることなれば、己と勤めて著るなり、天道の化育をやすくと施して、万物己々生成する如くなれば民苦まず、天道の化育と云はやすくとしたることなり、故に易簡と云ふ、只氣の升ると浮ふとばかりなり、氣升るは春にして暖なり、氣浮へは夏にして熱す氣降れば秋にして涼し、氣沈めは冬にして寒し、寒ければ又變通して春となる、此外天地の化育と云ふことなし、此化育さへ紊れば、万物各己々と相續して盡きさるなり、茶磨をさへ回らせば茶は茶か自ら茶と現はるゝ也、磨は非す磨にはあらすと云ふは茶を磨へこちから入れさる者下さざるなり、夫万物を生すと云へとも、種をおろさ、れば生せさるなり、是天は化育而已にして物を造ることなし、人主の人を養ふか如し、養は化育なり、人主か人を作るにてはなし、人をは生すへき人ありて各々に生出せり、天道万物を化育す、人主万民を化育するも同じ道理也。

一或人曰く天地のことは物をこしらへて成すにあらざ、只自然なり、自然なるに依りてやすしと云ふ、我此にをいて説きて曰く、何ことも前にこしらへずしてひよつと出生するならば、是を自然とも云へし、前にこしらへて時至りて出現することは、みな因縁なり自然にあらざ、儒道には自然と云ひ、佛法には因縁因果と云ふ、今汝か云ふ、天地のことはこしらへずして自然なりと云ふ、我今言ふ所、天地万物皆こしらへて出たる物なり、是を以て自然に非ず因縁なりと云ふ、天地のことはこしらへず自然なりと云ふは然らず、立春正月の節至りて春の色現はるゝと雖も、十一月の中冬至よりはや一陽來復してこしらへ立て、正月の節に至り、其色を顯はす者也、前置なくして正月の節は俄に其色現はるゝにあらざ、冬至よりこしらへて立春にいたるを因と云ひ、立春以後春の色顯はるゝを果と云ふ、これによつて佛法には因なくして果有ることなし、物は種々殖えすしては天も生するとなし、種をおろすを因と云ひ、生して實るを果と云ふ、因果の果は菓の義なり、人盜をす、天に盜の性あらざ、人自ら盜をす、何とも天也と云はば盜の性ありて天これを人に賦與する乎、さうには非ず、習ひ性となるは最初の一念が盜の因なり。

一五常は綱目の如し、一目を引上くるときは則ち衆目これに従ふ、一仁をあくるときは則ち四常眷屬と成りて之に相従ふ、一義をあくるも亦同じ、一禮一智一信をあくるも亦皆其舉崇ふもの首領と成

るときは、則ち四者相従ふて以て眷屬となる、何を管五常のみならん乎、百行皆然るなり、凡そ事は一是、万事なり、之、万端と謂ふ、一の本あるゆへなり、仁も亦端なり、義も亦端なり、百行万行皆端也、蓋異端と云ふは、一端を擧げ用ゆるときは、則ち其外を指して異端と謂ふべき也、仁を行へば則ち外四つは異端なり、義を行ふときは則ち義を行ふ者のために、仁も亦異端なり、夫仁はひろく愛する也、有義無義共に廣く愛するのうちに在るときは、則ち義を行ふものゝために害あり仁を以て義を奪ふ故なり、害あるときは則ち義のために是異端なり、譬へば琴を造る者、琴を造るの工を專にせずして、笛を造らんとするの工を交するか如きは、則ち琴をつくるものゝ害なり、故に曰く、異をする是害而已、只其一事を專らにすべきの教なり、此教と云ふは始め修行底の人、特に之に依りて中を超へ上に及ぶ、則ち異端を交ゆるも亦其事の助けとなる事異なりと雖も、工ひ所の智は万事に渉る、其工ひ所の智を用ゆるときは、則ち之を用ゆるも亦可也、これを用ゆるに琴も亦可なり、異端亦豈我作す所の助ならざらん乎。

一仁の字をこれと謂ふも可なり、これを末と謂ふも可也、仁の字これを本と謂ふときは、則ち仁義禮智四端の仁にあらざ、是性理の別稱なり、休なり、仁義禮智の時是用あり、己に四端と言ひ本と言はず、惻隱の心は仁の端也、或は曰く、仁はひろくあはするの理也、是皆仁を以て体とし本と

す、四端の仁の字にはあらず、仁義は末なり、本にあらざるなり、も一之を本と謂ふときは、則ち人其愛未だ生せず、成敗未だ分たざる時これを仁と謂はん乎、これを仁と謂ん乎、已に博く愛するの心顯るゝを以て、仁者と謂ひ、己に成敗分明の心顯るゝを以て、義者と謂ふ、顯はれざるの時何を以て仁といひ、義といはん乎、水を酌んでこれを酒と謂ふへからず、これを酢と謂ふへからず、己に化して酒と成り、酢と成り、而して後に、之を酒と謂ひ、之を酢と謂ふなり、酒酢は末にして水これが本たり、仁義は末にして性これが本たり、喜怒等の七情も又之に同じ。

一人の恐ろしと思ふは鬼なれど、目に見へぬと云へは名のみかり、實に恐ろしと云ふは只人なり、手足健にして面に七竅開き、はたなく辨舌ある人は、無と有と云ひなり、天を地とも曲り、鷲を鴉とも云ひなし、人を失ひ、死罪流罪に云ひなすも人の口也、芥川の邊にて鬼はや一口に食ひてんけりとは云へど、今夜ぞ實に鬼に喰はれしと云ふ人のほちをは見す、人こそおそろしけれ、人は只爐中に一度入れたる炭を又本の炭計に入る、人は行末に眼しい、人の嫌ふ病を受くると云傳へたるこそ實なれ、炭のうちに火の付きたるをも知らずして、釜火須彌を焼くとは有り難きことに云へど、釜火程の火燃付きて増壁につきぬれば、一城を見ながら焼喪はしぬる、其中の人の嘆息か竹挟む火筋の先にあらんことを知らざるものは、實に恐れても餘りあることなり、鬼は恐ろしからず、人の仕

業ほどの恐ろしきとはなし、慎めや。

一物各其始め幽微にして、見る、所僅かなるもの也、寡の長する所世を驚すに及ふものあり、人は只始めを見て長する所を見る故に怖れず、烟々たる火、纒かりと雖も之を救はされは一城を焼くす涓々たる水、纒なりと雖も寡の足る所大船を泛ふ、人生れて静なるを性といふ、性に於て不善なしと雖も、此人長し壯なるよ及び、人を殺し盜をなす、一家を喪し敗り、一城を焼き亡はす、世の人本を知りて末を知らず、鬼神の事をして論多し、其本を問ふときは則ち纒に氣を指す、禮記祭義に云ふ、宰我が曰く、吾鬼神の名を聞く、其所謂を知らず、孔子の玉はく、神と云ふは氣の盛る也、魄と云ふは鬼の盛るなりと、爾云ふ一氣僅に上りて毫芒の如し、其盛るに及んで神の名あり、氣と云ふは魂なり、鬼は魄也、夫子の玉はく、衆生必ず死す、死すれば必ず土に歸す、是これを鬼と謂ふ、骨肉下陰に斃れて野土と爲り、其氣上に發揚して昭明蒸鬱悽愴となると云々、衆生死して野土に歸す、これを鬼と謂ふ、鬼の盛る上に發揚してこれを魄と謂ふ、魂魄合してこれを神と謂ふ、また夫子の玉はく、百物の精神著る、なりと爾云ふ、百物の精上り結りて神と成る、大廟の神、五岳四瀆の神、社稷各聖人これを祭りて儼にするなり。

一人に上中下あり、上の人と云ふは、物毎に心をつけ、其道理を一々觀して、そのこと明らかむる人

を上の人と云ふ、中下の人は何を見るも心を付けず、うはのそらにしてすこす、故に物毎の道理に暗し、道具を見るに上々の物ほど、彫も望、床までも心をつけて仕たる道具は、上の道具也、草の物と云ふに細らざる物ぞ。

一自性を了らざる人は物に就く奇特を見る、眼未だ盡す、真理に至るもの奇特なきを以て奇特とす、凡人の奇特と思ふ處あらは、其人は至人にあらず、至人は奇特なり、奇特無きを以て奇特とす、奇特なきの奇特凡人の得ざる所なり。

一人に何事をも問はれて其答をするに、初めて思惟して問方の義に相合ふやうに云ふへきと、思ふはあし、皆煩惱情識なり、只我心に打向ひて思ふやうに手問を入れすに答へたるは合ふものなり、もし合はずとも是非に及ばず、情識なく思ふだけを云ふたるはよきなり、合せんとすれば、皆却て相合はざるなり、思ふだけをたまに入れすに答へて、いやさては違ひぬと云ふときは、如何様にも情解すへし。

一薰物に貝甲を入ると、彼の臭きをかりて芳きを衣小袖にとめるなり、貝甲更に芳きものにあらず臭きを以て能とす、佛菩薩化身再來して世を救ふにも、衆生の煩惱をからされば化身再來はならぬなり、佛祖の心は着く處なき也、衆生の煩惱の念よりものに着く、故にその念をかりて、母の胎に

着きて出現するなり、香は軽くして物に残り難し、貝甲の臭きは重くしてよく物につくを以て、借りてその香に和して薫を衣に留める也。

一古書に曰く、記誦の學は人の師とするに足らずと云々、今の世名を發する者は見たるを能く覺ゆる生質、以て、その誦する那良馬、行くか如く、以て人の耳を驚かす、それ難問をするに及んては少しも聖理を知ることなし、寔に記誦の學たる者乎、よく聖理を窮めることは記誦の才にあらず、理はもと言にあらず言を閉ぢて心以て會す、心もつて會して後に言以て顯はす、心以て會せずして言妄りに發す、豈人の師たらんや。

一生死即涅槃、煩惱即菩提、迷悟不二と、教ゆることは、本來空寂にして生死なし、煩惱の實性即ち正覺なり、迷と思ふは、即ち悟なり、一切の作業は幻夢の如くにして、本來ないものぞ見れば一切に相を見ず、一切に相を見されば執着を離る、執着を斷んかために破相を示すなり、相を破して後執を斷し了り、還り來て世間を見るときは、則ち破相すへきもなく斷執すへきもなし、然るを今の禪宗、十分相に着し執を持し、向上の人の行履上の言説を取て以て我有とす、天地懸隔せり、眼を閉ぢて色を説くか如し。

一有義の善惡は、善惡共善なり、無義の善惡は善惡共に惡なり、人を敗くは惡に似たりと雖も、義

を以て人を敗り悪を懲し、義を以て人を成すときは善を勤めるなり、悪を懲して人をして善に進ましむ、勸善は人をして善を益さしむ、悪人を成り、善人を敗る、成る所、敗る所、總て是惡徒無義也。

一 欲は人の貴ふ所なり、有欲は人の賤しむ所あり、然りと雖も有義の欲は無欲に勝れり、無義の無欲は有欲に劣れり、有功と無功となり、有欲にして施すことを知る者は義あり功あり、人として犬馬の如く金銀を見る者は義なく功なし、金銀は寶なり、豈貴ひざらん乎、豈欲せざらん乎、然れども布用ひざるるときは則ち瓦の如き而已。

一 あそこなる物取りて來よと云ふに、言ふ人の顔を見るは利根のものなり、言ふ人の顔は見すしてあそこへ行けども、終に云ふ人のいふ所に行き向はす、鈍利かくの如く遠ふなり、猿槩の能するに鼓打一つ聲をうてどもうてども、大夫出でず、かゝる時鼓打待兼て、樂屋を頻に見ること、尤も見にくし、樂屋を見ずして芝居を見れば、人の顔の色にて出るか出口かは能く知るゝと云ふ。

一 道の至極は皆靜なり、中庸に合ふ、中に過ぐるもの氣の馳るなりと、性理大全に見へたり、氣の走るは皆勿忙の故なり、至人は皆靜なり、一より二三を想へ、四にはしるはこれ中を過ぎて皆大過なり。

一 鏡を水に入るゝときは曇りて見へず、湯に入るゝときは明かなりとは何の謂ぞや、火の源を益して

以て陰翳を消す、水の主を益して以て陽光を制む。

一 今人古人風俗同じからず、古を是とし今を非とするものは古人なり、古を非とし今を是とするものは今人也、古人今人の間に於て、好しとする所あるへり、聖道に違ふ事は今人好しとする所と雖も我は從ひかたし、道理にそむくほどのことにもあらず、當世の風体、座舖の起居振舞、茶を點し、酒を酌み、衣裳の着なしなどのことは學ひなし、見習ひて今時の人の目宜きやうにすへきことなり、古はかくなかりしを今はかくの如くする、一向に惡しとて情強く云ふは偏枯なり、古人は死して遠し、來てこれを見ず、今人は生きて近く在りてこれを見る、よしとも見よ、あしとも見よ、好惡は今人の目にあれど今人の目に宜きやうにそへきことなり、如何に今人の目によしとも道理に負き聖道に違ふことと言ひ難し、行ひ難し、空侍者か云く、師の言に不審あり、古人は死して遠し來てこれを見すと云へども、今人の風俗を嫌ふは即ち古人なり、然れば今時に古へあり、今人古人目をならへて之を見る、古人の風情を學は、今人の目に宜しかるへからず、これを嫌ふへし、今人の風情を學は、古人の目に宜しかるへからずして、これを嫌ふへし、是をせんこと如何そや、我答て云ふ、されはこそ一を聞て二をさかす、古人今人の間に道有るへしと云はすや、古とて偏に宜しきにあらし、今とて偏にあしからし、宜しきに從ふへし、理を負くへからず、道に違ふへからず、道理

に負かざる事當時の風情とて悪からず、古きを温ねて新きを知るの心にも近からんかも。

一當世と云ふことは今に限らず三十年前は今の昔より、今の昔は三十年前の當世なり、今當世を嫌ふ人は、今の昔の風を好む人なり、若し當世を偏に嫌はし、三十年前の當世をも嫌うへし、三十年前にも昔あるへし、其昔にも又當世あるへし、然らば當世を捨て偏に昔とこのむ人、いつを昔ぞ定むへきそや、好むへき道嫌ふへき道は、昔今に依るへからず、凡二十年には風俗少しは違ふ物とをばゆるなり。

一或人曰く、我人のために拔若することは自然にあるへし、興樂することは我手柄に及ひかたしといへり、予曰く、扱苦こそ即ち興樂よ、苦のなきか樂なるを如何してさば仰せらるゝそ、其人曰く、扱苦の外に丁重人を樂ましむることあらん歟、予曰く、それは佚遊佚樂とて聖賢の嫌うことなり、只苦のなきか樂と云へば、笑ふて興トき、又佛法に樂と云はれしは別なり、假令苦なりとも樂かあらはそれも苦なり、樂あつて苦なきことあたはず、苦樂ともになきこそ、眞實の樂なるへけれ、寂滅爲樂と佛も説けり。

一當世の人を見るに、南北に奔走し東西に往來して、富家の門を數へ、偏へに飯錢を求めるかためなり、一二五の家人を養ふて我等輿に扶けられ渠を使ふと思へり、渠を使ふに似たりと雖も、唯渠につらばるゝなり、五人の家人を養ふ者五人の苦を受け、十人を養ふものは十人の苦を受け、五人を養ふ時は十人の糧を得されけ養はれず、これを求めんか爲に南北に奔走する、渠に使はるゝに似たり、幻閣梨傍にありて云く、師の言然り、されどもその家は、其名空しからんは口惜と思ふ故に、名家に使はると思へり、予曰く、士は君に仕へて忠あれば祿是にあり、農は耕を勤む、勤むるときは則ち糧あり、工商各その職にその祿あり、各各家に各糧あれども、苟の職を勤めずして、その糧をくらす、人の能く勤め、富るべきを數へて誂ひ、他人の糧を受け食ふ、これを名家につかはるゝと云はんや、偏に名を耻しめ家を下すなり、頭陀の人信施を食ふは別に道あり、之も亦空しく信施をくらすて道なくは愧也。

一風は陽なり、巽にぞくし、其類又五にして陽なり、然れども之に當るときは、則ち寒冷なり、夏之を招きて涼意をうる、これ何の義ぞ、風を痛むときは則ち必ず寒を憎み壯に熱す、寒を憎むこれ義に當る歟、壯に熱するこれ義にあたるか、また風に暖風あり寒風あり、これもまた風に寒暖の二性ある歟、答へて曰く、風は動生を身とするものなり、故に陽なり、火の勢なり、東南のすみより起る、問ふて云ふ、既に八風あり、甚だしどては東南に限る乎、風の性よく往々するものまたきたる、南風の後は、必ず北より回りにて以て雨ふる、東西もまた以て同し、然れども亦陰陽あらざる所

なし、又その處にその風の風あり、則ち八風ありて往來すと雖も、先つその本を指すときは、則ち位巽なるか故に東南の隅といふなり、又問ふ、風に當るときは則ち冷なり、陽の勢甚にしとして、既に冷なるや、答へて云く、風身にあたるときは則ち表の氣裏に藏る故に、表處にして冷意をうる、氣を裏に藏る漸く蒸蒸して發熱す、これを治むるに冷氣を、て外に發散せしむるときは則ち愈ゆ、氣本復する故なり、風、暖寒の二はなけれども、來る所の方に依るかゆへに暖寒あり、南北東西も亦同じ。

一盲人より物を荷ふて津に入る、津北に在り、北に向ひて行く、南より多く人馬競ひきたる、盲人耳をうはかて、聞きてこれを辨ふ、行くにをいてその難なし、然るときは則ち耳を以、目の用を足す予此に於てこれを思ふ、盲人は耳をもつて目とし、聾人は目を以て耳とするものなり、もし六根の名ひとりして其の事を辨せは、盲人は何として向ふもの辨せん乎、盲人といへども言を以てするときは則ち色を辨し、聾人といへども聲を以てするときは則ち聲を辨し、何によつて此の如くなるや、心主ある故なり、六根ありと雖も心なければ何そ此の如くならん乎、故に心を失ふものは狂亂す、目明かにして見えざるか如し、耳聰して聞かざるか如きなり、一心は是身の主君なり、六根は是六臣なり、臣、君に奉するに外事を以てす、君は臣に勅するに内設を以てす、君を失ふときは

則ち臣々たらず、故に六根ありと雖も死人は物を辨へざるなり。

一桶を荷ふもの南に向ひ行く、兩人屢ばその先を辭す、一人の曰く、吾桶甚た輕し子先つ行くへし、此に於て此語をききて己に進む、兩人の心黔首なりと雖も、仁あり、義あり、禮あり、輕さを荷ふものさつ進むときは、則ち歩速にしてその従ふもの苦む、重を荷ふものさつ進むときは、則ちその量に應じて遲速我にあり、故に輕さをになふ者、重をになふもの、勞を知る、仁此に在り、兩人屢辭す、禮此に在り、終に重を荷ふもの先に進む、義此にあり、士民すら猶此の如し、况や上の人にてをを。

一或人樂を問ふ、答へて云ふ、上品の樂は樂なきなり、苦もな、樂もなきを上とす、これ寂滅爲樂なり、其次は中を答ふ、一切の事中を以て樂とす、如何となれば寢るほど樂はなし、然れども朝より暮に至るまで起るなどいは、則ち苦なり、又寢てはかり居るを苦と思ふ時起るは樂なり、然るをまた終夜起き、居よと云は、又起るを以て苦とす、起臥どもに中を得るを樂とす、過くるときは則ち共に苦なり、甘草はあまくして人皆食ふ、甘草、りとも日夜食せよと云は、その苦きこと黃連の如し、久しく居るときは則ち立つを樂とす、立つこと久しきときは則ち又苦なり、その中を得て以て樂とす、飢えては食願ひ、食をもつて樂とす、飽くときは則ち食を以て苦とす、中を得る

ときは則ち是真の樂なり、物を見て目を悦はしめ、久しく見るときは則ち苦なり、中を得るときは則ち樂なり、萬事共にかくの如し、然るときは則ち中これ樂なり、その次の樂は足ることを知るなり、たるをしるものは寡き。以て多しと、足るを知らざるものは多きを以て寡しとす、足ることを知らずして願ひあるものは一生苦み、足ることを知りてもとめなきものは貧を以て樂む、人皆貧をくるしむ、然るに貧をさへ樂むときは則ち何の苦かあらん、則ち是を樂とする故に樂と爲る、故に足ることを知るは極樂の國なりと云へり、その次は小人の樂也、言ふに足らざる而已。

一名所舊跡を見ることが好む人は、目を樂ましめて脚を苦ましむ、願ひ食人は舌を樂ましめ心を苦まむ之を求むるに心を勞せされは食足らず、衣は輕きを求め、居は易きをもとむ、人は身を樂ましめは心を苦む、心を苦めしめて輕きを衣、易きに居ることは難し、身を樂ましめたるものは耻に近、心、樂ましめたるものは耻に遠し。

一君子は樂みをもとめず、樂み窮る時は苦必ず來る、况やまた耻あるを乎、先づ樂みをもとめて、樂みの前に於て苦を積るときは、則ち樂みきたらず、樂みきたるときは、苦み樂中に伏し來りて、その樂みの窮るとき其苦則ち顯はる、樂をもとむるにその樂の前に於て苦をつむの義如何、例へば人料理をなして食するか如し、朝より之を營んで暮に至て之を食し、或は前日より營み前々日より營

んでうの樂半時に過ぎず、營む人は苦む、食する人は樂む、これ樂みの前に苦を積むにあらざる乎。

一高麗唐土の珍器異具、願ひ求めてこれを愛する人は尤も人の常なり、吾此に望みなし、吾人間に心なく、貴介公子と交はり、花の「月」の日に、會席を設け茶香の遊ひによつて日を過さんと思ふ心なし、一間の茅屋に紙被を綴り、一領の綿衣を身に纏ひ、僧形を破らざるのしるしを表して、生を送り死を待つの外あらまじきと思へばなり、さながら又物の善惡知らぬほどの心にもあなれば、一旦は眼をつるを、ことおれども繼々求め願ふ心なし、我一得ののしみあり、願ひ求むる人は苦なり、今大人のために引出されて人間に在り、予か樂みにあらざるなり。

一兎に角に何事も遮はれぬものに決定せば、人は私曲の耻はあるまじきものなり、唯藏せぬ藏さるゝものと思ふ故に顯はれて耻を受く、能く藏されぬ物なればこそ、盜人は已に顯はるれば身を亡はすにきわまりぬ、何程の才覚をいだし力め藏さんと思ふれども、古今盜人の顯はれるはなし況や亦其餘事をや、身と亡はし命を失ふことの盜程には人思ふへからず、然らば盜の外のこと又何そ人之を知らざらん乎、故に雲かゝる茶に獨り居るとも、君子は行跡を亂すことあるへからず、實に君子は獨りを慎むなり、我心を謂ふ、我行ひ亂るゝときは、則ち人未だ知らずと雖も、我心まつこれを知る、況や人の知るをや、心の形に顯はるゝ紅よりも甚たし。

一名圃は諸道に好まざる所なり、然りと雖も實にあたるときは則ち可なり、名は外より揚げる所なり、實は我に在り、名は我求めずと雖も、實我に在るときは則ち人これを揚げる、實に常りてあかるべきは則ち可なり、虚名に拙し。

一書をよく讀む人の道義なきは、只下戸の酒と云ふ字をかき文字、讀みもするか如し、酒といふ字は書けども酒徳に觸れざるなり、書は目に觸るゝこともなれども、道義のうなへある人は上戸かれども酒と云ふ字知らざるか如し、酒の字知らねども酒徳にふれるなり。

一酒挿まる人用捨なき故に、箒を以て茗荷草の五分一寸づゝ萌したると悉く損ふ、之を悲しく思ひ、枯れたる竹の枝を折り來て之を立て、垣とし扶く、傍に童子在り、之を悲しむとも長したらんときは之を切り必ず食用とすへし、悲しむに足らずと云ふ、予曰く、仁心の草木に及ふと云ふことを知らずやと、これを教へけり、草木時を得て斷るときは則ち義にあたるなり、漸く土を出て寸計りにしてしかも徒に之を害ふときは則ち愛なし又義なし、その後禮記を讀むに曾子曰く、樹木時を以て之を伐り、禽獸時を以て之を殺す、夫子の玉はく、一樹を斷ち一獸を殺す、その時を以てせされば、孝にあらざるなり、時に彼の童子を呼んで説いて再びこれを教ゆ、童子曰く、一樹を斷ち獸を殺す、何に依つてか孝不孝ありや、曰く、樹を斷ち獸を殺す皆時を以てす、もし其時を失ふときは則ち義に

負く汝見ざる乎、曾子曰く、身は父母の遺体なり、行ひは父母の遺行なり、敢て敬せざらん乎と云へり、汝か身汝行皆父母の遺体なり、遺行なれば汝か一切の言行義に負くときは、則ち父母を耻かしむる、これ不孝にあらずや、汝か耻は父母の耻なれば、孝子これを思はざらんや、一切義にあたらざるの州皆不孝なり、只養を以て孝とするときは則ち犬馬もやしなふことあり。

一或人孝を予に問ふ、答へて曰く、孝外になし、別に以て孝を答へかたし、進退禮あり、禮に負くときは則ち孝にあらず起臥時あり、時を失ふときは則ち孝にあらず、飲食量あり、量不超ゆれば則ち孝にあらざる也、視聽言動一にして孝にあらざるなし、百事は百事と共に、萬事は萬事と共に、皆道にあたるときは則ち孝なり、道に負くときは則ち不孝なり、一切の行ひ皆父母の遺行なり、汝に依りて父母を耻かしむ、古の皇は孝を以て天下を治む、豈當然ならざらん乎、一切道に合ふ、皆これ孝なり、一切道に合はざる皆不孝なり、一事も孝の外なきなり、朝寝するも不孝なり、晝寝するも不孝なり、さのみ夜話し久しきも不孝なり、高談高笑するも不孝なり、大酒大飲も不孝なり、夜行の流連も不孝なり、武士の未練最も不孝、出家の亂行最も不孝、喧嘩口論みな不孝、病者の禁せざる是れ不孝、病なきもの、強も亦不孝、罪なきを殺す不孝なり、功なくしてあくるも不孝なり、賦を厚ふする是れ不孝、博奕好色最も不孝、主に不忠もまた不孝、兄弟不和是れ不孝、進退義にそむ

く皆不孝、人は唯養ふを以て孝と思ふなり、(孔子の玉はく、今の孝はこれよく養ふを謂ふ、犬馬に
わかたん
乎と云々)

一蟹は甲より似せて穴をほり、人は心に似せて家を營ひ、されは家に大小あれは心に大小あり、蓋心は
私にわらず天の心なり、假に身にやどせり、天心に大小あるへからず、大小は人の著する所にあり
好惡邪正は氣質の性なり、性を踐むものは死して天に昇り、氣を踐むものは死して地に降りて必ず
地の禍に罹る、佛法に流轉を恐る、如來一代の教法、祖師歴代の用心、これを本とせり。

一神罰冥罰ありと云ふ、凡下は教への如く之を信す、中人は智慧未だ至らず之を信せず、皆罰なき
ものちやと思へり、至人はよく知れり、故に人に教ゆれども人之を信せず、下と上とは罰を信する
こと均しけれども、道理を知りて信すると、知らずして信するとのかはり也、智未だ至らずして信
せざらんよりは、知らずして信する凡下は勝れり、至人に相似たり、中人は人の誨を受く、罪はなを
惡の如し、言ふ心は前に慎ますして後惡身に昇る、これを罰と謂ふ、神の罰、佛の罰、君の罰、親
の罰、兄弟の罰、知音の罰、民の罰、衆生の罰、一々義に負くときは則ちあたらすと云ふことなし
皆人錯れり、蓋人の思ふ所の罰は天上に冥府冥官あり、人惡をなすときは則ち冥官これを見て罰を
充つると、初思ひのちまた分別して中智發して何の冥官かあらん、人惡事身に上り來るも亦自然と

謂ふ、誰あつて罰を加ふと云ふこと、これは初めに思ふも錯なり、後(罰)して思ふも錯なり、唯
物の積む所なり、惡をつめは惡來り、善をつめは善來る、人の身の善惡禍福自然に成じ俄せんなり
と思へり、積を以てきたること人これを知らざるなり、例へば家富める人二人あり、各一子あり、家
富む故一子を以て慈悲尋常にせず、莊飾を飽迄に、飲食を飽しめ百事足らざることなし、この一
子勞をなさずして衣、苦を知らずして食し、百事思ふことなし、或時親死し家衰へ財盡き孤となり
後親あるべきの心をわすれず、勞を爲さずして衣んど欲し、苦を知らずして食はんと欲す、百事思
ふことなくて足らんことを要す、拙てあたはず、人これを救ふことなく、自ら給するに力無し、故
に乞ふて食し、乞ふて衣る、初めは人に羨まれ、後には却て人のために耻しめらる、又一人の富家
の一子は、その父母の慈悲尋常ならず、莊飾飲食百事たらずと云ふこと無し、その一子の心向ふ所
別なり、父母吾に於て慈愛すること深し、吾孝行なくんはある、からず、父母勞を以て財を得、吾
の財を以て父母吾を莊飾す、吾れ父母の勞を思はずんは天吾を罰せん、父母勞して以て吾を養ふ、吾
これを飽食す、心を用ゆることなくんは天吾を罰せん、一日これを食ふの功を作さずんは、吾くら
はすと云ふて力を親に歇す、あるとき親死す、その子よく家を治め財を休ち、身を直くして親を
てはすかしめず、此二子の間に於て罰を蒙ると、罰をこをむらざるとあり、終日心をもちひ、艱難

を経るものは艱難に逢ふ時艱難に堪ゆ、故に身を保つ、終日用心なく父母の慈愛に管せは、冥慮を知らず、艱難を経ざるものは無事に於て違ふことなく、艱難に逢ふとき艱難に堪へざるなり、只吾を罰するものは吾なり天に非ず、即ち之を名けて天と曰ふ、天は理の當然を謂ふ、理のわたる所皆これを天と謂ふ、それ人義に負けば身に悪を生ず、これを罰と謂ふ、その義親に負けるときは則ち親の罰と曰ひ、その義君に負けるときは則ち君の罰と曰ひ、兄弟に於るときは則ち兄弟の罰と曰ひ、智音に於るときは則ち智音の罰と曰ふ、賦を厚くし民を苦しめ、其身佚遊佚樂のためにて後惡その身に上る、その義を民にそむく、これを民罰と謂ふ、勞をなさずして金銀を泥沙の如くするときは則ちその義金銀にそむく之を金銀の罰と謂ふ、その罰異なりと雖も、天理は一なり、人の罰する所は通るゝ所あり、理の罰する所に通るゝ所無し、天理怖れざるへけん乎、天理とは皆數なり、數盡るときは即ち亡ふ、人三十年用心なく、樂をするときは則ち豫め樂の數を盡す、故に三十年を終りて樂なくして苦み多し、初め三十年心を用ひて艱苦を歷るときは則ち樂の數残りて三十年を終りに安し、初め三十年の苦は正に堪ゆへし、終り三十年の苦は堪へかたし、前に苦を以てし後に樂を以てするは最も可なり、前に樂を以てし、後に苦を以てするは不可なり、萬事皆數也。

一耻を以て耻とせされば身に苦なし、耻を知るものは身を苦む、富家の門に倚つて乞ふて以て食し、人

によつて乞ふて以て衣、足を以て飢寒を充つ、只耻を知るに因て、四民の業によつて身を苦めて自ら給せんと欲するものなり、豈衣食のみならんや、萬般の事耻を知るを以て身を苦む、身を苦むるを以て人なり、耻を思はずして身を安んずることを謀るものは人にあらず、夫人として身安きときは則ち耻あることを知らず、君子は身を苦めて以て父母を耻しめず、兄弟朋友を以ても耻しめざるなり、君子は身を苦めて以て耻を避く、これを身を安んずるとす、小人は耻を蒙ると雖ども、衣食足り、起臥吾に在るを之を身を安んずるとす、只これ身心を安んずると、形をやすんずるとの二なり、其形は一世に朽ち孽をのこすなし、其心は萬世に傳へ摸規を取る、故に明教に曰く、伯夷叔齊、古の餓夫なり、今斯人を以てこれに比して人皆喜ぶ、桀紂幽厲は古の人主なり、今それを以て之に比して人皆怒るなり、これ形に就かず只心に就くものなり。

一媚と懶の字同一、夫人少き時は萬に懶くして、所作に荒むものなり、痛く責むへからず、草木なども媚き縁はたよ／＼として、さはらは折るへき程に見ゆ、人の形も強からず十五の兒女の弱々として所作に忍ぶへきとも見へず、これ媚きときの体なり、懶と云ふ字の意あり、然りとて又なるをまゝにせば其人老ひて悔ひあるへし、漸々にして諫むる心を得て以て自ら進むへきやうに教ゆへきなり。

一人は薪盡きて火滅ゆるか如し、佛の説き給ふ程に欲しきも目の業、目なくなれば欲しき共に滅して
なくなり、床しきもゆかしきと知らず、目既に滅すれば床しき心も共に滅するほどに、輪回と云
ふこともないと思得るは悪しきそ、薪か盡くれば火も共に滅するは勿論なり、其薪其火は消ゆるに
相定まれり、然るを其薪盡る時、其火を別の薪に投すれば、其火又新しくなりて燃ることはなきも
のに候や、薪は盡くれば火は滅するものに定まれるを、已れ計りて薪に移して其火たゆる期なし、人
も當然なり、當然にして滅すれば、殘ると云ふことはなきを已れ計りて、念を物にうつして、念々
斷ゆる期なし、之を辨へずして唯滅して跡なしと思ふは誤なり、人毎に火は滅してなくなると思ふ
は誤なり、其火は滅し其薪は盡くれども、火の性は滅せざるなり、只其薪其火、一分々々の火とあ
らはれたる火の形は滅すれども、性は滅せずして天に歸して、天より物を生ずれば、生ずるものに
一々火徳具はりて、吾儘に火を取出すときは火の滅することは無く、六十餘州の内一火なく、火
と云ふものを悉く滅して末代火と云ふことは無きものならば、火滅するにきはまるへし、一天下の
火を悉く滅したりども、即利火をたきつくへし、然らば火の滅する物にあらず、火の滅すると云ふ
は實に滅亡すると云ふ義歟、曰く火は實に滅せず、問ふ、滅せずんば何ぞ火滅すと云へるぞ、曰
く火の英氣滅す、之を火滅すと云ふ、火の性萬古滅せず、薪火を成し、火焰を生ず、此火焰は火性

より生ず、火焰滅すと雖も火性滅せず、故に石より火あり、木にも火あり、万物皆火性あらざるこ
となし、天下の火一時に滅すと雖も、火性は滅せざる故に石を打ちて火をいたし、木を鑽めば火を
生ず、これ其證據なり。

一 龜毛侍者曰く、薪つくる時、火を別の薪にうつして、火滅することなし、又心は萬世に傳ふと、然
らば先尼外道か言の如く、喩へば人の轉宅する如きや如何、答へて曰く、火薪に移すと云ふは、薪
に黑白二品あり、何も身口意の淨と不淨によりて、不淨は黒業なれば黒薪を成就し、淨は白善業な
れば白薪成る、業か即薪なれば薪か即火なる故に、業風に吹れて羅刹鬼國へも移り、兜率天上へも
昇り、寂光の淨土へも移るあり、また心とは凡夫の思ふ、慮知念覺妄想分別の心を云にはあらず、火
宅僧の謂ゆる、際もなき法身際もなき解脱の異稱にして、日月の光に超過せし光輪なれば、萬世は
おろか劫盡世派すれども、眞實を照して有にあらざ、不可思議の眞實なるものか。

一 龜毛子問ふ、孟柯人の性と犬牛の性と異也と謂ふ、然ば二性あるや、答ふ、二性なし、然らば物は
その偏を得、人はその全を得るか、答ふ、否なり、然らば人と物と同じさか、答ふ不變の體は同じ
く隨縁の用は異なり、故に佛の玉はく、法身六道に流轉すと是なり。

一 濕氣は暫時もをそるへし、乾栗をもつて掌中に握るときは、則ち忽然として堅きを失ふて、これを

咬むに甚た軟かなり、初めより口に入る、ときは、則ち口中潤ひ多しと雖も、掌中潤ひなしと雖も、生發の氣あるを以てなり、口中は粘唾ありと雖も、生發の氣なき故なり、ものを以て蒸すと湯に漬けるとの異なり、蒸すものは早く氣通して軟かなり、漬けるものは直に湯に合ふと雖も軟かなること遅し、生發の氣あたらざる故なり。

一人皆我飢を知りて人の飢を知らず、故に人を憐むの心なし、我飢を知りては何う人を憐まざらん、放逸の人はたゞわれを知りて、人を知らず。

一大なる蜘蛛、檐にかゝりたるを地に落せば、足を收め石の如く成りて死を遁れんことを計る、彼か小智にて人々計らんぞす、少しなりとも走り遁るればその程も命存すへし、彼か謀計は人よく知れり彼ら思ふへし、人は知らじと、無智の人、有智の人を計ることも蜘蛛の謀計に同じ。

一また毛蟲の大なるもの地上に行く、之を犯すときは則ち憤然として窟穹れり、此の如くなれども人之をことごとく思はず、小人の大人に向つて此の如きの風情をなすこと、毛蟲にことならず。

一香をきくに最初にちやつと鼻へ入れたる時、之は何れの香じやよとさしたるが、大方はわたるものなり、そこを感ふて又聞ひて見、いろ／＼にすればわたらぬものなり、それを如何となれば最初にちやつと聞くは、才覺分別なし、これ我本心感ずる故に正直なり、後又取りてかぎ、再三きくとき

はこれ血氣分別なり、血氣に感はされむざとしたる物になるなり、最初にきいてそれがわたらすはあたらぬと思ふべきなり、酒茶を試るも同じことなり、最初一口飲むときならては知られぬものなり、再三味へは一向に知られぬものなり、詩句を吟味するも亦同じ、よくもなや句なれどもひたご何返も吟すれば、口になれて能きやうに覺るものなり、最初一返二返よむべき、好し悪し知らるものなり、又よく吟味すへきと思は、吟して置き、一兩日後に讀見れば又新しくなりて、初め再三讀んで好しと思ふ句の悪き所か知るものなり、其時も別にふしもなく覺へば、初めよきと思ふ所か違はぬと知るべし、文章を書出すときはよく聞へたと思ふものなり、はる／＼後に取出て讀んで見れば、すまぬ所かあるものなり、是を以て詩を知ること、重陰に至りて始めて功を見るべし云へること、此重陰は返をかさぬるにてもあるへし、大方は吟し棄て置き、間をへたて、重て吟するの意なるべし。

一塵回なる人を初めて見たるときは、さて見苦きの人物やと思へども、慣れて毎日見れば後は見よきものあり、これ血氣誤られて此のことく、最初の一念は本心に感ずる故に其もの好し悪しをわりの儘に知るなり、されは人の好悪はよく見ゆるものなり、我好悪をは知らぬものなり、我所作は我身になれて知られぬものなり、又悪きと知り、枉げて悪をするは道の外なり。

一多欲の人は却て無欲なり、多欲の人多く財を得んと思ふて、中を越へて多なる故に、集めたる財を一時に官に奪はれ、剩へ其身を亡す、則ち財を奪はるゝのみならず、一つある命を添へて失ふ、則ち多欲の人は無欲の人なり、小欲の人は其分に随つて得る所の財をよく保つて、其身を全ふして天命を終ふ、これ多財を得るなりと思へり、否なるや、或人曰く、然らば多く財をわつむるを富と云ふことは、總してあるまじきこと歟、天下の者皆貧人たるへさかど云ふ、われ云ふ、その中を得るときは則ち富も亦得たり、その儀も亦得たり、貧るときは則ち貧も亦得たり、天下何ぞ貧人たらんや、故に曰く、不義にして富み且つ貴きは我にをいて浮雲の如しと云へり、義にあたるるときは則ち何ぞこれに照さらん。

一何事もせんと思ふことをせんと思切りてするは本心なり、斯うせうかせまじきかど二途にわたるは血氣なり、二途にわたりに分別窮らざることをすれば必ずあし、是血氣に惑はざるなり、此事をせんと思はゞ一途にしたかよし、二途にわたる程ならはすへからず、初め一氣は皆本心なり、ふたつにわたるは血氣なり、本心ならはみなよし、血氣はあし。

一何事もをづるなく、をづれば仕損ふぞ、をづる平生のこと、場へいて、はをつるをつるなく、滑をばづんと飛べ危しと思へば、はまるぞ。

一財寶も骨を折つて手間を入れたるは遅く盡るなり、骨を折らす手間を入れずして得たる財は早く盡るぞ、色を塗らぬくりに久しくして、返を重ねたるは遅く、疾く塗り返を重ねざるものは早く剝ぐるぞ。

一或時生の榎の水を含みたるを、そと焼きてかみわらんとすると、ことごとくしをひゆる程跳る、これ陰水内にありて、火之を攻むるなり、雷空に鳴るの心あり、陽火水雲につゝまる、陽火内より走り破りてその聲空に響きわたるなり、鳴る所は一所なれとも響き、四方へとはる音々わら〜と鳴る也。

一我を人は可笑しと見ゆへし、餘義なきことなり、然れども其時に相應の「識」と思へし、煎豆を食ふに大粒より食へば果まで入粒と喰ふと云へり、百粒あるときの大粒ある豆と、五十粒あるとき其内の大粒ごり、變はるへけれども、其内にて大粒なるを吉しとす、然れば古の知識はさう有らん、此時にあたりては此時の内の知識をつとむへきこと歟、此時にをいて古の知識を思へども遇ふことならず、百粒なりしときの大粒なる豆を望みては、五十粒のときは其望み叶はず、されども悪知識の邪見に引きたらば、一言承旨と引くなるへし。

一的傳の僧はころりと餓え死ねど先師は教へ給ひしものを、一的傳と云ふことは早く衣を改めたを云ふ

にあらず、師家の我家の的傳など、云はゞ是非に及ハず、衣を早く改めたる程に我は的傳ぢやなど思ふことは然らず、總て的傳とは其一家々々の區別にて皆的傳なり、紫野には虛堂南浦との傳する、東福には無準墨一の傳し、又南浦の下にては南浦宗峯との傳し、又濃州遠山には南浦峯翁との傳す然れば紫野派のもの南浦宗峯之を的傳とし、遠山派のものは南浦峯翁之の傳とするなり、天下一人的傳と云ふことは人か許さざるなり、的傳仿出なと云ふことは仔細あることなり、むごど心得て衣をさきに改めたるは的傳と云ふ、笑ふべきなり。

一異相と云ふは、祖録行狀等にも好き方云へり、並々にかかりたる州形あるを云へり、異相なれば必ず其行もまた異なり、人にかはり抽んでたる處あるを異相とは云へり、異産と云ふも同じ、人ど異に生れたるを云ふ、異人など云ふも世上並の人にてはなし、されは昔の聖賢の相を畫圖に遺したるも、一角ある相見えたり、如何にも面貌圓滿して變はる處もなきやうなるかあれども、それも何處ぞに、人に異なる所あるものぞ、異相と云ふを今の世にむさゝ心けるぞ、異相人杯とて嘲けるは笑しきことぞ、今の世に人の嘲ける異相の人と云ふも、如何様よく心を留めは好き所もあるへし、正直にして曲らず、然るを私曲を以て相待する故ふ、其人に向つて放言し、信心に合すは跡を見せずそこを去る、然るを人異相人と云ふ、これも異相人に理つよし、但し一轍に相定まりたる所を、短

かき處と云ふへき歟、然るを一轍人など、は云ふへし、一轍は聖道にも好きなるなり。

一大隱は市に隠れ、小隱は山に隠る、此語を口に覺へて山隱閑處の人を誹謗す、眞に笑ふへい、出家は樹下石上にあるか本なれば、市中床しく思ふとも山林に居るは本儀なり、山林に居ても市中忘れさるよりは、市中に居て市中に忘れたるはましよとて市中に居るは道にあらそ、況や又山は閑なるものに定まれり、市中は閑はしきにさたまれり、市中に居ても隱逸の心ある人、山林に居ても同じく隱逸の心ある人にしては、山林に入るは上なり、隱逸にして隱地にあるは相應なり、然るを市中を好み、一日も山居閑居に堪へざる人の癖として、閑居の人を云ひけして我非を掩はんとして、大隱の市、小隱の山の語を持來りて眞隱の人を誹謗す、まことに道理を知る人は早く聞くへし、大隱市にかくれ、小隱やまにかくるの語は之を説くと滋味あり、一往に心得かたし、只心は市を忘れずして、身にはかり山を求むる人の爲めに云へる語なり、身も心も市を忘れたらんには山に如くへからず、身心ともに閑なるは山なり、市は縦令心は閑なりとも聞く所喧しく、ある所閑はしければ、身之にありて詮無きなり、智者は水を愛し仁者は山を愛すと云ふも、忙と閑との二つならずや。

一法の外なりとも能く手に熟したる好手のするは、物を損はずして其事なるものなれとも、法に違ふてすまじきことなり、なせにとならば好手のするまねをして、童子或は無分別なるもの、其手未熟

にしてするは必ず事を損ふ程に、すまじきをばして見せぬかよし、ありやうの仕様なきにあらず、法の外は皆略なり、據なり、略は事の草なり、據は道の草なり、例へば小刀を以て疊の上に於て紙を断る、好手はすこしも疊を破らず、或は障子にあて、切れども、好手は障子を破らざるなり、郭人の斬聖のことは好手の業なり。

一器は廢を持さるものなり、殊に重き物を盛りたる器のかどをとれば、廢必ず離れて興をさますものなり、假令無事なるも見て危し、賢人は危きを嫌ふなり。

一縁のある器をもつに、大母指を我手の方へつよく引けば、縁を引缺く、心ありて危し、器の内の方へ大母指を推掛くるやうに、力を入れて持つかよし、得意の人はこれ体のことはよく辨ゆるも雖も童子若輩無骨のもの、ためにはよき教へなり。

一ある夜、三四子爐詰す、一人の云く、古老の人は道を以て甚た秘す、大道うれ然るや、一の小事と雖も、大道を傳ふるか如し、笑ふへし、或老人の云ふ、便桶に向つて小用を便するに旨あり、密にこれを傳ふへし、汝蓋小便のとき直に其桶の中心に便すへからず、其桶の中心に便すれば則ち便の聲ありて人の耳を汚す、便の臭ありて人の鼻を汚す、便を桶の隅に投すれば則ち聲無く臭なしと云ふ、笑ふへしや、予か云く、古人の心深きこと知るへし、此一小事と雖も、此の如し、况やまた大

道にをいてをや、之を一小事といふて容易なるときは、則ち大道これに随つて以て容易なり、道容易なれば人に信なし、信なきときは則ち道立す、この一小事と雖も授くるときは、則ち人之を信して以て之を受く、大道と雖も世の語の如きは、則ち人信せずして之を受けず之を笑ふ、人はこれを傳へずと雖も此一小事定めて誤るへからざるなり、世の人多くは狼藉なり、此一小事と雖も習ふときは則ち得ることあるへし、と云ふ言未だ了らざるに人あり、戸を開き山て便桶に向ひて小用を便す、其聲濼の如し、予曰く、老者の言の如く習ふて是好きか、又老者を笑ふて此の如く狼藉ならが是好きかど、道は了りて笑ふ。

一橋をばわたれ、端をわたるなど云ふは面白き奇話なり、何事のふしなきことども、ふしありさうに云ひなせば、その言葉に興してよく口慣るによりて、はしどだに云へば此言葉を思ひ出し云ひ出して利あり、上のはしは橋なり、下のはしは端なり、橋を渡るに橋の中正をわたれと云へることなり、橋と端とは唱へかはりぬれど、此にてまぎらかして同じ唱へに云ふてよし、鳥は食へ、どりは食ひそど、俗語に云へるも同じ、鳥の脊骨の下おちきて血あり、之をとりど名けるとなり、如何なる仔細そや、鳥とは云ふならん、この血毒にて人にたゝると云へり、これ毒そど人に教へても人胸に留めず、鳥は食へどりな食ひすと綺語に云へば、この詞を興して人このことを思ひ出して利あり、覺

へかたきことを歌括にすれば、よく覺ゆるることし。

一小事を大事にせされは、必らず大事に大事をしいたすぞ、小事なれども仕損して能きにはあらねども、小事なる故によし、うれよとてやみぬ、大事に至り仕損しては實の大事なり。

一夜途と行くに、善人さきに行きて殺害に逢ふ、悪人後に行き 通る、何事ぞ、善人害に逢ひ、悪人幸ひを得る、天の加護と云ふことは、此にはあらざるか、予曰く、これ天道なり、善人ぞて引上げ悪人ぞて推下さは、天道にあらす、天道は悪人をも不捨、善人は猶捨てず、善を取り悪をすつるは天道にあらす、これ人間なり、然らば善を作して善ならず、悪をなして悪ならず、唯自然なり、恐らくは天と云ふもあるへからすと云ふ、予曰く、汝か言の如くならば、汝今日惡をなして見よ、惡積りて汝か身必ず亡ふべし、又予か言に隨つて善をなして見よ、善つんで必ず身立つへし、彼の夜途に先き行くもの善人なるを、天これをして先立しめ禍難を與ふるにあらす、その人自ら行きて禍難に遇ふ、天の作す所にあらす、その人現今に惡人にあらすと雖も過去の業残ることあり、此にをひて不意に人に先立ちて難に遇ふ、また一人の惡人後れて難を通るも亦過去の業、心感することありて一旦難を通るゝなり、これ又一生の惡にあらす、一生の善にあらし、近きときは則ち一生の裏に報を見、遠きときは則ち復生のとき報を見る、そのさきに行くこと不意なりと云へども前業あり

前業の感は不意にあらす、唯不意なりといへり。

一人を崇むるに様と云ふ、御所様、殿様、長老様など云ふ、此の様と云ふこと更に心得すと云ふ人あり、様と云ふは様子と云ふ義なり、その人の容、骨柄、様体など云ふ義なり、然らば人を崇むるの儀わたり難し、様と云ふて崇むるの儀は、例へば貴人は貴人の様なるかよし、貴人の賤しきやうなるはあり、御所は御所の様なるに依つて貴きなり、殿はどの様あるを以て貴し、長老は長老の様なるに依つて貴きはとに、長老様など云へば貴き儀なり、その身の様々を違へぬ處を以つて崇むる心なり、長老は長老の様に御座候よ、殿は殿の様に御座候よと云ふか如し、又長老の様にはないぞ、殿は殿の様にはないぞと云は、貴きにてはなし、殿か殿のやうにあらは貴いぞ、歌の様詩の様など云ふも同じ、歌にうたのさまなくは歌のよきにはあらし、詩に詩のさまなくは詩のよろしきにあらし。

一人皆聖賢の語を咬味は、すして、直に吞却する故に心聖賢の道を執ること無し、譬へば胡椒を好むかことし、之を咬味ふときは則ち其味ひを得るか故にこれを好む、もし一丸を以て直に吞却するときは則ち其辛味を知らず、その辛味を知らざるもの甚として胡椒を好むの意あらん乎、聖賢の道も亦よく咬味ふときは、則ち聖賢の道の善を知る故にこのむ、一切の食味は、すして吞却するときは

則ち好むの意なかるへし、一切の道も亦此のときなり、柿は旨きものなれども咬味ひてころまた食ひたいと思ふ心はあらんか、丸呑みにしては又食ひたいと云ふ心はあるまいそ、聖賢の語も同一聖賢の道を慕はざるも道理なり、また咬ずして呑んでも腹中にて消し、命を養ふものはあるへし、知らして食つても命を養ふものもあるべし、聖賢の語をよく味ひて知るは上なり、知ずして丸呑みにするも、呑ざるにまざる道理はあり、聖賢の道を咬み味はすして口に云ふも、終に道に入るの端となる理あり、工夫深き人にあらすは辨へかたし、佛氏よくこれを知る、譬へは初生の赤子の乳の味を食ひかことし、之は母の乳味ふとも辨へず、此乳味はなにものか乳味となりて、誰か我口へは入るゝとぞ知らずとも、呑めは命を養ふて長となるか如し、長して後はその乳味をよく辨へるときありて、聖賢の書々讀むに、例へは一世に聖人の道に入らずと雖も、これを捨てざるるときは則ち必ず聖道に歸すること有るへし。

一今の世は禪者も教者も、古人の言をつたへて人に示すことは即ち違はされども、偏に意味違ふ故に言者は古人の言にして、道即ち隔懸せり、恰も貝の脊を以て之に合するか如し、左貝右貝、違はずと雖も貝の口合はず、貝の口合はるときは物を容るゝことあたはず、諸家の師言と意味と合はざるときは、身道に容るゝことあたはず。

玲瓏隨筆 卷之二

一松杉の實を今日うゑて、軒端に見んと思ふは、五年七年末遠くして待遠きなり、其間の養育實に稚子を育つるうことし、然れば今軒端に見る木を移植えて、五年七年を今日に引寄て見ることは、大切なることなり、是を考へは今軒端に見る木を植ゑんには如何程精を盡してもあきたらぬことなるを、あらくも扱ひ根の土を落し枝を折り本を動かしなどして、頓て枯れぬれば、嗚呼枯れぬるよと云ひて引捨てぬるは物の考へなき心なり、我人此の如し、今植ゑる松杉の實は五七年の思ひを積ますは、軒端に見ることは、らぬなり、五七年の思ひを積むとたに思は、一本の樹に一日の勞を盡すはとならば大方つくへき歟、然らば一本を植ゑんには一日の勞を以てつくへき計謀ころ有らまはしけれ。

一問ふ、天道は萬古變なく、造化の生する所曾て以て易らず、古松は今も松なり、竹は今も竹なり、万物都て此の如し、聖人何としてか復生れざる、答へて云ふ、それ聖人氣の清明を慕くること純粹

にして生知安行なり、人の氣を稟くるその氣清明純粹あることも偏に古に在りて今なかるへからず
聖人只生れざるこそ何そや、或人曰く古エた希なり、予曰く、古には希れなれどもありつへし、今
亦希にも無きことはいかゞそや、天道はこれ古と變すへからず、此儀いかん、終に答ふることを得
ず、曰く縦令二程程明道出るとも儒家に於しこれを明すへからず、それ道は別なり、佛氏に於て
解し易し、予曰く、人のためにこれを説くも、若し自得無ければ則ち人これを信せず。

一人皆已々の得たる所一つあるものなり、その得る所をとりて之を用ふるときは、則ち人を捨てず、萬
の物を委しく見るに、小分にして大力あるものあり、蚊蚊の血を飲ふこと其者の小にして力最も大
なり、大力量の人身に口をあてゝ如何に吸ふとも血出てかたかるへし、然らば人力量ありと雖も血
を吸ふことは蚊の力かかる、物こと其徳を以て用ゆるときは則ち廢らず、物々一徳なくんはあるへ
からず、辛き苦きとて人の嫌ふ所なれども、惣に辛きを以て能とし、黃連は苦きを以て能す、そ
の能を用ゆるときは則ち物弃らず、砒備は人を傷ると雖も人を傷るを以て能とす、緩藥の破りかた
き病あるときは砒備の力を備へて以て傷るときは、則ち病去る、されは毒を以て人を活かす事は良

醫の好手なり、明主は能く人を知る、蓋人を知るものは其能を取りて用ゆ、暗主は雖も明臣を用ひ
るときは則ち主の明なり、眉斧國を劈破ると雖も吳は敗られ、越には補けあり、越始め斧に觸らる
ると雖も終に柯を把る、吳を破るものは范蠡か明なり、一斧人を破ると雖も我柯を把るときは、則
ち人を破る、人に柯を犯らるときは則ち人にやふらる、破ることは斧にあれども、破ると破らる
るとは人の謀計にあり。

一我常に思ふ、われを乞食りと儘に見給ふやうに身を持ちたしとすれども、兎角人間か残りて人に
まざるゝ事こそうらめしけれ、我本乞食の跡をつくものなり、我本師釋迦は摩伽陀國の王たりしか
下りて乞食となり、我祖師達摩は香至國の王子なれども下りて乞食となり、袈裟は衆生濟度の方
便に等く見ゆるもにくからず、少し見たすくる方もあり、元くさり色の布にて製するを本とせり、錦
襦の衣は能仁私云釋迦終に披し給はす、慈尊に遺し給ふ、飲光是を抱きて雞足山山名の洞に入りぬ、沙門
の内衣美しくかざり、前後を見て出立たる顔の風情うらめし、偏に美婦の色を街ふにことならず。
一至つて硬きものは尤も寒るなり、氷は堅きゆへに尤も寒るなり、雪これに次く、水又これに次く、石
硬ふして尤も寒る、金これに次く、木も至つて堅きは身に添へて尤も寒る、柔かなるほど暖かなり
されはこそ温和と云へり、絹も生にして堅きは肌にひゆ、練り和らぐれば暖かなり、綿は至つて柔

かにして尤も温かなり、絹これに次く、人も容儀堅確なるは秋の如くにして冷し、容儀柔かなるは春の如くにして温和なり、寒温の二をならへ、誰か温につかさらん、人にして人に嫌はれんはうるさし、人にいらはれんは悦はしからずや、慕ふも嫌ふも權威を以て押さは、異儀あるへからず、權威の勢むときろの常の心を以て人これを見る、人豈成なる時と終りの衰へるときを思はざらんや。

一衣裳の表裏は公私なり、表より裏勝つときは、公を裏にして私を表とするか如し、表を十分にして裏は六七分なるか順あるへし、人の一生皆この心ならんか、寝るときは衣は華美にして、出仕に古く垢つける衣着たらは禮にあらし、表より裏の華美なるはこれに同じ、公を第一にして私を二三にかまふへし、貴く見へて心の賤下なるは表より裏の華美なる衣着たる人なり、如何となれば財寶多く持ちたると人に見へんの心あり、實に富貴なる人は富貴と見えす、實に才智ある人は才智あると見えす、才智を人に見せんは才智乏きなり、故に食に飽くものは食を忘れ、才に飽くものは才を忘る、孔子老子に見へて禮を問ふ、老子の曰く、吾聞良賈は深藏なり、君子の盛徳虚きか如く容貌足らざるか如しと云へり、良賈は財寶あれとも深く藏して貧屋の如きなり、君子の容貌徳内にかくれて足らざるか如くなる貌ありと云へり、或人曰く、孔子老子に禮を問ふなり、道をは問はず、子曰く禮これ道にあらずや、道に違ふの禮、孔子豈これを行はん乎。

一只學んで知りたると自得とは雪と墨のかはりあり、故に君子深く入るに道を以てす、その自得を得んと欲するなりと云へり、或武士の家人下部二三人聚りて云はく、いざ和殿原ひもじひか一睡せんとて皆寢にけり、佛弟子の爲めに法度を定められたるを律と云ふ、律に云へり、食後晝時分に一睡せよとなり、僧は一粥一飯なり、一睡するは胸滿ちてひもしさを忘れせんかためなり、我と身に覺へて知りたることは、佛も祖師も心相合ふものなり、此下部ども寢て胸のふくれひもしさを忘るゝことをよく自得せり、水のつめたいと云ふことを習ふて知ると云ふことはなきものろ、口へ入ると自得するそ、湯のあついなど云ふは如何やうなるものそと習ふものはないそ、口に入ると即ち自得するそ、飢ると飽くと云ふこと習ふて知るものはないそ、飢來れば即ち自得するそ、飽來れば自ら知るそ、諸道を知ること水の冷暖、食の飢飽の如くに自得すへし。

一我終に寂しきことを知らず、問ひ來る人の歸ればあら閑かなり面白やと思ひ、日暮れば今は早間ふ人もあらし、我身に成りたりあら閑かやと思ふ、雨も月も閑かなれば、我雨我月よと思はるゝなり然りとて此閑を樂んてかく閑にするにはあらず、少し心による所ありてかく閑居せり、若し閑を樂んで山居を好むは世人の富貴を好むに同じ、戀の辛みを食む蟲あり、甘草の甘さを好む蟲あり、辛さと甘さは其身にあり、樂む所は同じ、富貴閑熱と閑居寂寞とは變はれど、樂む所は同じ、然

れは道を捨てて樂みを取るは佚樂の人に同しかるへし、富貴を好んで人に諂ひ、佛法を賣りて渡世の營みをし、佛祖の道を泥土に墜さんよりはと思ひて、樹下石上の栖居せん人は樂みを求め山に入るにはあらし。

一今の世に順はんとすれば道に背く、道に背くまじとすれば世に順はず、只跡を藏さんには如かさるなり。

一奉公の人の心掛にも品あり、人退けは退き、人進めは進む、此等の入立身すへからそ、人退くにも退かず、人進めは我いよくすすむ、此人立身すへし、人進めは共に進み、人退けはともに退く、功少く、人進まは我いよく心を捨てず、人の退くときを待ちて進む功多し、斷る處を心にかくる人能き奉公の志なり、蹴鞠の人のつめを詮に心掛ると見へたり。

一美言惡言と云ふこともなきものなり、又思へば美言惡言と云ふこともあるものなりと云へば人如何と問ふ、予曰く、時に遇ふ人の言ふことは、惡言なれどもこれを美とし、ときに遇はざる人の言ふことをば、美言とも惡とす、然らば則ち美言惡言はない、人に就くと見へたり、時に遇ふと遇はざる時は、富貴と貧賤となり、されば人となりて物云ふときを待つへし、時至りて云へば人これを用ひ、時至らずして云ふことは人これを用ひず、とき至らずして言ふときは則ち孔孟の語と齊くとも

人これを用ひず、人非人の言或は五七歳の子童の言、貧窮孤獨の言なりども、美言あらは聞きて以て身に就けてろの得あり、貴介公子の言なりども、麤語惡言をば心に捨て身を省みるときは則ち身に得あり、三人行くときは則ち皆我師なり、匹夫匹婦の言をも捨てされば好き語必ず我に在るものなり。

一烏鳶の卵毀はすして後鳳凰集る、誹謗の罪誅せずして後良言進むと云ふこと真なるかな、鳶鳥の卵を育て、何にせふそなれども、君子は物を捨てず毀たぬかよい、惡を弃くされは善か至るものぞ、鳶鳥の卵さへすてされは鳳凰か集るなり、人それ我を誹る、其誹るを罪すへからず、誹謗の罪を誅せされは良言を聴くぞ、ものゝ云ひ掛ひを尤むれば、人言を慎んで言はざるものなり、君子は雜人にむざとしたること言はせてうつけたる顔して聞くもよい、雜人なれども自得の心より出る理言はあるものなり、應言は聞きてきかず、美言は聞きてこれを記すときは則ち損無くして得あるなり。

一君子は人を誹ること、我臣下として主君を陰に誹罵するをば聞くとも、さかす顔して之を誅すへからそ、誅すれば損あり、誅せされは得あり、これを誅すれば只愚き奴め、我を誹謗するよと思ふ體積を達して快しと思ふばかりなり、その謗の人を失へば一人の損なり、人言を慎んで言はされば則ち良言進まず、人を誅し、憤を達すれば、その憤亡ぶ、之を忍ひて憤を弃れば、同じくこれ

その憤亡ふ、之を誅するど之を忍ふとは別なれども、憤の亡ふることは之に同一、然れば人を失して良言進まざるの損と、人を失はずして良言進むの得は、誅と忍とに在り、君子これを忍へ。

一沙門の言行正しきときは、則ち權威とても恐れ無し、私を以て沙門に傷くるときは、則ち我に耻無し、その耻は權に在り、その罪も權にあり、死するは人の常なり恐るゝに足らず、横難昔よりなきに非ず。

一心に城郭を搆ふへし、心の城郭は人破りかたし、石をつみ池を掘り水を貯へ、専ら之を以て敵を防かんと欲す、敵も亦謀計なきにあらず、石を崩し地を割き水を落すときは則ち城郭は平野となる也恩恵を施し國土を撫育するときは則ち誰ありてか吾に敵をなさん、是心の城郭なり。

一敵を怖るへからず、身方を怖るへし、初めより敵なし、身方を敵とする、敵に恩恵を施せば身方なり、身方恨を含めは即ち敵なり、恩少く恨多きときは、則ち何の所にか身方あらん、天下敵なり。一性は滅するもの乎、滅せざるもの乎、答て曰く、滅せざるものぢや、曰く、滅せざるものならはなせに性善とは云ふたそ、譬へば人參は人を生ず最も善なり、用ゆると大に満るときは則ち病を生ず、これ用ゆる人の惡きなり、人參のあしきにあらず、砒霜は人を殺すもの也、然れども用ゆへき時に中て用ゆれば則ち病を愈す、これその性は随つて用ゆるときは則ち人を生ずなり、物皆性あり、性は善な

り、孟子曰く、性は善也と云ふもこれなり、善は生滅の物ぢや、なせになれば善は惡に對するものなり、善滅して惡となり、惡滅して善となる、語滅すれば默し、默滅すれば語なり、明滅すれば暗なり、暗滅すれば明なり、塞滅すれば空なり、空滅すれば塞なり、何れも互に生滅す、人は元性善にして、善を作すに今日より變して惡を作すときは、則ち善滅して惡なり、人元惡を作す、今日より變して善を作すときは、則ち惡變して善となる、日暮れば明滅して暗と成る、夜明けぬれば暗滅して明となる、然るときは則ち善は生滅の物なり、性は生滅無し、生滅なき故に性は善と云ふべからず、孟子性善の善は、これ善惡雙對の善にあらず、これを無對の善と謂ふ、善惡出る所を云ふべからず、善惡の体なり、性は善なく惡なくものなり、善なく惡なく強めて崇尊して之を善と云ふ、もし人を愛す之を善と謂ひ、之を性と謂は、性はこれ人を愛せず、若し愛せば必ず憎むことあらんうれ愛あつて憎むこと無きとあたはず、性には愛憎なし、愛憎はこれ外の機なり内にあらず、例へば水の如く、花に酒くときは榮え、また惡く酒くときは則ち根を穿ち花枯る、然るときは則ち之を枯すも水なり、之を榮へさすも亦水なり、然りと雖も榮と枯とは水を酒く人の手に在り、水にあらず、水はこれ性なり、榮枯の善惡は酒く人の手なり、何ぞ手を以て水の性、善なりと云ふや、人の手に善惡あれとも水には善もなく惡もなし、可もなく不可もなき處を觸めて名けて善と云ふ、此

善は本然の善にして無對の善なり、善惡の機に落ちざるものなり、善とすることなく不善とすることなし、不善を離れたる物なり、只恐らくは諸人これを説きてこれを知らざらんことを也。

一儒云く、虚にして靈、空にして妙、これ心を説くの論なり、問ふ、虚にして靈、空にして妙とはこれ何のことぞ、答ふ、即ち心なり、問ふ、心とは名なり、名を呼んで實と爲すへからず、虚にして靈、空にして妙、その實此身に在いて何の處を指して云ふ、それ人の心間斷無し、心々聲色に轉ずるものなり、聲色に轉せば聲色は心なり、本心はこれなんぞ、各た、その名を云ひ、その徳を説きてその實を知らず、只胡升生姜の味、その能毒よく書を以て知ると雖も、終に胡升生姜目に見ゆかことし、本草幾品皆本草の書を読みてこれを知ると雖も、未だこゝに渡らぬ藥をば人未だこれを見ず、縱令この地に在りて朝夕目に觸る、草の實、木の葉と云ふとも、これよと證明せずんば心を見説くことを知らず、人皆此のこゝく心性をどく、心性知れたやうに人は思ふなり、こゝくはないぞ。

一性これを説くに空を以てす、空はこれ性にあらず、性はこれ空なり、空は性にあらず、空は性を説くの言なり、言はこれ性にあらず、六祖の云ふ、口に終日空を談して性を見されば食を談して飽かさるかことし。

一それ書は古の善人君子の言行たり、古人をして存せしめて世に今見ること能はず、故に書に寫して

古人の言行を見せしめて以て今人をして、古人の如くならしめんと欲するなり、今の學者を見るときは則ち總て然らず、世に學者多し總て古人の言行をまなはず、只文字を記誦して以て渡世の營みごとる而已、儒者は儒書を市る、孔子は書を包む、佛者は佛書を市り、瞿曇は書を忍ぶ、今道士は種を敗る、老十坐を免れたり、神道は神書をかさり、歌道は歌書を市る、道世俗に落て偏に工商の業の如し、孔子豫めの玉へり、古の學者は已かために、今の學者は人のためにす、實にこは道は此のこゝくならず、蓋身を直くし、心を清くし、仁に徒り、義に遊ひ、人心を克めて道の心に復せんとするなり、此の如きときは則ち父母を耻かしめず、身安くして祿亦備り、名もまた高し、孔子又の玉は君子は道を謀りて食を謀らず、耕すや餒其中に在り、學ふときは祿其中に在り、古語に云く、紀誦の學は人の師たるに足らず、今の學者きたなし、食を謀らすとも只身を直し心を清くして、道に叶は、食も自然に備はるへし、道を賣りて食はんと思ふ故に耻あり、却て餓あり其物に居てその物を食む、更に耻にあらず、法に居て法財を食し、學に居て祿を食す、何の耻かあらん、食をはかりて食ふもの耻あり、謀らすして食ふもの耻無し、墓に栖む虫は墓を食む、墓に栖む虫は墓を食む、其物に生すれば其物を食む、食まんと期しては生せず、人も此の如し、此儒に居ては儒にある財を食し、釋に居ては釋にある財を食す、更に耻なし、食のために謀るはきたなし、傍に人の

り利口に云ふ、學ふや祿その中に在りと孔子の仰せられたほどに、學問して祿を食まんと云へり、されはこのをことの如き人ありて、此章を錯るへきとて、孔子己に末の句に君子道を憂へて貧を憂えずと云ひどめられたり、况や又道を謀りて食をばから、と云ひ出せり、をこと何そ食をばかりて以て孔子を錯るそと云へは、されはこそ我君子ならねはと云ふ 笑ひき。

一薪は下賤の手に拾ふものなり、道は君子の學に有るものなり、然れば貴賤各別にしてそのものも亦別なり、薪は卑うして道は貴し、然れども其賣るに至りて我は薪を賣らん、如何そなれば賣るものはこれ薪なり、道にあらざるなり、故に我は其賣物をうる、其賣らざるものを賣らず、その賣るものをうるは淨し、その賣らざる物をうるは穢る、更に君子買ふときは則ち道と雖も我賣らん、只君子は買はすして買ふときは則ち我賣らずして賣らん、孔子もまたの玉はく、沽らんや沽らんや。

一短才とはよく言へり、一章二章三篇四篇積んで卷とし重ねて部とす、是人の才也、佛は五千卷に説けども理盡きず、棟に充ち牛に汗さすれども理つくるときなし、理明なれば言伸ぶ、理暗ければ言屈す、今の世誰か一篇の書を著はす、古文いさ學ひす、古風長篇の詩下りて八句にて、詩下りて絶句、絶句往々に題しかたく、日本様の聯句とて五言一句を製す、才の短さにあらずや、本邦にも古の述作多し、女の才にたも伊勢物語、式部か双紙、さま／＼和言へりと雖も、貫之か古今の序はま

つ山谷か序にその格同じと云へり、和漢どもに達人の才覺はこれ同じ、今の世には百紙に足らざる物語一帖も書き出すへき才は多くあるへからず、代々の集の假名序など見るにも、今の世にはかゝるへきと覺えず、假初の歌の詞書なども、のびらかに曲艶なることは希なり、萬の理胸になければ言に出ぬものと見たり、双紙の筆取ることなく、長歌短歌の云述べたること書出すことあり、皆文短かになりて歌道者ご云へは三十一字にきわまり、剩へ一首の歌を分ちて二人して之を作り、連ねてこれを翫ふ、眞に才短くなれり、今連歌に長せる人は歌は讀ます、これ長き物は短き用を助くれども、短きものは長き用をなさぬしるしなり、實に尺は寸の用になれども寸は尺の用をささず、歌の六義もと詩より起れり、詩は志のゆく所各その志を述べて、物に感して心の動くなり、されは三十一字を連ねて人のよむのみ歌にあらず、花に啼く鶯水に住む蛙の聲も皆歌なりとは、志を述へ心の動く所を云へるにや、末の代には法に溺れ、法式に縛られ、皆志を失ひ、料略して以て道とするものなり、吁。

一木規を作りて鬮くものは心曲れり、木酌を作りて賣るものは又心直きなり、草鞋織りて自ら給すものにも心の淨らかなるものあり、賤むへからず、詩歌管絃の坐に列る客も心穢れたるあり。

一子京に赴き淀の堤のこなたに乗物据へ人力休息す、その小家豆腐を業とす、彼か人と語るに乗物

の内にて聞く、彼か言に云く、何事も先世の因果と候ものを、身の悲き時は人のどがのやうに皆申す、我こそ知らぬ、皆我爲し置くことか身に來るにて候ものをと云ふを聞きて、乗物の内にて獨り感一ぬ、今の世に正しき沙門たるもの因果を知らず、古には因果撥無の僧としてしうりぬることなり因果を撥無し、眞風地に墜ちんご大燈國師も仰せられし、古は貴僧高僧多くまゝて、處々にて衆生に因果の理を教へけるにや、耳にふれて末世まで賤の男賤の女に至るまで、因果とは如何なる教と云ふことは正しく知らざれども、教の如く信じてかく云ふは古の高僧の力なり、今教化すへき僧として因果を知らず、如何そ人に教ゆへけんや、因果と云ふは因は過去にあり、果は現在にあり今世現在に善惡の果あり、或は五雲天上に生じ、眼には花鳥風月、耳には糸竹音雅を聞き、鼻には衆香をきき、舌に衆味を調して身に綾羅錦繡を纏ひ、意萬事につきて思ふ儘にして下界の土をふます、翅なくして鳥道を行き、六根の樂を受け、或は大臣官人高家の氏族に生れ權威恣なり、ろの外貴介公子富家に生れ、處を得ていみじき振舞をす、又貧窮孤獨として朝夕を營みかたく、飢に臨みて則ち人のものを押取り、その罪によつて禁獄せられ、我と我身を傷り、あらぬ惡事をす、その罪無量なり、かゝる善惡は皆過去の因により、今現在に其果を得るなり、因なくして果を見ると云ふことなし、今日の上にも因なふして果あると云ふことなし、果あるは皆先の因によるなり、風

寒にあたり喜怒により、寒熱往來頭痛背痛の病、氣虛耗散の病あるは風寒喜怒を病む因と云ふ、頭痛背痛等これを病果と云ふ、病因無くして病と云ふことあるへからず、一切今日の態、万端皆因により果を顯はすことなり、春種を蒔くは因なり、秋の實るは果なり、菓なり、今日の我人の善惡は皆過去の因によることなり、若し信せずは佛經祖錄を見よ。

一 駄馬も乗りて道ゆく人、油断して落ちなは重くは當座にも死すへし、足を折り手を折りて不具にもなるへし、或は五年三年後まで腦むこと世に多し、慮りなきときは則ち憂ありとはかゝることなり朝に宿を出て午時に下りまた乗り、夕に宿に着き下るゝなれば半日つゝの氣遣ひなり、半日の間を氣遣ひなく樂まんとて當座に死し若し不具にもなり、五年三年の苦みをせんは却て損なり、これを思はし乗りてより下るゝ迄は馬の外に心をやるへからず、敬の一字にもわたるへし、主一無適を思ふべし。

一 毒物を食し病を引出すも口惜し、味に耽り病引出す人數多あり、愚痴の甚だしきにあらざれば狂なり、それ飲食は色身の枯衰をうるはし、養ひ世に長生へて己々道にすゝみ、立身行道して素望を遂げんための樂なれば、過不及なく程よく飲食してこそ樂なれ、過ぐれば毒となりて遂に色身を害す是等のことよく心得ある國手にも、飲食より病因を生じ、遂に天死して不忠不孝の人となるあり、人

々よく嗜むべきとなり。

一士は忠心をつくし恩祿を得て家富めるはよし、空しく義なふして富めるは耻なり。

一財寶に富める人は不仁の人なり、蓋仁は博愛するの理なり、この理の字は義理道理にあらず本を云ふ、仁は本なり、博愛は端なり、己に博愛と云ふときは愛に外なし、粟あるときは則ち近くは鄰里郷黨に與ふ、廣く世を見るに救ふへき貧兒多し、財餘すへからず、若し誤ありと謂は、施さるるなり、施さずして家富むをはこれを仁と謂はず、陽虎曰く、富を爲せは仁ならず、仁をすれば富ますと云へり。

一天下を知るほどの大なる富はなし、然れども天下を知る富は天下の富を以て富とす、己れ財寶をつんで富とせず、己れ自ら財寶をつんで富むは小人の富なり、小人の富は不義なり、浮へる雲のごとし、無欲は人の褒むる所なり、有欲は人の惡む所なり、然れども道あらは可なり、道なくんは無欲も奇特ならず、七寶とて佛も譽め玉ふなり、犬馬は七寶を踏んで石瓦の如くす、然りとて有欲に似たれども佛を卑しとせず、無欲に似たれども犬馬を尊しとせず、有欲無欲ともに義を存すへし、無欲にして義あるときは則ち彌好し、寶を寶と知り、施すへきにあたつて之を施し、捨つへきにあたつて之を捨て、これを取るに當て取る、故に君子は財を愛す、これを取るに道ありと云々、我に人

物を賜はるに我深くこれを傷む、給はるものは多くこれ名聞の財なり、我に相應の徳あり、徳によるときは則ち可なり、名聞の財は徳を損ふ、我に相應の徳ありとは我沙門として聊か先師の道を傳ふ、一則の因縁を擧げて利生の道を立つ、我門に入らん人心地の明ならざることを歎き、一則の因縁を參得し、過現未を明らめ生るゝ所を知り、此度無爲に入らんことを善ひ、現世の快樂を思はずして偏に寂靜を樂む、これ一則參得の得なり、此恩を知る者は佛を貴ひ祖師を重んず、此宗に志深きは、我に財を呈せずとも佛祖の報恩を知る人なり、これ我喜ふ所なり、財は我益なし、又志誠ならば、一把の野菜なりとも我爲めに誠を呈すと思は、我金玉よりも重くせん、志眞ならざるときは則金玉と雖も一毛の如し、金玉我を以て用なし、食は朝に一粥暮に一粥にて足ることを知る、衣は紙の被ま綿衣なり、住處はその居一疊に過ぎず、衣食住の三つに煩ひ無ければ、金銀更に用なし金銀自然にあらず、堂塔營むへく貧窮患むへし、強わて求めえて之をするに足らず。

一道は説く人はあれども之を知る人は鮮し、之を知る人はこれあり、これを行ふ人は鮮し、説くことを得ずとも之を知るは説に勝れり、之を知ることを得されども自ら之を行ふは之を知るに勝れり、説は之を知らんかため、知るは之を行ふかためなれば、之を説きて知らざらんは説かざるか如し、之を知りて行はざるは知らざるかとし、或人の曰く、説は人のために好し、之を知ると之を行ふとは

已かためなり、予か曰く、これを説く人、之を説きて知らざれば、これを聞く人、聞きて知らず、之を知る人、之を知りて行はざれば、人も亦之を知りて行はず、説くも聞くも二つとも利なし、或人又曰く、縦令説きて知らず知りて行はざるも、説かず知らざるには勝らん乎、此言人を弃てす尤も可なり、又此に一儀あり、之を説きて知らず之を知りて行はざるは、之を説くと之を知るとの答及ひ行はざるの答あり、説かず知らず行はざる人は知らざるに依りて説す、説かざるに依りて知らざるに依りて行はず、是唯答無し、一切の事知らずして爲ざる者は、其人のために其事を知らざるの答われとも、之を説さざる答無し、又曰くこれを説きて之を知らず、之を知りて行はざる心底の人の説を聞きて、よく道を得て之を知り、之を知りて之を行ふ者これあるときは、則ちその身、人を得ること無しと雖も補けあらん者乎、氷は水より出て水よりも寒く、青は藍より出て藍よりも青しと云へり、之を説きて知らずと雖も、必ず之を説きて之を知るものあらん乎。

一南都の宗二は儒者なり、林和靖か後裔なりと云々、宗二か曰く、貧には成りかたきものなり、貧になる人は奇特なりと云ふ、此詞はまた奇特なり、されは古人有道の人は貧しき聞へ多し、范蠡か五湖に入り富めるはきすなりと書さしことあり、欲ある人は多く無欲の人は解し、貧になることは無欲より出る程に貧になるは奇特なり、又色を好み佚遊を事として、親の譲りし財を守らず貧になるも

のあり、かく有らんよりは奢らずして富むはよしとも云はんか。

一世の華美になるほど、人の心の比興さぞ彌まさりぬる、外の飾清ければ内汚る、外淨く内穢るときは斯ることにや、内淨く外汚るといへるは、内心清淨の人はさまで外を飾らんと思ふ心はなし、今の世には其分際より万人花飾の奢に財足らず、財足らざるゆへに富める士の門を窺ふ、何ぞ家の豊儉に従ひ心を清くせざるや。

一老人に杖をゆるさるゝことは三國共にあると見えたり、禮記内則十二に云ふ、五十は家に杖つき、六十は郷に杖つき、七十は國に杖つき、八十は朝に杖つく、九十には天子これに問ふことあらんと欲するときは、則ち其室に就き珍を以て従ふと云々、人五十からはや老衰するほどに杖をゆるさる、九十になれば天子の問はせられたることかあれば、其老者の家に往きて問ひ給ふとなり、日本にても賀のどき杖を賜ふどか。

一禪家に主丈を取るこれ杖なり、靈山路驗し佛許して老者につかするなり、律に云ふ、佛畜杖を聽すと云々、又云ふ、主丈をゆるすに二つの因縁あり、一には老瘦力無きか爲め、二つには病苦嬰身のためと云々、杖つけとまゝには佛のゆるし賜ること、又天子のゆるしたまはること、また賀のことまた刈向と云ふものに藜杖を異人かやりたそ、これより夜は燈の光り出て、此燈にて書をよみたる

故事もあるなり、杖に燈、又燈に杖もつくへき乎、故に鳩など付くへき歟、鳩の杖と云ふことあり、考人は咽狭くなりて食つまるなり、鳩は咽の穴廣きものなれば、杖の頭鳩を作りてつけるなり、藤かどり杖にするなり、主丈を烏藤と云ふ、烏はくろきと云ふ心なり、主丈は黒きものなり、連歌の付合を思ひ出てなり。

一 靈鷲山と云ふは、此山の形鷲の頭に似たる故に、鷲の峯とも又鷲の山とも云へり、鷲の臺ともあり佛の居給ふところなり、鶴林樹下にて、佛は入滅ありたるなり、鶴林と云ふは所の名なり、「いにしへの鶴の林の春はあれど世にかめ山の秋そかなーき」と、龜山院崩御のとき讀みたる歌なり、適作者を忘る、佛さへ鶴林の入滅はあるものをとは思へども、龜山の秋は悲しきなり、かように歌にも對した歌があるなり、是や此行くも歸るも別れてはと云ふに、知るも知らぬも逢坂の關と對した歌なり、連歌にも聯句付と云ふことありと聞ゆ、桃園の桃花こそ盛なれと云ふ句に、梅津のむめも今や咲くらんと付たるあり。

一 庭の櫻に雀二つとまゐる、上なる雀しやくしやくと啼きぬれば、下なる雀ちよと云ふて飛退きぬ、その跡へ上なる雀をり居て蜘蛛を取りて食ふ、上よりしやくしやくと鳴きたるとて、下なる雀の痛みにも成るへきと覺へされども、彼其旨を得て退きぬ、心を付けてみればかれ風情にも道あることを知れり、智者の教化に隨ふものは智者と心の通ずる故なり、その機にあたらざるものを強めてせむるとも心に通せず、道は世同じ心ありかたきものと見ゆる、佛法の教化もその機よしたこと詮なるへし、雀は雀の心を會するか故に彼其心に隨ふ、犬は犬の心を會する故に彼其の心に隨ふ、其道に入らざる者を我心にあはせてせむるは拙し。

一 我身人に敬まれんと思は、先づ佛神を敬ふへり、佛神は人の上にあるものなり、我上を敬へば下また我を敬ふ、我上を敬せずんは何として下我を敬せんや、君と臣と皆人たれども上に在るを以て敬ふときは、則ち下にあるもの又我を敬ふ、我上を敬せずして誰か我を敬せん乎。

一 天命は一盞の燈油の如し、誰も見て誰もこれを知らず、人の身は器なり、油を受ける盞の如し、油盡れば火滅す、油は天命のごとし、天命盡くるときは人死す。

一念の物を止めること古來此の如し、南都に此頃人あり、罪に逢ふて籠舎せしこと已に三年に及ぶ、漸くして罪をいかれぬ、その妻獄の門へ行きて今日罪のかれぬ、後に獄の門開かるへし満足せよと云ふ、夫此言を聞きて吁と云ふて即死す、女残念に思ひ泣けどもかへらす、是非一度罪を免れんと思ふ念此男を三年止めけるなり、罪まぬかれぬと聞き念弱くなりて其儘死す、生死の大事こと、に在り、灰袋の小兒を留める事今にこれを見る。

「小惡をなしても天理を恐るへし、その一小惡身を亡すことあるまじと思ふは誤なり、勿論其一小惡は即日忽ちに身を亡すことはなけれども、その心萬事に涉る故、小を積んで大となる、時至るときは則ち必ず身を亡す。筑波山の峯の半落添ひてみな川の名に立ち、吉野の峰の木々の半落添ひて竹田の川淀には舟と、むる例もあり、雲より落ちる瀧波も岩に傳ひ上りて水上を見れば纒の谷川なり、谷川を上りて又其水上を尋ねれば、爰の岩の根、彼處の苔の露集りて谷川となり、谷川自ら嶮崖より落ちて瀧となる、爰を以て人恐るへし、一小惡と云ふども恐れずして之を作るときは、則ち積むどころ必ず身を亡すこと必然たるへし。

一 熟出家の偽り多く真偽を視るに其本三つなり、一に衣、二に食、三に住なり、衣は輕さを着温かにして外人の照さんことを思ひ、食は味ひを厚ふして美食足りて飽かんとを思ひ、住所は廣く安からんことを求む、すへて此の三つに依りて偽り多くして世に諂ふは何事そや、衣は寒を禦くを以て理とす、食は飽充るを以て理とす、住は一身を容るを以て理とす、衣輕くさはやかなるを求め、食は旨く厚きものをもとめ、住所は廣く安からんことを求むるか故に、皆其言行ともに偽り多くして實偽し、食は命を繼ぐを以て理とし、衣は寒を防ぐを以て理とし、住所は一身をいゝを以て理とす、何そ輕さを求め、厚さを求め、安さを求めん乎。

一人の口に宜しきものは我口にも宜し、人の口に宜からざるものは我口にも宜からず、獨り美食厚味を惡み、蔬食淡味を好むにあらす、唯これ我心を恣にするに恣にせざるとなり、沙門は卯粥、辰飯、此外に食ふをは佛之を畜生食と罵り給へり、まして美食厚味を好むことは放逸なり、放逸なるときは愧あり、愧を知らざるときは則ち人にあらす、禽獸のときさ乎、それ出家は士農工商の外に居て定まれる糧をかし、朝城中に入りて托鉢して食ふ、専ら佛法を修行す、何の餘あつてか美食を集めて活計を事とせんや。

一 沙門として人に諂ひ、財を貪りて食を美にし、衣をかくるは愧なり、愧をうりて以て身を樂まむるものは拙し、己か身を辱しむるは自ら作し自ら受けるなれど、佛を愧しめ、祖を辱しめ、法を辱しむるは佛祖の恩を知らざるものなり、恩を知らざるものは猶禽獸のときし。

一心聾と云ふことあり、心聾とは心の耳潰れと云ふ文字あり、鈍なるものは耳の遠きやうなり、人の云ふことをちやくとは聞得ず、さらば耳か遠きかと思へば耳は遠からず、心か鈍き故に耳に入りながら、心に合點する處運きによりて耳の遠きやうにあるものなり、まさしく耳には入れども心に得ざるなり、心聾と之を云ふなり。

五 味

一清酒の甘味なるも又酸味なるも、これを飲むときは則ち久しく酔ふと覺ゆ、辛く甚たるときは火急に酔ふと云へども早く醒めてよし、されはよものは輕し、次なるものはしたるく、もたれたる心何にもあり、宜くも甘きは緩にして滯る、酸は濫飲す何れも脾胃留滯して散せず、久しく酔ふの備明なり、辛は散す、酷た酔ふと雖も散して滯らず、故にさひしく酔ひ速に醒めて跡無きか如し、これを以て人を見るも亦此の如し、酸き甘き人はやわ／＼として意趣あり、則ち終にこれを果さず、辛き人は當ることさひしく楯もたすらぬやうにあれども、言ふべきことなほさど云ふて根無き草の如し、その跡なし、但衆味をすてす取るに宜き所あるへし、一壺の酒を醸して五味相生するの理を知る、まつ酒を醸する其初め其色黄なり、其味ひ甘し、これ土なり、次に其色清くして白し、其味辛し、これ金なり、土金を生ずるの理なり、次に其色黒し、其味ひ鹹し、これ水なり、金水を生ずるの理なり、この次酒の性漸く降り其色青く其味酸し、これ木なり、水木を生ずるの理なり、次に酒の性彌降沈して、損して其色赤く其味ひ苦し、これ火なり、木火を生ずるの道理あり、然れば酒の徳は土金の盛よして、水中分にして木火に衰ふ、されは専ら辛きは偏にして和無く、専ら甘きも緩帯にして所強き無く、たゞ能く辛く能く甘ふして酒なり、人も五味を兼たる人稀なり、辛からるときは則ち甘く、甘からるときは則ち偏に辛し。

一罌粟の花の千葉にして赤きは、其實必しも少くして薄し、これ其精を花に過す故あり、花一重にして白きは實必ずしも豊大あり、徳の俄に輝くもの順て盡くる、人は徳を惜むへし、之を放たすへからず、例へば大豆を十粒算ふるに、一粒を以て數ふるときは則ち久し、二つを以て數へ、三つを以て數ふるときは則ちやかて算へ了る、又一壺の水も小杓を以て酌むときは則ち久し、大杓を以てくむときは則ち順て盡くる、草木の枝左小なるときは則ち右大なり、右長きときは則ち左り短し、必ず短小の理顯然たり、牛鹿に角あり、故に上齒無し。

一紙を徒ら費す童男あり、之を戒めて曰く、往古紙なし、片竹を編みて以て書を爲す、故に書を編むと云へり、後漢和帝のごき蔡倫字は敬仲、始めて樹膚及び敝布を用ひてこれを爲る、今の爲る所のものは楮皮なり、先づ其楮を植ゑ、培養して時至りて之を剪り皮を剥き、水に漬し麤皮を去り、搗爛し水に洒し、粘滑のものを熟和して、後その紙を製する、籬の長短の量に應じて紙となして已後一紙々々悉く板の面に張り、之を乾し乾きて後剥取りて五十枚を以て帖々とし、これを切り一帖を重ねて一束とし、以て功を終る、一紙輕しと雖も此の勞を思ふときは則ち重し、輕んすへからず、人の勞を知るときは則ち人のためにあらず、我身を補るにあり。

一垂示して云ふ、法性の義も用ひず、時節因縁も亦觀せず、坐禪學道は平常の心を失ふ、長連床上に

久座して窮屈を作す、畢竟いかん會得し去る、代りて云ふいはにはへと。

虚無

一衣食住居に結構をつくす世ならば世間つかるへし、いかにとなれば金銀足りて結構する人は百人に五人あるへからず、百人に五人はあるへしと思へども、千人に五十人、萬人に五百人なり、然れば萬人あつて其中に五百人金銀足る人これあるへからず、百人に一人あるときは則ち萬人は百人あるなり、福人の結構を盡すはさもあるへし、それ猶奢りて大和唐もさろふたることなり、萬人の中心百人は餘りありてするけつこうなり、九千九百人は福人にならうて及らざる事をする故に、世間の心疲る、その金銀足りたる百人の方を押へて奢りを止めさせたらば、自ら萬人ともに奢りが止みて世は安かるへし、世間のつかれ、人の悪心になり、屋焼人殺をするも其本を尋ねれば、侈りに事足らざるより起るものなり。

一それ天下を領する者、珍奇異物を我有となし高爵に進むものは非なり、珍奇異物は散して天下のものに與ふへし、高爵は辭して進むへからず、其故如何となれば、天下を領する者、天下はみな我倉庫の中なり、矧んや又珍器異物と雖も求めかたきにあらず、求めやすきを以て寶とせば理當然たる

にあらざ、もし其所用にあたるときは則ち天下みな我倉庫の中なり、豈之ヲ用ひかたからん乎、又天下を領するときは、則ち權威を以て官爵するは進みかたきにあらず、進みやすきを以て進むものは奇特にあらず、布衣にして天下を安んず、これ難い哉。

一諸道に始中終の三あり、始終の二の中を得て諸道の終りとす、終は終りにあらず、始と終とは偏なり、また始と終と相似たりと雖も、似て似ざる所あり、二歳三歳の者は、心は八九十の人と相似たりと雖も、中年の才覺を盡して立歸りて少年の心に均し、相似て似ざる所あり、少壯の中を得て老年穩便なり。

富人非達者 塵抗之譬辨

一諸家の學始めは皆名利渡世のためと思ひて志すものなり、よく道を明らむれば何れも名利渡世にあらず、其故に諸家の達者皆財實に富めるはなし、諸家を以て何れなりとも其家の達者といはれて富あらは、道は達せぬと知るへし、陽虎が曰く、仁者は富ます、富をすれば仁ならず、道を學んで立身すへきと思ふへし、富人となるへしと思ふへからず、立身は我心の私曲を失ふて公直となし、汚穢を除きて清淨になしぬれば、名を求めんと思ふ心はなければとも名世間につきこへ立身すへしと思はねども身を自ら立つ、これ學者の力なり、富を願ふ人は我本來の心公直なるを曲げて私をなし、我

本來の心はもと清淨なるを不淨となしたるゆへに、有錢の家とはなるへし、塵坑を掘るに初めはなにもなく淨地なれとも、後はいつとなく塵土平地よりも高くなりて其近邊の草を肥す、これ世間の不淨を愛するゆへなり、洒掃したる地は塵埃を絶し、人の心までを淨くす、但しこれ世の人は絶塵の地をきらひ、塵坑を好むと覺えたり、然るに當世地に水を洒ら塵を掃ふことを好むと云へども、身の洒掃はしらざるなり。

一意不淨なる人も其生得の我本心は、清淨潔白にして聖賢にことなるなし、唯我と心を覆ひかくして不淨不潔の人となるなり、塵坑の如く始めほりたるときは、洒掃の地と異なることなし、塵坑を愛しぬれば塵坑なり、人皆世上の塵をあいすこと塵坑の如き乎。

一曲と直と淨と汚とは、善惡にわかりてあり、之をわやまる人はあらし、庭座敷の美麗を好まぬ人はなし、我心の私曲ある人も物の曲れるを好む人はなし、木を植ゑればゆかみを直し、庭に塵あれば掃ふと見へり、已か身の不淨曲事を私にして置くもの、不淨曲事を堪ゑすと見えたり。

一心こゝに在されは視れども見えす、聽どもきこへす、これ至れる人の心にあらず、學者の心なり、深く思へば心こゝに在りて視聽するときは、則ち一つのものに在りて衆を欠く、心こゝにあらずして視聽するときは、則ち一つに在すて衆を欠かず。

一人の云ふを聞くにそんぢやう其長老法印様は殊勝にさむろふ、御佛でさむろふと云ふ、如何やうの所を見付けてかく云ふと思へば、これは甘きものてさむろふとて黄連をあたゆるに、昔の甘草はかくなかりしか今の甘草はかうこそあるらんと思ひ、また水を酌みてあたゆれども、酒と云へば酒と思ふ類の人を殊勝なりと云へり、眞實の殊勝と云ふは此の如きにあらず、これは偏に殊勝に似て殊勝にあらず、よく一切の理を窮め知らざる所なく、上は天より下地に至るまで、王侯貴介の事、士農工商下賤の業まで知らずと云ふこと無きは聖人あり、佛祖なり、舜何人ぞ、歷山の耕父なり、佛何人ぞ、舍衛の乞士なり、蓋聞きてさかす、見て見す、知りて知らず、其節にあたりて其知るべきを知り、其聞くべきを聞き、其見るべきを見るなり、其見るへからざるを見す、その聞くへからざるをさかす、その知るへからざるを知らずと云ふときは、則ち愚なるか如し、其見るべきにあたつて見、其聞くべきにあたつてき、其知るべきにあたつて知るときは、則ち一切のことをいいて知らずと云ふこと無し、これを殊勝と謂ふ、殊勝は字の如き乎。

一之を用ひても理に當らず、之を捨てても亦理にあたらず、これ今時の人なり、用ゆるときは則ち其惡を知らず、捨つるときは則ち其美を知らず、己に順ふときは則ち惡人と雖もこれを用ひ、己に違ふときは則ち善人と雖もこれを捨つる。

一物各天理あり、其天理に率ふときは則ちもの我心の如く従ふ、其理に逆ふときは則ちもの我に従はず、況んや有情にをいてを乎、車は横にをすへからず、もし横にをすときは行かず、これ車の理に逆ふゆへなり、車は造化の形にあらす人の造作なり、人これを造ると雖も既に形成るときは則ち天理あり、天理に従ふときは則ち無心にして従ふものなり。

一狗猫のたくひ陽國に生るゝものは陽氣勝つへし、然るに陰國に來ては甚た寒にたへず陽氣勝ちて寒に堪へざるは義にあらす、只知る其習ひあるものなり、温かなるに慣ふものは寒に堪えず、寒に慣ふものは熱にたゆる、此を以て知る、人も辛勞艱難を経たるものは艱難に堪ふ、一生艱難に遇ふまじきにあらす、人け只身を以て至樂に置くへからざるなり。

一萬事は皆純善なり、惡なし、萬物皆純善にして惡無きなり、中なるときは則ち皆善なり、中を過ぐるときは則ち善もあくとなる、例へば甘きは善なり、苦きは惡なり、甘きを用ゆること中なるときは則ち善なり、中をすくるときは則ち甘きも亦苦きに同じきなり、苦も亦これ五味の一つなり、用ひすんはあるへからず、中を執るときは則ち苦きも亦中正を得て甘きに同一。

一世俗佛法をば寂にして滅絶すと思へり、道はもて生滅なし、然るを衆生生滅の相となりて、悟るときは則ち生滅の二つとも滅して寂滅の跡現前す、之をたのしんで寂滅爲樂と云ふ、滅絶の義にあ

らず、道の体寂にして物の滅死の体のごとく寂靜に至りて、猶滅如と謂ふか如いと謂ふ、衆生の眼生滅をはなるゝときは則ち寂滅現前す、生滅は末なり寂滅は本なり、凡夫は末を見て本を見ず、此本かんして末にきたる、千變萬化するとも其本は湛然と常に寂として變せざるなり、これを指して以て寂滅とす、迷ふときは則ち生滅を見、悟るときは則ち生滅す、悟りて生滅の二つとも滅了して寂滅現前す、これを悟りて樂みとすると云ふ義なり、諸行は無常なり、これ生滅の法なり、生滅滅了了つて寂滅を以て樂とすと云ふ。

玲瓏隨筆 卷之三

一僧として佛法を裏とし、世間を表とし、多欲にして世に陥ひて渡世とするものは、一代藏經目を閉て暗誦するとも、亦僧にあらす、縱令佛經祖語を誦せすといへども、道に契ふときは、則ち是真の出家兒なり。

一 一等その身凡相ならず、志高くして、人を直下に見て、然も亦未だ曾て筆を執りて書くことあたはず、未だ曾て書をとり誦することならず、百の事不能の人あり、一等又その身凡資にして、外相貴からずして、然も亦心を文筆にかけ、うの爲す所拙からざるものあり、上に謂ふところの一等の者平生此の人を説る、双立つときは則ち這の人の作す所を一事なすことを得ず、然るときは則ちその笑ふこと又なんぞ乎、徒に志高きのみ、更に實なり。

一眼に在りて心に無きの工夫すへし、書を見るに意を得ること無きなり。

一 明來れば暗滅し、暗來れば明滅す、寒來れば空滅し、空來れば寒滅す、語來れば默滅し、默來れば

語滅すと云ふこと、よく辨へ知るべきなり。

一 昔豊相國の世に大盜あり、名を石川と云ふ、ある人の曰く、石川能く智仁勇あり、彼をしてよく一轉せしめは、善人たるへしと、その所以如何、賊を以て世を久しく經るといへども顯はれず、これ智なり、その徒よく従つて、自ら顯はれるときは、則ち仁愛あるなり、諸將陣をばるときは、則ち謀りて以て陣を張り、諸將普請を役するときは、則ち謀りて以てこれを營み、其盜むところに隨ふ、これ勇ありて姓名の顯はる、ことを恐れざるなり、予か曰く、これ實に利口の説なり、然れども實義なし、古に曰く、賊はこれ小人にして、其智君子に過ると云々、賊と爲るの智は君子に過越せり、若し君子のことを謀るべきは、則ち智君子の智にあらず、譬へは犬よく吼へて人をして我封疆のうちに入らしめず、此の智人の守るに勝れり、人よく終夜寐て我倉庫の物をして奪はしめる其守り人として犬に劣れり、然りといへども、犬はその一智にして人の智なし、犬は人にまさるべからず、狐よく人を誑すと雖も、其一智にして餘の智なし、人彼の好き餌を以て謀るときは、則ち己に縊られて死す、故に知る、賊は唯賊の智なり、彼をして君子の位に居らしむども、君子のことを謀るへからず、仁と云ひ勇と云ひ、皆賊の智謀なり、君子のことにあらず、賊の位に在るときは則ち謀計あり、その位を離れて君子の位に在らば、唯純闇にして明かなることなし、これを轉すと雖

も君子たるへからざるなり。

一君子の智と、小人の智と別なり、賊たるもの能く之を謀る、智あるに似たりと雖も、真に賊の智なり、君子の事をなすときは、則ち偏に小人なり、譬へは猫よく鼠を捕るの智の如し、鼠の夜行きてよく食を偷むの智の如し、これ皆氣質の智にして、君子の智にあらざるなり、君子の智は、天理自在なり、楞伽經に云く、譬へは牛に馬の性なく、馬に牛の性なきか如し云々、これ牛を以て馬の用をすることあたはず、馬を以て牛の用をすることあたはず、是氣質の智各々なる故なり、然ればまた馬や牛や天理の性なきにあらざらず、賊はこれ小人なり、賊の智ありてよく人を謀るども、彼をして君子の事を謀らしむるときは則ち克はず、これ牛馬の各々の性の如きなり。

一異道を難へ學ふは、我道の妨げなり、一道を能く學ふべきなり、禪僧ならば、先づ禪部を一筋よく工夫し、教ゆるものならば、教門をよく習ふへし、よく我道を究めてのち、又偏に我道を守り外を見ざるべきは、則ちその見偏枯にして通明の理無く、また始めより異道を難ゆるときは則ち害あり、又始め儒或は老、よくこれを學ひてのち、捨て以て釋に入り、或は醫に入る、これ亦道の廣まる所以なり。

一人前にて痒きところを、ばり、とどかくことは不法のことなり、甚だ慮外なり、形を忘れてすることなり、痒きこと了問なき時は、身をつめりても居るへし、大慈禪師の云ふ、覺へずかゆき所を抓あらわすと云ふ語あるぞ、これ身を忘れてすることなり、正氣にあらざるなり。

一問ふ、天地に氣質の分あり耶、答て云ふ、有り、亦問ふ、なにを以て質とす、答ふ、質は地なり、氣は天なり、地は万物なり、形あるものなり、天は形なし、形無きものは氣なり、天地合して合行はる、これ氣質なり、氣質雜らず、質より氣を生じ、氣より質を生ず、人に於て之を推すときは、則ち全軀これ氣質、時に在りて体氣を生じ、氣体を活す、互に相持して以て立つなり、氣疲るるときは則ち体重し、健なるときは、則ち氣活す、形は人の全軀を總て云ふなり、質とは全軀の内にて目鼻口等を云ふなり、形質と續けて云ふときは、右のことく心得へし、又形となりども、質となりども一字取離して云ふときは、形と云ふて質にもなるへし、質と云ふて形にもなるべきなり、一概に物を心得へからず、又氣質を氣形と云ふたもをなし義あり、又其人氣質なりなど、云ふこと、少し心持別なり、人々の氣に具したる質がある、之をその人の氣質で候と云ふ、平生面相に怒ある人あり、又莞爾々々と笑ふ顔ありて挨拶よき人あり、此等はうの人々の氣に具したる形なり、これを氣質と云ふ、氣の質と云ふ心なり、短慮に怒るも、心寛長にして温和なるも、みな人々の氣質なり。一氣は獨り動きかたし、物体によつて動く、譬へは人の跽動するに、地を踏されば跽動こと能はざる

かことし、足物をふまされは勢ひ出でず、物を恃まされは動くことあたはさるか如し、故に獨り陽生せず、獨り陽成ずといふなり。

一或人、予に問ふて曰く、詩は何の爲にして作れるや、予之に應へて曰く、人生れて靜なるは天の性なり、物に感して動くは性の欲なりと云々、詩の作ること此に在り。

一人昔朝恩を輕んずへからず、爵祿の其身にをよふものは、聊か朝恩を知るに似たり、其及さるものに至りては、曾て以て朝恩あることを知らず、これ人愚なるを以てのゆへに、恩あることを知らず普天の下朝恩を得ざるものなし、只些か深淺ある乎、爵祿の其身よ及ぶもの、外、も一朝恩なしと謂ふときは、則ち我爲にこれを説くへし、帝畿の内は上一人在ます故に、今の世道なしと雖も、聊か道あり、故に民非法の坐に逢はず、令吏若し非法を行ふときは、則ちこれを訴へ以てその坐を通る、畿外の國遠境の民は、朝の光遠し、故に其非法のつみを訴へに路なく、恣に令吏に曲げられて禁獄せられ、或は水火の攻に逢ひ、終にその身を喪す、かなしむべきなり、これ畿内の民は豈爵祿をうけるの外朝恩なしと謂はん乎、蓋畿内に生する所の民は、實に天祿なり、畿外遠境の民は實に悲むべきなり、故に聖王専ら道を以てす、これ即ち天下の民を憐むなり。

一學者は人の非を談すへからず、これ只人我なり、師家これ人の非を談するに咎なし、其故如何とな

れば、人の非を談して一衆をして是ならしむる故なり、蓋師家は人の非を談し、復是を談して衆をして身の非を扱かしむ、人の是を談じて衆をして身の是を増さしむ、小人は一向に人の非を談し、人の是を談せず、故に人の恨みありて我得ることなし、此を以て今謂ふ學者は、人の非を談すへからざるなり、賢者は人の非を談し人の是を談す、若し是非を談せずんば、なにを以て人に教へん乎、賢者は人の非を談して非とせらるゝ人亦之を聞きて之を怒る、賢者人の是を談して是とせらるゝ人亦之を聞きて之を喜ぶ、非とせらるゝ、人の怒り彌非なり、是とせらるゝ、人の喜び彌是なり、抑も人の我非を談するをきくときは、則ち自ら我非を拔くべきなり、人の我是を談するを聞くときは則ち自ら我是を長すべきなり、世間に一等の人、曾て以て人の是非を説かざるものあり、之を以て賢とす、實の賢にあらざるなり、不仁のものなり、此人は假令非に長し惡を増すとも亦傷まず、唯人の非を談し人の惡を説きて、人の憎怨を受くることを傷むなり、已を傷みて、他を傷まざるものは不仁者なり、仁者は人の非を説きて、是ならしめんと欲して己を忘る、不仁者はこれに反す。

一如來大師五千卷の大藏は、五十年心を盡せし言なり、戒律行義を怠るを、我滅後に於てかくせよ、かくせよと、金棺に近くまで遺教したまひしも、皆今の世に變し、沙門の行義俗方に劣りて邪見無慚なり、欲は海より深く、人我山より高し、常に靈山に在りと説き給ひけれども、寂寞の扉を閉ちて

出て誠め給はず、時衰ひ、機降りて、今の世に佛書き給ふとも、祖師出て給ふとも、正道には復りかたし、後世ときあるべきをや、慈尊の世遠し、今の時を如何せん、我輩眞に名を竊む器なり、一事儀にあたることなし、偏に渡世の心までありて、道の心曾て起らず、空しく佛法の名の字をかるのみにして實なきなり。

一 蚤の飛ぶにも心を付くへし、大道の端なり、大道をあきらむるに便となれり、牛馬は其性大なり、蚤は其性小なり、然れども蚤の小と牛馬の大と、皆大道の端なり、大小の道を見ることなかれ、大小の差なし、譬へは黄金を以て蚤を鑄る如く、又牛馬獅子等之を鑄るか如し、蚤と牛馬獅子と皆黄金なり、變化の上に大小長短あり、各荷の葉の團き、松の葉の細き、なにをか棄てなにをか取らん、物各一大極あるなり。

一 萬端につきて、事と理との二に心なきあることなり、事を知りて理を知らざれば悪きなり、物に糊の氣あるときは虫之を食ひ、虫すいて餘所より來て食ひにあらす、糊より虫か生する程に、すいて食むと云ふ義にあらす、其生する理は糊の濕氣ありて、其物の生を損するによりて、濕より虫を生する故なり、此の如く心得るを理と云ふなり、板杯を紙にてはるに、濕氣の糊をつけて紙を以て其上をはり、閉ぢて置けば濕氣を紙にて閉る故に、紙と板との間より虫か生するなり、皆濕より虫か生

すると心得たるか善し、書籍に不審紙をつけるに、久しくおれば其紙のところより虫か生して食むなり、唯氣にて濕してこれをつけるに因てなり、万の物を外に置きて、風濕にあつれば虫か食むなり、塗物又は函の蓋、密なるものに入れて置けば食さざるあり、筆最も此のことし、筆掛に懸けておくこと最も非なり、此理を心得れば、糊にかきらす總別濕氣を書籍杯に忌むと知れば、ひろき心得なり、これ理を知る一徳なり。

一 物皆權あり、唯實を知りて知らざる顔にて權を用ひて善し、權は方便なり、實は一んじつなり、譬へは山椒を疊の上に置いて、後取りて食へば、噎はすと云ふは權なり、これ實は疊の上に置いて噎はずにはあらず、山椒は噎せるものと思出たさせやうと云ふ義なり、此理を現はせば謀計か破れて人か信せぬほど、疊に置くか秘法ちやと云ふたは能きなり、楊枝を手より手にわたせば中かわるく成る、扇子になりとも載せてわたすと云ふは權なり、口中に用ゆる道具ちや程に、他人の手よけかさせしと云ふ義、これ實なり。

一 席に座たしるより、竹倚曲縁等に腰掛けたるは樂しと云は、腰掛けたるより座したるは樂しからんことなり、如何にして斯くあるそごなれば、座するは常なり、腰掛くるは時の興なれば、稀なることを以て興する心なり、心は珍しきことに興するなり。

一醫師の語に云ふ、藥の禁好のものに海の藻を禁物に書くは、神馬藻のことなり、一切の海藻を云ふにあらず、なのりそ云ふは、神馬草のことなり、神の馬には人は勿乘そと云ふ和名なり、然るに本草に、海藻はくすりに禁すと云ふことを見す。

一藥に油を忌むは、腸にあふらかしめは藥かきかぬと云ふ義なり、禁忌にあらず、藥の性を弱ますの義なり、氣のつよき藥は、箸に油をつけているなり、性をよわます心なり、況や油のある藥これ多きを乎。

一此頃勸進柄抄の柄の長さを見て候、或長老の武藏の國より長門まで、高家の身まかりたる吊とて、同宿を使はず、彼の高家の人さもねもひけん、誠に其志にて、海陸万里の難を凌ぎてはよも來らし、さても武藏から長門までは長さ柄抄の柄かなと云はんこと案のうちなり、此志の十の一を修行に費せしと思ふはいかに、我理言あららん乎、此長老の長門まで僧の足を苦め、我本寺開山に一番を焼かず、さけは此僧既に印證をも得つへきなきこゆるほどに、今にをいて香拜を遂げざるは如何そや。

一香も味も淺く輕さを褒美す、然れば人も万事につき淺く輕きかよ、撞たれたるは惡し、人に懸かるはよけれども、出家法師の身にては之も淺く輕きこそまされり、惡過くれば却て蹈ふに似たり、佛

法の慈悲は別なり、一言も發心の種たるへし、愛憐の慈悲は達多五逆にまされりと云へり。

一萬事飽足則は止、未飽足則求むる心止す、少年にして年をつまんことを望み、老いて年をげんぜんことを思ふは目前なり、唯世人のあかさるは財なり。

一道は万事をかぬる、此辨甚だ深し、容易にへんし難し。

一人は古郷を離れて、蝦夷か千島にも住むものなり、唯左迂と云へは、行く人ハ跡に名残多く思ひ、留るものは行くを思ふて、互ひの袖を濕すを思へは、左迂流し人ときくより歎息を起すなり、又知行所領につきてゆくど云へは、目出度きとて取離すへし、人の悲歎は見聞のかはりなり、本心は動かず、見聞によるものなり、故郷を遠く離れ、千里の外へ行くにもよらず、唯悲歎は我にあり、外に善惡なしと思ふへい。

一万事につき、好惡は疾く定めり、人毎に之を知らざるにあらず、よしとあしきとを双へて、誰か好きを知らざらん、好きことを知らずして善道に赴かざるにはあらず、惡きことを知らずして惡道をするにはあらず、善事はするに難く、あしきことはするに易し、難きを忍びすして、其易きをするなるへし、物に能く忍ぶ人惡事をはよもせし、堪へずして惡しきことをなすと覺ゆ、堪忍の二字常に思ふへし、百戰百勝も一忍に如かず、勝は人の欲するところなり、況や百勝をや、然れども

一 忍に如かずと云へり、大燈も吾山に入らんもの、一に堪忍、二に志、三に智恵とありし。
一 因ありと雖も縁なきときは、則ち果を得ざるなり、譬へは因とは舟なり、縁との風なり、果とは到る處あり、初め一の菓あり、これ因なり、此菓をうゆる手はこれ縁なり、菓ありといへども、これをうゆる手なければ牛せず、生せされは次の菓ならず、うゆる手の縁に逢ふて、菓のなるを果と云ふなり、人過去の業因ありて其果を感すへし、されども縁に逢はされは智恵發せず、空しく一生をば果して、未來の縁を待つものなり、六祖能大師は、嶺南の樵者なり、薪を市に鬻くに婆子の金剛經を誦してまことに住する所なくして其心を生すへしと云ふを聞きて心得、遂に黃梅山に到りて得果をなす、六代の祖師之風因ありども、婆子の縁にあはすんは、永く嶺南の樵者となつて身を終るへし、又日々縁に逢ふども、夙因なくんは、感果の理いかてかこれあらん、然れば彼の市に金剛經を讀みて、幾千万人か聞くへし、されども大果を得るものは六祖一人なり、因縁和合せされは、一切のこと成就せざる道理なり。

一 利根の人は妙旨甚し、鈍根に妙旨あり、利根の人は疾く走り行過くるを、鈍根の人は漸々にその理を盡す、利根の人はよく前言を記す、之を説くと雖も妙解甚し、鈍根の人は多言にわたらずして一句一言の上をいて、久しく之を止めて、思惟する故に、利根の人よりも却て妙解を得るものなり
山に人り菓を捨ひ、茸ヲ採る、茸多きを心にかけて走る人は却てこれを得ず、走りすぎたる跡を認めて却て多きを得るものなり、多きを思ふものは多からず、多きをすてざるものは多き。至る事、万事にわたるによつてなり。

一 田夫野人に孝行人に超たるなり、四書五經をよみても不孝の人あり、孝行の田夫野人、何によつて孝行なるを、知る人何によつて不孝なるを、二つともに出ること天然と云は、聖經詮なきなり、不學にして天然の孝行の人あり、學ひて不孝の人あり、人よくこれを辨す、佛法信あるべきなり。
一 濕は浮ふものなり、故に天にそくす、輕さを以て堅實の躰なければなり、村家に蘘茶を煮て之を喫む、濕よく浮、醫書に曰く、清く軽く升るものは茶のいなりと云々、濁酒を温むる鍋を以て茶をにるときは則ちあはさる、以温清酒一鍋煮則濕不消と云々、况や又濕乎、清輕の輕なり、知んぬこれ濁るものは下り、清きものは上る、天理私なし、村夫の語を聞きて、道をあきらむること多し。

一 物と人と皆同し、剛き金に剛柔くして可なり、柔かなる金に剛剛ふして可なり、それ人剛と剛のもの互ひに破る、剛柔にして尤もよし、剛なるときは則ち柔これに隨ふ、柔なるときは則ち剛これをたすく、乾は堅く坤は柔なるの道なり、况や柔よく強を制するものをや、強者は力を以て之を

制せんと欲す、互ひに力あるとき、則ち制せられず、柔相隨つて以て遂に制するに、制せられすと云ふことなし、齒盡きて唇猶存するか如し。

一人は少年に學ひ、壯年に早く立身すべきことなり、西民の所業も何も急ぐへし、假令成得ても老ひぬれば未短し、日暮れて道を急くなるへし、北地陰寒の國には春の花遅し、陰寒にさゝゑられて然り、然らば秋の花は末の陰寒を考へて疾く開くへけれども、節序あれば之も前年の寒氣春に持越し、其傷みや秋の花も遅く咲出づる故に、又來る秋末の寒氣にあたりて盛りもほどきなり、人の中年過ぎて立身して末の短きか如し。

一鳥有先生問ふて曰く、宋儒云く、佛氏方に老莊の文を以て其教をかざると、是なりや如何、答へて云く、此れ朱氏の妄心なり、かの老莊は太極の先を以て無となす、太極の後を以て有となす、無を以て是となし、有を以て非となす、有無の見いまだ消せず、是非の情いまだ泯せず、即ちこれ輪廻の根にして虛妄の本なり、況や無を喜ひ有を厭ひ無を取り有を棄つるをや、虛無の獄に囚はれ自然の縛に纏はれて、有漏の因を成し有爲の果を招く、之を以て能仁氏の道に擬すると、なほ河伯の海若を望むが如くなり、能仁氏老莊の文を以て其教を文ると、それ佛を誣るべからずや、豈老莊の文を用ひて之を文らんや、漢より此方諸經迭に至る、文は譯に由ると雖、義は實に梵より出てたり、豈

譯家自ら老莊の文義を用ひて之を文らんや、譯經院の内群英悉く集る、譯語の者あり、筆授の者あり、證義の者あり、豈一人私に老莊の文を取りて之を文らんや、一經の梵本或は屢譯す、前師の略は後師の梵本に據て詳にするを得、前師の誤り、後師の梵本に據て之を正すことを得ることあり豈妄に老莊か文を取り用ひて、これを文ることを許さんや、唯梵を譯して華となす、必ず此方の言句を用ゆるのみ、此方の道を談するの書は老莊を最とす、故に多くその語を取る、意義は則ち殊なり、察せずんばあるべからず、老莊無爲と言ひ、我佛も亦無爲と言ふ、或は老莊が道德と言ひ、我佛も亦道德と言ふ、何ぞ日を同して其意味を論ずべけんや。

一人の哭と笑との聲をきけば、都も鄙もかはらず、奥羽の間に請せられて、所の人の云ふこと、洛と違ひぬれば聞分けかたし、人の云ふ詞は、先の人を學んで云へり、學ふは皆血氣なり、洛は洛の血氣を學び、夷は夷の血氣を學ぶ、故に夷洛の詞かはれり、哭と笑とは皆本心より出づる故に、夷洛皆同じ、血氣と本心とのかはり此の如し、奉行憲法の人達、彼の笑と哭との出づる本心を以て公事を聞かば、毛脚私の見あるべからず、血氣によらは危し、人心は危し、道心は微なりとは誠なり。一寒き朝は天地凍れり、漸く朝陽昇りて外暖氣を得るとき、家の内殊のほか寒そ、これ陽氣寒をせむる故に、寒氣うちに迫つて此の如し、硯に向ひて居るとき、朝に水凍らすしてありしか、太陽昇り

て外明々たるとき、忽然として硯に氷を生ず、こゝを以てまことを得たり、外陽にして寒内に迫り外寒にして内熱來ることを知る。

一好語は依らずんはあるへからず、その言ふ所の人三歳の孩兒と雖も、言ふ所諫むる所好語なるときは、則ち受けて以て聖賢の語に同しうす、是れ其得ること身に在り、多くは高位高官の人の言ふときは、則ち欽して以てこれを聞き、貧賤の人言ふときは、則ち金言と雖も以て之を輕んず、剩へ諫める人に向ひし顔色を損ず、この損するも亦我にあり。

一爐櫃を地につけぬれば灰濕るなり、上にありと雖も火の性は昇るものなれば、上にありて下を燥すことは妙し、況やまた燥の濕を取ることを知るへし、濕の燥につくこと亦之を知るへし、上に火あれば、大火に小濕勝つて灰を濕をすへきことあるへからずと云へども之を濕す、燥は弱しと云へども燥の濕を呼ぶ故に、火熱の灰負けて終に濕ふなり、美生の心に合せて思ふへきことなり、又善人の惡人に引かれて、終 惡人となることも然り、惡人の善人を招くこと燥濕よりも甚だし、瓢の血を吸ふこと道理掩ふへからず、瓢に水を入れて其水を捨て、踏へ松をけつりて火をつけ、瓢の内へ入れて血を取るへき所に少し口をわけ、彼の瓢の口を推付ければ、血を瓢の内へ吸入るなり、瓢のうちへ入れたる火、瓢の内の水を吸ふて底へ引く次てに血を吸出すなり、火の濕を吸ふ熱の強き

こと知るへき乎

一物の危きことを知らざるは、惜む心なき故なり、取落さはやふれなん、物を累ね重ねて持ち、氣遣ひ無く行くは器を惜む心なき故なり、取落さは破れなん、此器新らしきことやと思ふ心なき人此の如くす、この金玉をあたにをきて人に取らるゝも、金銀を、しむ心淺き故なり、虎狼の群に走入りて急に飛びつかり、或は敵の所に思ふことなく走入るは、身を惜む心なき故なり。

一善の惡を消すこと、あしき臭氣に香を焼くか如し、智人出て愚者の影なきか如く、月出て星の影なきかとし。

一渴するか故に水を思ふ、飢ゆるか故に食を思ふ、渴せされぬ水を忘れ、飢せされぬ食を忘る、鴉か鳴きたるか惡か身に來んへきか、狐か泣きたるか何事か惡か來るへきかなどて、氣にかけぬるは惡事を忘れざる故なり、惡も自然、善も自然、惡も遂くへうらす、善も遂くへからざるなり、善惡は双對するものにて車の兩輪の如し、惡なくんは善もあるへからず、惡あれば善もあり、只管に善を思ふとて善のみ成るへからず、只管に惡を嫌ふとて惡なかるへきにあらす、善惡々々廻るなれば善は善に任せ惡は惡にまかせて、善惡一任して一をも胸に置かされば、鴉の鳴くも、狐の鳴くも、かれか三昧にして一切氣にかゝることなし、況や又善惡は二ならずして法にをいて分つことなし、又

た衆生界を假に建立して迷妄の人を救ふには、善あり惡あり、此の善惡その迷妄の人自ら作出して又自ら嫌ひ好むなり、惡を嫌は、など自ら惡をする、善を好まはなど善を勤めざる、自ら作りたる惡の身に報ひ來るとき、この理を歎きてあらぬ狐鶉の鳴くをも思ひあて、氣にかけぬるこそ大なる誤謬なれ、又人善をつみて其善身に報ひきて、榮へぬるを見ては之を羨む、自らなさる善如何にして身に報ふべきそや、或人の曰く、善を作す人此世にて貧困にして、百事心になわす、又窮して心根あしくして、人の惡々なす人と呼る、もの、その身榮え、心に万事任せぬることを見れば善の報ひ、惡の報ひと云ふもなきに似たりと云へり、曰く、古人既に此の不審あり、これは貧人の舊債とて先づ償ふか如しと云へり、去年去々年に借りたる債物を先づ償ふて、當分今年の借物をは末へのふるなり、此生にて不思議に善心に飯し、善をなすと雖も、先の世の惡あり、其の惡酒身に就て、此生の善未だ熟せざるか如し、現世の善は未來に必ず熟して、今の善未來の身に報ひきたるへし、經に前世の罪業によつて應に惡道に落つへきに、今の世の人に輕賤まる、かための故に、前世の罪業即ち消滅すと説けり、罪業今の世に消滅して、未來には善道に赴くへしとなり、又此の世に惡を作す人も其身に惡きたらざる、これ亦少しき過去の善因感して、せんくは身にきたるなり、當分の惡は未だ熟せず、この惡未來の生に必ず身に昇るへし、彼の舊債の譬への如し。

一 司馬溫公の家訓に曰く、黄金を積みて子孫に遺さんと欲す、子孫守らす、書をつみて子孫に遺さんと欲す、子孫讀ます、陰徳を冥々の裏につみて、子孫長久の計を爲すに如かすと云へり、今我身に積む所の善、子孫の長久となるべきこと、如何か心得べきそや、子供末々のためとて、善をする人今もあれば人之を笑ふ、これ又如何そや。

一 相撲をとる人の勝たん／＼と思ふか故に、我よりか劣りたる人をは、もし存分骨身の破る、程、力に任せて勝ちて喜ぶと雖も、亦我に勝れる力ある人には負けて骨身を破られて苦むなり、世間の人に心も人を毀ん、人惡かれと思ふ人は必ず我身あし、我より弱き人をは抑へ滅すれども、又我に勝る人ありて我を抑ゆること歴然なり、只人も善かれ、我も善かれと思ふべきなり。

一人として人のためによかれと思ふこと、誠に難いかな、凡ろ生きとし生ける、争はずと云ふことなし、空をかける翅、地をわしる獸、螻蛄蚊虻に至るまで争はずと云ふことなし、然れば人として争はざること難し、心底にはあらそふと雖も、外争はざる顔するは禮なり、これを人と云ふ、此禮を存せずして人に向ふときは、則ち早くとも争ふ、これ人にして禽獸に近し。

一人の人を思ふ心をつけて見れば、實に人を思ふにはあらず、人を思ふことのみを云は、親の子を思ふなるへし、然るに子を愛する人を見るに、毒物を食はして忽ち病を起すと雖も、彼に食は

せたとしと思ふ我心の欲に忍びすして、言はず病を起すべし、之を與へてくはしむるときは、則ち子を思ふ心に我欲勝ちて毒を與へて病ましむるなり、我子隨意に食ひ遊山玩水して身を貰して、死に及へども之を責る可いあたはら、然れば彼を實に愛するにあらす、子の好む所に従へば子之を喜ぶこれ喜はしめて己か樂みとす、これ子のためにあらす已が愛に溺るゝなり、佛祖の衆生を思ふは親の子を思ふが如しと云へとも、愛に溺れて子に毒食を與へて病を起し、愛に溺れて子を放逸ならしめて、身を喪すに至るに非ず、佛祖は魚肉は人の好む所なれども之を制し、邪淫は人の好む所なれども之を戒しめ、飲酒は人の甘んする所なれども之を制す、五戒を禁し、十善を勤む、これを寔の大慈大悲と云ふ。

一或人の云ふ、君子たる人も人を惡む可いありや、我答へて云ふ、これあり、不義の人は義者の讐なり、無道の人是有道の讐なりと云へとも、我ために惡む可いなし、我ど人との間にして讐を報ゆる可いなし、不義不仁の人は道の讐なり、君子は之を惡む、人我に讐をなすといへども、私のあたは捨て、報ゆる可いなし、故に曰く、伯夷叔齊は舊惡と思はずと云々。

一李太白か云ふ、それ天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客なり、浮世夢の如し、歎をなす幾時ろ、古人燭を乗りて夜遊す、其所以あるなり、万物と云ふに有情非情籠れり、人をも物と云へり、故に人

物と云ふ、天地の間は万物の行通ふ旅の宿なり、遂に止まる可いなし、光陰の過ぐる可い又旅客の過ぎてやまざるか如し、四時の過行く可い百代も遠ふ可いなし、この身は夢の可いとしと、有りて見跡なし、又見るかうちども幾時そや、故に古人夜を以て日に繼ぎ、燭を乗りて夜遊する可い所いなさきにあらすとなり、此にをいて人あやまるへし、遊ふに節あり、せつに當らんは遊ふも憎からず、節にあたらすして遊ふは狂人なり、節をすく可いなかれ、節と云へるは、竹の節の可い可い方すの事に大方定まりたる程あるものなり、然れば遊ふ可い程あるへし、その程々に過ぎなは善きにあらし、公家武家社家出家、それ々相應の遊ひあるへし、其身に不相應の遊ひ之を節にあたらすと云ふへし、出家などは遊ふと云ふ可いあるへきにあらす、然れども世下りて人の心劣りぬれば、大方の相應したる遊ひは人の免す可いあるへし、夜會の忍びには詩歌杯もゆるゝあらん、三十句二十句を聯ね杯するも、偶風雅の人々交わる可いときの興態さもあるへし、之をよき作として佛事を忘れなは、出家兒にあらし、又月花に興し、十四五許の兒若衆など、誘ひ花の下月の前に破籠小筒など携へ、小硯短冊箱など見へたるもやさし、道心あらん出家は之をもよしとせず、出家として道心なしと云ふ可いあらんや、道心ある上の私の車馬なり、斯る可いことをさへやましとす、此外磊直たる風情をや、公家武家によらす或る族は云ふ、浮生夢の如し燭を乗りて夜遊すと、云ふ可い尤もなり、な

にこども夢そ、只遊へどて限りなく心を動し、色に耽り、侈を極むることは古人の言を引き用ふといふとも、古人の心意とは雲泥遠ぬるとなり。

一某の人、身のために宜しからざることを止め給へど諫むれば、我は、や六十になりたり、此年まで此のこくして過來り、今少くは兎も角もならん、まゝなりと云ふ、吁善道ならば朝も聞いて夕に死すとも可なりとこそ思ふへけれ、六十の上五年にても十年にても生んかきり、今日より身を善に改めんこと喜ばしからずや。

一人の眞實は何にて知りぬへき、涙の外あるへからず、思はずこぼし出でんものにあらず、泪をこぼさん心偽あるへからず、其事を深く思ふ心動きて、足手の爪の先までこたへて、情にてせめ出せる水なり、五臓を繩にてまきしめて出さんとすとも、清める水一滴出づべからず、情力の強きこと不思議なり、人の身の中に涙のあり處一所ありて、泣くときにそこより出るものにあらず、情を以て絞り出すなり、愛水なり、經には愛水のうちにこめたり、然れども何事に付きても涙して其事を感し思ふと雖も、志遂げずして其の涙偽に似たることあり、人の心朝夕に變するものなれば、かへる心もあるへし、又思ふと云へども叶はずして、思ふこと偽にあるよしもあり、後のことは兎もあるへし、涙を流す端的に偽あるへからず。

一其躰の動く云ふは、内に心動きて後躰はうごくなり、然れば躰の動かぬとて動かさるにはあらず艸木は動かぬものなり、風來れば動く云ふ、然らず春は万物動くなり、動きて花緑を生するなり躰、あらはれて動かされは動かすと云ふは、道理を知らざるなり、人も其所へゆかんと思ふ心、己に中お動きて後動きてその所へ行くなり、然るを身動きてゆくを見ては動く云ふなり、中に動く所を人みな見ずして、動くとは心得ざるなり、思ひ内にあれば色外にあはるゝと云ふも、躰は動かすと云へども、色にあはるゝは内動く故なり、艸木は座定まりて進退なき故に、動かさるやうなれども、内に動きて花緑を生すること、艸木のうごきなり。

一梅花を咬めは梅仁の味に同じ、杏花を咬めは杏仁の味に同じ、諸華諸仁皆同じ、仁は木の根本なり枝葉も亦其根本より出づ、然らば枝葉を咬むとも其仁の味たるへしと雖も、花は其木よりも精粹なるものなり、枝葉を咬むときは則ち其仁の味あることを覺へず、これ枝葉も根本は同じと云へども麤にして眞味渺さ故に覺へざるなり、花は木の精神なる故に根本あり、味こゝよ聚りて難駁なきゆへなり、譬へば人の本性は仁の如し、これ人の根本なり、根本より起りて言行にあはれば、偽なく全一なるは仁と花と、味一なるか如し、人の情意をこは艸木の枝葉莖の如し、枝葉莖皆始めは仁より出生すと雖も、眞少くして其仁の味を覺へず、人の情意誠も根本の性を離れすと雖も、血氣に

化せられてその眞を失ふ、故に偽にして眞なし、艸木の枝葉を咬みて仁の味なきか如し、艸木に枝葉はかりにて花なくんは誰か之を愛せん、人どて眞なきか如く、人としてまことなくんは誰か之を愛せん、艸木の枝葉にも花仁の味は少しはあれども、麤に覆はれて精味顯はれざるなり、悪人も眞は根本の性に備はりてあれども、情誠に覆はれて其光あらはれざるなり、善人は情誠消して本性に随ふゆゑ、眞多くして偽少し。

一火雲とは、只雲の赤きを云ふなり、雲には黒く白きならてはなし、紅日映ふときは雲赤く見ゆるなり、紅葉に露を見るか如し、雲の赤きよはあらず、雲に黒きはなし、厚きとき雲黒く見ゆるなり、煙の薄きときは白けれども濃き時は黒く見ゆるか如し、山より生して上るときは雲皆白し、又雷雨催して風雲を峯へ吹きあつむるときは則ち黒し、雲厚き故なり、青は天の色なり、然れども天に青き色なり、遠く高き故に青く見ゆるなり、水淵深きときは青きか如し、虚緑と云ふは天の青きに似たる色を、緞子に染めなして云へり。

一薰風南より來り、殿閣微涼を生ずとて、夏は南の風涼きなり、薰風とは南風なり、或人不審して云く、南方は火なり、薰とは火すへると讀めり、殊に夏にしてなにとて夏の季、南方は涼きや、曰く南方は火なり、火は熱最も甚たし、熱風を生ずとて必ず火より風生するなり、南方君火の威烈扇

ひて北方に溢れ來りて涼きなり、其火の甚だしき所は涼からされども、火より生ずる風のゆく處涼きなり、古歌に「此ほどの南の風にうきみるのよる／＼すゝし、蘆の屋の里」

一南向の座敷は、夏涼く冬暖かなり、夏は南風涼し、冬は時寒するに南の陽氣によりて暖かなり、北向の座敷は、夏暑く冬寒し、夏暑きは南塞りて風來らざるゆへなり、冬寒きは尤北に向きたれば、北方の陰寒に向ひ南陽に背くゆへなり。

一船にも荷を重くつめは覆るへし、車もまた然り、馬も重く荷を負せぬれば、脚を折るなり、人も身に應せざる荷物を持ては、身の舟を覆へすへし、身を軽くもつへきなり。

一五條の橋の上にて、乞食手を出して云く、因果の道理にせめられて斯るうき身に一文下されよ、これは因果のかなしきものにて候と云ふ、大聖國師諸人に語らせしは、師代りて云く、をそいすゝ生々の間は我等も斯る身とや成りつらん、生を隔て即忘の小根なればいさしらす顔して、酒の酔の昨日狂ひ、亂走して人にうたれ縛られしも、酒毒のために神をくだき魂を散せられて昨日を覺へず、只今日とのみ思ふか如し、生死の砌は錢湯爐炭のせめに、舊有の身の苦みを忘失すること、彼の酒の酔の如し。

一世に虚とすへき理なり、皆實なり、もし虚を述るの文あるも虚を以て休むときは則ち虚即ち實なり

譬は泡影を説くときは則ち虚をどくなり、虚は即ち虚にして説底は實なり、若し實説を以て虚とするときは則ちこれ虚なり、虚を以て虚を説けば、これ實にあらざる。

一小事の費をなにも思はざる人は、大事をなしかたし、小を積みて大をなすものあれば、小を捨て大を成すことなるへからず、大の本を忘れなは末廣くなるへからず、草木も一寸に生出づるをわしたて、こそ、大よもなるへきものなれ、君子は本をつとむ、本直ち道成ると云ふこと孔子の語なり、萬に本あるへし、本をわすれぬ心よきなり、一粒の米一錢の錢を惜しと思ふ人は、大なることをなすものなり。

一身貴く成りて本の賤さを忘るへからず、家富みて貧きときを忘るへからず、賤きは貴きの始め、貧きは富のはしめなり、主の恵みにて身貴く成りて、賤きを忘るへゆへに、主の恩をあたものになして道違ひぬるほどに、果して身失ふ、主の恵みにて家富みて貧きを忘るへゆへに、主の恩をあたものになして、道違ひぬるほどに、果して身を失ひ又家を亡ふ。

一論語に已に克ちて禮に復ると云ふは、己克つとは我身を賣ることなり、禮に復ると云ふは、禮

道なり、已か身を恣にして隨意隨行なれば、道はみな外になるなり、然るにより己か身をせめて隨意にせされは道に叶ふほどに外邊なる道が道に皈ると云ふなり、禮は道にかなふやうにしたる禮なれば、禮即ち道なり、道即ち禮なり、道と禮と二あるへからず、器を鑄るに陶を以てせるか如し、型と鑄たる器と變はる所なり、小人は我身を樂くして道を亂すなり、君子は我身をせめて道を道とするなり、その條目幾許そや、分量に過ぎて大食するもあし、その人々の分量あるへし、殊に出家など放逸に物を喰ふこと曲なり、遺教經に食を受けて樂を服するか如くすべしと、食は飢を救はんかためなり、味を樂むことかれとあるそ、天は高しと雖もそりかへりてありかす、地は厚しと雖も荒くふみならさず、夜は賤ね晝は起さる、これ人の常なり、然るに朝寢晝寢にすること、己をせめさる一條目なり、己責めずは道はなきものと知るへし、一切のことに就て我身に樂みと思ふことは、みな道に叶はざる業とするも、人に安きことを與へ、我は難きことをする、食物もよき所をは人に勧め、あしき處を我食する、これ皆已をせめて禮に復るの義なり、今時の人はまつ仕善きことを我して、善からざるものを人に與へ、食事もまつよきを我食したかよきと云ふ程に、道にかなふことは一もなきなり、適一人も道を好む人あれば笑ひ猜み倒さんとする、これ世人の意なり。

一法華經八卷を簞となり、阿彌陀經を腰簞にして着たりとも、其經のうち一句半偈の意旨にかなふや

うに、心をは持つましけれ、雨は降るども笠は若さりけり、地獄直走りと一休もいはれしとなり。
一それ地獄の説相多し、地の底由旬を重ねて在りと見えたり、然れども此等のしさいは得道の人此れを知るへし、由旬をかさぬると云ふは其遠きことを云へるなり、遠きとは天堂と地獄との間なり、誠は地獄はわたる所有るへからず、一念相より見出したる地獄なれば、大山の麓、海岸の邊、或は荒野、或は深澤、一切所を定めず、刹那の間に獄相あらはれて、焦熱大焦熱、紅連大紅連、牛頭馬頭の羅刹の阿責に逢ふと思ひて叫喚大叫喚、又刹那の間に、朝日に霜の消ゆるか如くにしてなくなる無しと思へば又現す、かゝること念の間にと思へども、各一念に劫を経る如くなるは、その人の念あるに依てなり、衆生此苦を受くるを、佛を憐みて弘く方便を以て之を度せんすとす、昔一僧あり荒野のうちに俄に地獄の川を見る、驚きてこれを問へば、獄卒の云ふ、これはこれ玄砂の地獄なりと云ふ、玄砂とは、玄砂の備禪師のことなり、玄砂は修行に出でんとて、親の障りになることを思ひ、親を舟に乗せ海に沈め、飯りて修行にいられし人なり。
一江口の女、普賢菩薩となりて、白雲に乗りて天に上ると云ふ、普賢女と云ふは普賢の反相なり、姪欲熾盛のもの、苦を助けんとて、女に化身し人の望みを叶へられたる、之を以て江口の謠に作れる歎、積古略と云ふ書にて見たと覺ゆ、かさねて引見るへし、善導大師こども此書にあり。

一物を辨ふはみか氣に依る、よくものを味ふに目を閉くとまは、則ちこれを辨ふ、尤も目を閉くときは則ち精氣散する故に覺へず、物を味ひ知ることば目を閉きて分別せぬは知られぬぞ、盲目の者よく覺ゆるも目を閉ちて氣が散せざる故なり、古語に目を閉ちて蝸牛を食ふ酸澁苦と云ふも、目をとち能く蝸牛を味ひみれば、酸く澁き味かあるそとなり、委しく物を味ふは目をとちて心靜に味はぬは知られぬぞ、一場とは宮分のことぞ、其場と云ふ心ぞ、第一場など、云ふぞ、此句著語につかふぞ。

一木の枝垣壁のある方へさゝさるは、草木之を知るやうなれども、知るにはあらず、草木南にあれば北にある壁よあたる氣か、つかへてよられざるにより、南へ傾きて北へ枝をさゝさるなり、又南に垣壁などあればそれにあたる氣に追返されて、枝をさゝすして北へかたよるなり、垣壁と樹との間は空き所なれども、氣その間に塞りてあるなり、氣は人の目に見へぬものなれば何もなき様なり魚の水中にあるか如し、魚の一鉢頭上腹の下左右みな水おれども、魚の目は水は見へぬなり、魚水を見ず、人空をみすと云へり、又譬へば小兒竹鐵炮と名けて、竹の筒に紙を咬みしたきて、玉となし之を入れて、又あとより一つ重ねて紙のしたきを入れてつきやるとき、さきへ入れたる紙の玉へ、後の玉行届かぬさきに、はつしと鳴りてさきにゆくなり、これ前の玉と後の玉との間は空な

れども、その間に氣が充ちてある故に、此の如く萬の義理を工夫するに、初め淺く思ひたること正義にあらす、猶よく工夫して二重に正義を見立てるかよく合ふものなり、みな思ふは草木は心なしと雖も、垣壁のある方へは枝をさしぬ程に、草木も心なきにあらすと云へり、此義は尤もさうにあれども、枝をさしぬか心あるにてはなし、氣にせかれてさしれざるなり、初めの義を取りて尤もなりと思へども、今一重思惟して見れば、草木も知らずして氣にせかれて枝をさしざるなり、万のこどをなすに何事かなされざることをあらんやとて、無理になさんとすれども成さることあり、必ずならざる道理あるへし、此道理を見る人は止めてすまじきなり、その道理を見ざる人何事にも無理をするなり、壁垣の間に氣塞つて草木の枝のさしざるか如し、草木も知らずして枝をさしれざるなり、人の作す業も何故になされぬとも知らずしてなされぬこと事々あるへし、理を知る人は此事を止むへし、理を知らずして無理になさんとするは、草木に劣れる歟。

一世諦の方に始末なくして財寶を獵に費すもの、その行未必盜をす、然らされは虚言を云ひ人を誑かして、人の財寶を取らんことを思ふ、これ穿窬の盜人にはあらす、されども同じくこれ盜人なり世諦に始末よきもの、我財寶を守りて失はされは、自ら用に事をかゝす自用にことを缺かすして盜せんと思ものはされなり、自用に事をかゝかために危きことを忘れ、命の果んことをも顧みずし

て盜をす、然れば人は人の財を貪らす、よく始末をして自用の缺けざるやうにすへきことなり、人を貪らすして我持つ財を守るものは、人のために害せらるゝこと多し。

一老釋の二門を宋儒之を異端と云ふ、然らざる歟、夫子の異端と云へるは、正しく老釋の二門にあらし、孔子のとき佛法未だ起らず、儒のさばりて成ることあらし、孔子既し道を老子に問ふ、老子をも異端とは孔宜ふにあらん、家語に曰く孔 南宮敬叔に謂ふて曰く、吾聞く老聃古に博く今を知り、禮樂の源に通じ道徳の趣を明むるときは、則ち吾師なり、今將にゆかんとすと云々、此の如きの語を得て老子を異端と云はんや、只此言人の異端と云ふことを知らず乎、孔子の道釋を異端と云ふにあらし、三皇も既に道なり、我宋儒に問ふ、古今に明かにして、禮樂の源につふし、道徳をふらむるの外に孔子の道ありや、林氏か四書正義に、三教正宗と號す、異端の事見へたり、異端とは道釋の二門を言ふにあらす、三教各異端あり、儒にして仁義の外に道を求むるものは儒の異端なり、道にして性を鍊り神を頤ふ外に道 求むるものは道の異端なり、釋にして心を明かにして、性を覺るの外道を求むるものは佛法の異端なりと云へり。

一 百兩の黄金は惜まず、一飯をは輕んぜすと如何と問ふ、人を救ひ人のためにす、黄金なんぞ惜からん、一飯輕しと雖も命をつくこと一飯に在り、豈輕んすへけん乎、古帝王の時に士食殘りの一飯

を溝に捨つ、王則ち士を杖殺せらる、王の兄弟在りて云ふ、一飯を以て人に代ると云々、人は大なり一飯は輕し、然りと雖も後人の戒めとす、眞に大ひなる哉、一人を殺して万人を助くるの理なり、百姓眞に艱難をつくして穀を得る、之を輕んせは、何を重しとせんや、民は國の命なり、君子は腹心のことをくするそ。

一楚王狩るとき、山跡に一人伏して起上からざるものあり、王之を問、せらる、此者答へて云ふ、飢人なり、王これに一飯を與ふ、飢人乃ち起去りて、其後隣國と戦ひにをよひ、敵軍より戈を逆にして戦ふものあり、何者そと問はせらるれば、楚山の飢人ありと云ふて戦ひ死したそ、賊に命は義によつて輕しと云へり、此者戦ひ死したるか親切なり、吾主には忠あつて人には義あり、此者楚王の軍へ騙入りて與力したらは曲事なり、楚王一人を得たりとも勝利を得へからず、吾主のために兩心なく恩を知りて戈を逆にす、涙こゝに在るをり、人の命は黄金なり、輕からざる黄金の命をかろんして、重からざる一飯のために死す、眞にこれ義を知るもの。

一垣を破り、藏の尻を切るばかりが盜にはあらず、道理に叶はざる物を衣、道理にかかはざるものを食ふもの皆盜なり、出家として道心なくしてよきものを着、よきものを食ふ、これ盜人の長吏なり、臣として君に忠節を存せずして肩に衣、口に食ふものは皆主君のものなり、これ亦盜人に似たり、數

年養はれて一度君の用に立つへき身を、行ひの義なく無養生して終に一度の用にもたへず身を果さは、數年の給はる所の所領皆盜賊に同しかるへきなり、主親を持ちたらん人は我身を我身とをもはす、主親の身と思ふへし、主親の身と思はし、何を我儘にして身を毀ひ、一度の用にたへずして大事の身を捨つへけんや、數年の恩賞を一度報せんと思はし、食ひたきものも多く食ふへからず、飲みたきものも過すへからず、有りたき儘に身を持つへからず、身全からずは如何りして望みは違ふへき、其望なくして徒に恩賞をうけて其祿を食ふは、盜人に異なるへからず、人たるもの之を耻ぢざらんや。

一因果歴然を知りて因果を亡すものは、教宗なり、因果歴然を見て因果にあらず、元因無ければ亡すへき果ありと見る、これ宗乘なり、怪きものを見て怪と爲されは、その怪自ら消ゆ、因果を見て因果とせざれば、因果自ら亡ふ、問ふ、これ斷滅にあらず乎、これ斷滅にあらず、佛の言を見ずや、顛倒夢想竟涅槃、私に云ふ、因果を見て因果とせずと云ふ語を見て、凡そ人因果を破るときは、則ち因果に落つへきこと歴然なり、因果の境界に暗からずして至りせず、狼に因果無しと思はし、地獄に入らんこと矢の如き乎。

一達磨初めて禪を作り出せるにあらず、若し達磨作り出せると云は、邪法なるへし、所謂禪は佛の傳ふるところの法なり、佛に無量の諸佛をさせども、釋迦如來西天に出世し給ひてより慈尊下生せ

てのわいたに、佛推出して申すは釋迦如來のことなり、餘の佛達を皆其名を呼びて、阿彌陀佛、藥師佛、多寶佛と申すなり、無名に佛と申すは釋迦と心得へきなり、達磨の立てるところの禪は如來藏裏の禪なり、蓋禪に多種あり、外道禪、凡夫禪、大乘禪、最上乘禪なり、圭峯宗密禪師の錄の中に之を擧ぐと寶藏錄に載せたり、その語に云ふ、異計を帯ひ上を忻ひ、下を厭ふて、修するものは、これ外道禪なりと云々、上をねかうと云ふは、菩提を求むるを云ふへし、下を厭ふと云ふは、煩惱をさらうと云ふへし、異計を帯るとは、佛の諸行の外に別行をはかるなり、此を以て禪とするは外道なり、一種一行にとふきなり、凡夫禪とは曰く、正に因果を信し、又忻厭を以て修するものはこれ凡夫禪なりと云々、正に因果を信すとは、上をねかひ下をいどふの義なり、煩惱は則ち法界の因果なり、煩惱を信する故に之を厭ふなり、頼み自心を覺るときは則ち法界の因果を世々回りながら、因果にあらず、因果なきにあらず、因果ありながら、因果にあらざることを知らざる故に、まさに因果を信して忻厭を以て修す、これ凡夫なり、頼み自心をさどれば、因果は因果にあらず、故に曰く、因として修すへきなく、果として感ずへきなしと、此にをひて古今千錯万錯、探て因果なしと謂ふ、今日諸人灰頭土面、これ因果にあらずして何を、百丈既に誤りて五百生野狐の窟に入る今の參學の徒、之を誤り畢る。

一 哭くも笑ふもまた人面の變なり、常を失ふものなり、悲歎は他方より來りて内に感し外に現はる、ものなり、悲歎他方より來るとは、我子か他國に在りて死せりと告げ來るときは、悲み他方より來て耳にいり、内に感し人面之れかために哭す、我子他方にありて幸ひを得ると告げ來るときは、則ち歎ひ他方より來て耳に入り、内に感し人面之かために笑ひを合ひ、我にもと悲歎なし、他方より來る故に悲み盡き歎ひ盡るときは、則ち笑ひ去り哭き去りて面常に復るなり、人みな變を見て常を知らず、常を知るものはよく變に隨ふ、もし悲歎もと我に在らば、悲歎常にし、絶ゆへからず、時ならずして來り、また時ならずして去るときは、則ち喜怒哀樂皆常なきなり、我心は常なり、譬へは鏡のごとく明なるときは則ち常なり、時にをひて影像の現はるゝはこれ常無きなり。

一 萬の所作は、上手と云ふは力を用ひざるなり、道理を得て作すことには力入らざるものなり、人の骨切るごと、力にて切らば、如何なる刀も力に任せは切れなん、小力のもは人に切られてのみ果なん、力にもよらされはこそ、大力の人も小力のものに隨へられ、果ぬれ、刀を用ひして天下を取るも道あり、木竹玉石を磨くに、力を入れて推付ければ皆磨かれず、手を輕ふしてうけていつとなく磨けば、高き所ひくゝなり、低き所平かになれり、推付てきしれば只光彩のみ出來て、高き所は舊に依りて高く、低き所は舊に依りて低くして平等ならず、木賊と木竹の間ゆるかせなれば

となりて木竹の高き所落つるなり、推付ければ木賊と木竹の間緊密ふして粉出づへきやうなし、うけて磨けば兩物の間に粉出つるなり、力を用ひずして事を調ふるなり、平胃散と云ふ薬は、枳殻を以て胃の高きをとり、白朮を以て胃の卑きをたすくるに依りて胃平かに成るとなり、木賊の強きは枳殻にたくらへ、人の手の柔和なるは白朮にたくらへなは、其物平らかになるへし、木賊の強きは又力を強くせば、高き所は其儘高く、卑き所其儘低くして、平等をなんそ得んや。

一硯に墨を研るも同じ義なり、緊しく打付ければ墨却て出でず、墨と石との間ゆるかせなれば、墨粉となりて色濃かになるなり、さてにや諺に墨をは餓鬼にすらせよと云ふ、殊に強くすれば墨あらくして筆紙に泥す。

一馬によく駕す人、手綱に力を用ひず、鞍上に理を得て、腰を以て馬を自由にやる、收むれば馬止まらず、放せば馬却て止まる、馬と我と心あくいて合ふこと、此道の眼と云ふ。

一庖丁が牛を解く、其刀九年に一度磨きしと云ふ、これ其力を以てせずして、刀を費さざる故なり。

一輪扁か輪を斲るは、ゆるやかならず、きひしからず、これを手に得て、これを心へ應ず、口にも言ことあたはず、數ありてこれを存すと云へり、かく云ふは莊子天道の篇に云へり、桓公の堂上に書をよめり、輪扁と云ふ者は、車の輪作る人なり、彼の槌をすて鑿をすて、堂に上りて桓公に問ふ

て曰く、公の讀む所のものは何ぞ、公曰く聖人の言なりと、扁か云ふ、聖人在りや、公の曰く、既に死せり、扁か云ふ、然らば君の讀む所のものは、古人の糟粕のみと、桓公の曰く、我書を讀む、輪人何ぞ是非するを、但その理あらは可なり、もしさなくは殺すへしと、扁か云ふ、我爲す所以を以て、君子の道をはかり見るに、輪をけつることゆるきときはくつろひて固からず、きひしきときはしよつて入らず、されは徐からず疾からず、只これを手に得て心に應ず、その理は口にもいはれずその分數と、我心との其間にありて「我子にも教ゆることならず、子も受くへきやうなき道なり、故に七十になりて老いぬれども、我自らこれをつくる、古人も此道は傳ふへからずして死す、然るときは則ち君の讀む所の書は、古人の糟粕のみなりと云へり、今の書に残るところは古人の言なり、古人の言は酒の糟の如し、酒の糟の干したるを嘗めて酒の味は知りかたきなり、書をよく讀むものは多しと云へども、理を得るものはすくなし、故に今の世に聖人の書を講しあきらめて聖人に遠る。

玲瓏隨筆 卷之四

一偏に人を誘ひ偏に人を褒む、皆理にあらす、佛法は福智の二嚴あり、智を以て福をすて福を以て智を捨つ、皆相當らず、池寺の白翁か許に京師よりきたる僧あり、則ち欲深き坊主は居られさうかと問ふ、誰そと云へは微翁のことなり、此言をきいて無欲を以て殊務とす、微翁誘ふへからず、又偏に微翁を讃めて白翁を誹るへからず、唯白翁を以て微翁をうすくし、微翁を以て白翁をあつくするときは、則ち其二つの中間に不薄不厚の道あるへし、白翁を以ては針の頭にて鐵を削ぐの費をを示し、微翁を以ては泥多くして佛大なるの理を示して尤も可ならん乎、南陽は車を帝城に轟かし、懶融は芋を衡山の煨す、懶融は智を純らにし、南陽は福を傾く、偏に智を立てんと欲するときは則ち智に用なく、偏に福を修せんと欲するときは則ち用体を失す、もし用体の二つにをいて何をか尤も重しとせん、体をすつるときは則ち用あることなし、体あるときは則ち終に用なきこと能はず、然れば則ち体を以て尤も重しとするなり、智は体なり、福は用なり、又此にをひて曰く、池寺今日法

水潤る、靈山今日獨りいまた散せず、此旨如何、曰く、池寺の法水今日早く潤る、靈山のいまたさんせさるも亦終に盡に歸すへし、此にをいて若し体を失せば再ひ何ぞ起らん、達磨大師の曰く、我法三千年の後未だ一絲毫も移し易すと云ふ、これ其体に依りて言ふなり、達磨寺幾度か廢壞に及ぶ其体を立つるゆへに又起りて今に存す、或は廢壞して廢壞せざるの眼は又一道なり、混雜すへからざるなり。

一善く天を言ふものは必ず人を質す、よく人を言ふものは必ず天にりどつく、仙傳選 天と人と一なる

か故に、天を以て人をたしせは遠ふことなし、よく人を言ふものは天にもどつく、思選これ又天と人と一なるかゆへなり、人天に随ふときは則ち人立つ、天に逆ふときは則ち人亡ふ。

一如法作なるへし、殊勝作なるへからず、如法とは佛祖の威儀なり、衣を著け袈裟を被り、その容を造る、これ度生の化表にして形に在るものなり、殊勝は心より生ず、もし殊勝つくるへくんは血氣の煩悩なり、人家の男女を誑すに似たり、殊勝は求めずして自ら至るとも云へり、解行證の三徳圓備の人はさもあらはあれ、自然にして行跡道に叶ふものは人これを見て殊勝といふ自ら造るにあらざるなり。

一若し欲をはなれんことを要せば、人の物を受くるに多かるへからず、多くうくるときは則ち欲いよ

くふかし、譬へは絹をそめるが如し、そめるに随つて其色いよ／＼ふかし、凡寶藏庫に滿るに隨ひて欲いよ／＼ふかし、一藏滿つるときは則ち又一藏を造る、藏の足ることなきに至る、財すくなき人け深く惜むの心なきなり。

一法師の弟子を取ること暫年を喝食と稱し、或は小僧沙彌と作る、養育して以て大僧と爲す、而して後遍參行脚して定まれる師なし、自ら工夫座禪して得ることあれば則ち見解を呈す、其呈せる所の見事道に契ふときは則ち某師一言の印を以てす、即ち拜して以て師とす、故に定れる師なり、業をうくるの師を以て法の師とせず、其徧歴の間に幾許多くの艱苦を経、野に暮し山に明し、露食風殮し、都て道の爲にするものなり、此の如き豈道心なからん乎、近來まで暫年の沙彌にして、愛育せられ、左右を離れず、絹綿を厚くし、飲食を豊にして艱苦を知らず、偏に髮を削るの俗見なり其師彼を愛育すること恰も老婆の孫を養ふか如し、其後此者の修行と稱し、了畢に一枚の印可の狀を書きてこれを授け、終に門を出でず、目のあたり堂頭和尚と成る、此の如きときは則ち毫末の道心なきも亦宜なり、法道衰へしより皆此の如し、我れ山の先哲皆他方より入來る、法を我山に求め開山より初め徹翁言外、華叟、美叟、春浦、實傳、古岳、大林、笑嶺、春屋、古溪、他流の諸老宿にをひても亦皆此のことし、只先規に復して修行艱難を経る底の人を擇んでこれに印す、則ち道復

すへきなり

一秋の夜の睡覺につく／＼と思ひ出づることのみ多かる中に、鬼の字ををにと訓したることを思ひあかりて、面白く覺へぬ、鬼は歸なりと字訓を下したれば、かへるがをにあり、萬の訓點皆をにかへる、鬼を歸なりと云ふは、本へ歸ると云ふ心に用ゆ、又こちへ生れて歸ると云ふ義なり、鬼は屈なりと字注を下したれば、死して行は魂不行して屈してこちへ飯る義なり、屈せしめて行けは仲びて神なり、神は仲なりと字訓あり、屈して仲びざるゆへも鬼なり。

一老後に万事を妄測するもの常なり、然りと雖も壯年の昔の久しきことは忘れず、蓋其遠きを記して近きを忘るゝはいかん、曰く、根性正しきときには心に受くるもの忘れず、老後精薄く神散して心主正しからず、故に前を忘れ後を失ふ、恰も硬木に文字を彫りて其文字久しく泯れさるか如く、又柏木に文字を彫るときは則ち今彫り今泯るゝか如し、古尊宿の云ふ、老人前後を忘却す、魂既に後生の所に趣くゆへなりと云々、最も理屈なり、こゝに無きときは則ち彼處にあるへし。

一老人夜眠らずして晝却つてねむる、これ何の道理そや、曰く、老人は氣行らず故に氣行の度晝を以て夜とし、夜を以て晝とす、此の故に夜睡らずして晝ねむるなり、老人は胡麻を以て良藥とす、恰も車に膏をすか如し、麻油を喫してよく氣道を滑にして以て氣を巡らさしむ、老人は何としてか氣

行進まざる乎、曰く、老人の皮膚を摩て又壯人の皮膚をなて、知るべきなり、内の筋肉も亦外の皮膚と相應す、腹中に槎牙（さば）腹中にさわりあるを生するか如し、氣行す、まざるも亦宜なり、車の石に碍りて碌々たるか如きなり。

一老人身を忘れて鞍馬の花を見るへく東山へゆくへしと云ふ、徒弟はこれを留むと雖も點頭せず、頻にこれを促す、其徒弟如何ともすること無く、強ひてこれに應ず、異滅の相きたり、前を忘れ後を失す、此時の形よしなし、人に見られて自らこれを顧す轉た小兒のことし、其故いかん、曰く、老倒常諦みな忘れて壯年のときの思ひあり、壯年のとき鞍馬の花を見、東山西嶺の春色を見て、顔を怡はしめ、其思ひ不圖方寸の間より出て、身を忘れ覺えずしてこれを催す、實に老をわするること然り、徒弟之を留るときは則ち老人の云ふ、花を見て機を愛す愧るところなし、我を留むるは不思議なり、世人皆花を見て機をわいすそれ我を奈何するそ、吁皆人常に壯年ならず終に老と成る、壯年を以て深く之を思ふへし、又皆之を思ふと雖も其思ひと共にこの老の致す所を失す、これを奈何せん汗顔々々、凡老人は今の事をわする、と雖もよく古のことを記す、然るときは則ち壯年の時より最後の愧を思ふときは、則ち老に至り此愧遮るべき乎、至人は老に及んで猶みたれざるか如きなり。

一歳六十に及ぶもの、熱病によつて謔言妄語して諷歌を唱ふ、此歌このもの十四五歳のとき世俗の歌ふ所のうたなり、今を忘れよく古を記すること必せり、今の我を忘るゆへに謔語す、よく古を記するゆへに古風を唱ふるものなり、今の世俗唱ふる所の諷歌之を唱へすして古の諷歌を唱ふ、これ又病ひよ依りて以て心みたる、にあらす、只老の今をわする、所は古を記するの故なり。

一老後爪髪長しやすし、こ、を以て知る、陽氣よく物を生す、陽にあらすして物を生することあたはず、人年老ひれば陰缺け陽専らなり、故に爪髪長しやすし。

一天地の間に生するもの、有情非情その數限りなし、限りなきの數を以て一々かきりなきの理を盡さんと欲するときは、則ち道理をきわめ知りかたし、只一を以てよくきわめ知るときは、則ちその理當然として百千のもの皆明むべきなり、然るを群書に廣く涉り、多く古人の詞を知るを以て博學多聞の名をもとむる故に上を凌ぐ心日々増長して脚下の理を見ず、一を忘れ以て百千を凌ぐ、寔に疾く走るもの遠きをしのぎ脚下を見ずして蹶蹶かか如くなり。

一万人多しと雖も一身を以てきわめ知るときは、則ち世界の人みな我と同じきなり。

一身心を知らずして佛心を知らんと欲し、神慮を知らんと欲し、上を知らんと欲し、下を知らんと欲す、皆知ることを得かたきなり、孔子の玉はく、いまた生を知らず焉と死を知らんと云へる、みな

人我を知らずして鬼神を知らんと欲す、孔子若し在さは、當に身を知らずして焉そ鬼神を知らんやどの玉ふへし。

一 衆木多しと雖も、一木を取りきはめ知るときは、則ちその理萬木みな同じきなり。

一 粟或は柿、此木いつくより生ず、天地開闢のとき初めて天地中和の氣感して、種なくして天理により生ずるかその先も亦粟の實ありて生ずるか、此道理あきらかなるときは、則ち萬木千草造化生々の理みな知るべきなり。

一 それ人七兆零七萬零のさき、父母なくし 天地中和の氣感して、人天理に依りて以て生ずる歟、其先も亦父母ありて子を生み、其子次第にうみて以て今の我に至る歟、よく此道理を明むるときは、則ち一切の衆生初めなきの論漸くみな知るへけんや、草木は偏に氣なり故に非情なり、人は心を中有に稟くるゆへに有情なり、もし中有に因らざるは其人々として人たらず、只豆腐麩類たるへき乎、鳥は卵を破り、即ち水鳥はよく遊き、雞は自ら雞の風情あり、水鳥のよく遊ぶ、家雞の風情偏に心に屬して形に屬せず、形は内に成り心は外より入る、人の形の如きは父母内に造り、子の心は外より入る、一切の有情として違ふことなし、これに依りて畜類と雖も好心惡心の異なるあり、形は父母に似て心は父母に似ず以てこれを知るへし、七兆零七萬零遠といへども昨今の如し、百年千坪もま

た然り、萬年億年もまた然り、經歷するときは則ち其數豈これを盡さらん乎、天地の一周は大周小周皆同じ、天は子に始り亥に終る、一晝夜と七兆七萬と豈別ならんや。

一人は馬を生せし、馬は人を生せず、互にして相生せず、凡定まれる理あり、これ一類相續の徳繩なり、人馬を生み、又馬人を生むとき、非常にして物の變なり、これを見れば常あるにあらず、これ一念の變相なり、人臥して槐安國に入りて蝶と婚姻をなす。

一人は無念の時を知り、念起るの後を知らず、古人の曰く一念の起るこれ病、繼がさればこれ藥と云々、道理を志明むるときは則ち繼くもまた病なし、つがされば瘡病なきなり。

一 世人は皆毒を食して病を起す、醫人は同じく毒を食して病を起す、よく本を知るゆへなり。

一 世人毒を斷つときは則ち病を起す、醫人毒を食して病を起す、醫士の毒を食するは理にあたる世人の毒を食するは理を知らざるか故なり、砒霜人を殺すと雖も理に當りて用ゑるときは則ち病人を治す、瘡を切るを言ふなり、中を得るときは則ち醒醐、亦毒と成る、中を得れば毒も毒ならず。一 仁義禮智信は、人の常にして缺くへからざるものなり、君臣父子夫婦は人の三の綱なり、離るへからざるものなり。

一心は三世心、また佛心、菩薩心、聲聞心、緣覺心、六凡心その躰一法界なり、譬は氷雪霜の如し、解

くるときは則ちこれ水の影なり、氷雪のとき氷雪の相と見る、解るときは水の相と見る、これ二種の眼なり、氷雪のとき即ち水を離れず、人々皆思へり、人死して虚空となる、雪や氷と隔つらん、ちやなど易々と心得るはおかしきことなり。

一物の音はたゞ一つなり、糸によれば糸の音を異ふし、竹によれば竹の音を異にす、一つの音を止むれば之を糸の音とも云ひがたく、之を竹の音とも云ひがたし、その一つの音は如何なる音ぞ、いかんか聞得ん、ものを離れたる音はこれよと聞くへき、此一つの音を聞得る人を音を知ると云ふへー糸の音を誰か聞かざらん、竹の音を誰かきざらん、三歳の孩兒も聞くことを得たり、物の外の音を聞かん人又萬の音を知るへー。

一何ことも古人の仕初めたることを、今は移してするさへかたし、未だならぬに仕出たるは淺からざることなり、その仕出たる心に叶ふことば、萬づに工夫ふかき人ならでは古の人の心に通すまじきをや、何ことをするとも其事を仕出たる人の心に通せば、一つ業萬つの業に渡るへー、されは世の話にも一道の達者萬事にわたると申なり。

一次第々に人の詞も調へもてゆけば好悪を知り、斯く言ふたるは悪し、兎云ふたるはまされりと調へるほどに、次第に言葉に花咲きにけり、庭の梢の花のつほみ開くも同じ、此花にたかふこと有る

へからず、人生れ出て三つ四つに成りて云ふことを聞くも、神代の歌のことし、次第に成人するはど能くかひつゝろひて聞ゆるは、末の世の歌のことし、何につきても始中終同じことなるへー。

一人の心の比興さそ顯れける、萬の道具を見るに價軽くして其器はあさくとして異國唐物のやうに相似てめつらしく、置いてはまた取上げくしてやさしき物あり、これを能く持ちなして家に入れ其用ふるるときあらくさはらず、收むるときよく拭いたしむならば、百年も持つへし、然るを石瓦の如く用ふるまゝに頓て破損して其跡かたもあし、又此器價重くは八重十重につゝみて、容易に人も見せじとせん、然れば物の悪きにもよらず、我目に入る入らざるにもよらず、あたひの輕重によりて秘藏すと覺へたり、縦令價は輕くともその物のあいらしく宜しきは、價に構はず愛すへきを人の心の比興さそ口惜きことなり。

一目近きこと知らずとて人を耻かしむへきにあらず、希しきこと一句知りたりとて人を高く見るへきにもあらず、朝夕左右にある書の内の一語半句も心を留めずして、何にかあるそとたどることば智者の上にもあるへし、小僧喝食にこれはろれくゝの書にありと云はれて、一笑を發すること儘多し、又寡聞淺知の人も珍しき書を取てこれを見て、其内の一句半句を心に留むることばあるへし、之を知りたりとて博學多聞の人とは云ひかたし、記誦の學とて物をよくよみ覺へてこれはなにの語、こ

れはなにの語とららに之を云ふ人あれども、其理には通したかし、然れば人に物の道理を問はれて忙然として左右を見る、其理は其人の記誦の中にありと雖も其記誦の語すへて空しきか如し、廬山に在るもそは廬山の面白きを知らず、西湖に在りて西湖の美景を知らず、皆これ外より見て其面目を知り其美景を愛す、譬へは湖の上に扁舟を浮へて、朝日を迎へ夕陽を送り、其舟其人自らこれ佳景なることを知らず、遠く之を見て湖水の一景とす、記誦の外に妙理を知る尤も大切なり、故に古人の曰く、記誦の學は人の師とするにたらざるなり。

一法華にも譬喩品があるぞ、人を教化するには譬喩か専らのもなり、よく譬へを取るは理路通達の人なり、如何なる愚痴のものも譬へを以て人を教ふれば、草木の花にてもあれ、鳥獸の姿にてもあれ、詞にてはそれと心得かたきものなり、之を繪に寫して見すれば其儘合點するか如し、これにつきても耳目の及ぶ所は知りやすきものなり、耳目の及ばざる所に變化神通あることは知りかたし、之を知るは理路活達の人なり、人生すれば形を見てありと思ひ、人死すれば死してなきと思ふ、此生死は耳目の及ぶ處有無の二つなり、三歳の孩兒も見て之を知る、生前死後に際りなくなること知らず、之を知らずして只耳目の及ぶ所ばかりを知りて、我は道理を知りたりと思ふは三歳の孩兒に同じ。

一士農工商の四民のうち農夫尤も心清し、其人柄を以て云へは士尤も清くして、工これに次ぎ、商之につくへし、如何にして農夫の心尤も清きとは云ふべきぞなれば、只ありの質にて身を飾ることなく上古質朴に均しければ世に諂ふことなく、井を堀りて飲むも田を耕して食ふも、然もその飯精からず、多くは官に貢さして其能を食へども、足ることを知るものは農夫なり、士は士の本意を失ひ、工商は工商の本意を失ふ、其身をたかふり衣食住を結構にするか故か、其分に財足らず財足らざるゆへに世に諂ひ偽り構へて心底の穢れたること士民に劣れり、士や工や商や、士民の意に愧さらん乎、予唯之を思ふ、外清きものは内汚る、上古は内清くして外を見ず、錦に不淨を包むは今の世の人なりと云へは、世人の云ふ、いかに心清しとても士民の質にては人たるへからずと云ふ、予曰く、伏羲神農は木の葉を綴り木の皮を冠りぬれど、一天四海の王たり、豈之を人にあらずと謂はん乎、又久しく家を保ちて累世に及ぶものも農夫なり、今の世を見るに士の家も久しく保たず、工商富りと雖も三代傳へ難く、農夫は質素を事とし華飾ならざる故に、賦歛厚ふして歳飢ると雖も官の精粕を食、其歳を過すときは則ち又來歲の糧は鋤耨にあり、世々に傳へて此の故に家を累ぬるものは農夫なり。

一人みを寓言と云ふことを儘に心得ず、道理のものに寓し或は人に寓して云ふなり、道理なきときは

則ち寓言これ何の得る所ぞ、道理を述べんかために物に寓して之を言ふなり、寓する所の理を取るときは則ち寓言皆實なり、孔子今又生れての玉ふども、道理なきときは則ち取るどころなし。

一 出家を苾芻と云ふは苾芻草と云ふ草があるぞ、苾芻はやわらかなる草にて彼方へも此方へもかやるやうに靡く草なり、出家は物にかまはぬか本なる故に苾芻にたとへたぞ、教者には苾芻とよむぞ、禪家には苾芻とよむぞ。

一 百味圓と云ひ又混沌圓と云ふは、銖兩は藥味の厚薄により、藥性の強弱によりて少し多寡の分別あるへし、論に曰く、衆方を以て之を治るに衆病之理るは當然なり、一方を以て衆病を治るは何の謂ひそ乎、曰く、これ天に本くなり、百味を和して一藥となし、以て一藥の功を取る、これ天に本くの謂ひあり、それ天は一氣にしてよく品物を生成す、蓋一氣とは地の萬物の蒸する所、衆合して一氣の衆蒸とは地の萬物なり、地の萬物は凡一切の形あるものは皆地なり、勝けて道ふへからず、某の物草木も亦氣を發し、魚龍も亦氣を吐き、禽獸甲介も亦氣を吐く、山川水澤一切の氣蒸する所合して一氣なり、この一氣また生物を生長するものなり、形は地なり、陰なり、氣は天なり、陽なり、陰は陽より出て、陽は陰よりいてす、二つにして一つあり、氣は形より出て形は氣に因りて化す、然るときは則ち此氣は一氣にして衆蒸す、衆蒸して一氣なり、今百味圓の方を製

し天に本くと謂ふものはこれあり、百味のうち草木あり、丹石あり、羽毛甲介あり、寒あり、熱あり、緩あり、急あり、昇あり、降あり、一方の内萬物あり、萬物の氣蒸して一藥の功なり、一方にして百物、百物にして一方、一方にして百方、百方にして一方なり、一氣品物を生し、一方百病を治す、豈理の當然ならず乎、藥氣蒸るときは則ち應に之を發すへし、血滯るときは則ち應に之を散すへし、痰塞るときは則ち應に之を通すへし、下に在るものは應に之を昇すへし、上にあるものは應に之を降すへし、氣其處にあつまる故に必ずうち結す、此藥氣を以てよろしく引きて順ふへし、夫惟れば病は偏より來り、正に従ふて去る、七情は内傷のやまひ、憂思悲恐等皆結するなり、氣一處にあつまりて偏によりて疾生す、正に従ふときは則ち癒ゆ、喜怒驚等は散なり、散するときは則ち氣少し、少きときは則ち巡らさず、巡らさるときは則ち又氣の偏なり、氣多少の分限によらず、巡りて以て復生す、四氣外感の疾も亦此のことし、風寒暑濕熱皆これ天なり、蓋天これ行ること偏ならず、もし偏に行り夏冷かなるときは則ち万物焦枯せず、冬暖かなるときは則ち万物凍損せず、春温夏熱秋涼冬寒並に寒熱温涼以て行き、一歳品物達するなり、天は偏なりと雖も又自ら偏せうくるなり、人常に家舎に在るものは、寒暑ともにこれに中ること淺しと雖も、其感することこれ深し、常に家舎に離れて行動するものは、そのこれにあたること深しと雖も、これに感すること淺し、其人

の相應に過るときは皆偏なり、能く温かに能熱くよく涼しく寒きときは則疾なし、偏温偏寒偏涼偏熱にして病を生ず、この病能くこのくすり能く熱し、よく寒し、よく涼しく、よく温かに、よく昇り、よく降り、よく散し、よく聚り、よく緩く、よく急き、よく否に、よく泰、兼て一方にあり、或人の曰く、此方寒温涼熱をかぬるものなり、もし寒病に與へて以て熱せしめんと欲するときは、則ち寒藥あり之を遮るへし、若し熱病にあつて、以て涼ならしめんと欲するときは、即ち熱藥ありこれを遮るへし、補せんと欲するときは、則ち瀉劑あり、以てこれを遮るへし、瀉せんと欲するときは、則ち補劑あり、以てこれを遮るへし、これを爲ること如何、答て曰く此の問ひのときは只單方を用るか如し、或ひは五味七味の方のときは、また病ひに宜しく、衆病によろしからず、夫混沌九のときは、一方に衆病を兼、猶一氣萬物を化生するかごとく、義を天道に譲るのみ。

一東萊の呂氏曰く、所謂無事と云ふは、事をすつるに非るなり、但これを視ること、夙に起き晏く寝臥て食し、渴して飲す、終日これを爲ごと、いまた嘗て爲さるかこときなり。真西山心經に出つ

一當念無念前後際斷と云ふこと、工夫すへし。

一親の讐をは伐すして叶はざるものなり、親の讐と同じく天を戴かすと云へり、天理已に此のことしと大學衍義に記せり、木剋土と木土にかては又土の子の金、我親の讐討たんとて金剋木と金木にか

つ、然れば又木の子の火親の讐討たんとて、火剋金、火金にかつ、然れば又金の子の水、親の讐討たんとて水剋火と水火にかつ、然れば又火の子の土、親の讐討たんとて土剋水と土水にかつ、五行此理備はれり、人倫これを思はさらん乎。

一唐玄宗の時法を置けり、人として人を殺すときは、則ち其子又其人をころす、其人の子又これを殺す、其子又其人を殺すときは則ち百世も人を殺して事絶えず、只親の讐討つものには官より之をころすへし、親の讐討つへからすと云々、後又此法を評して云ふ、親の讐殺すへからさるときは則ち人の人を殺すこと日々夜々長をへし、人人を殺すときは則ち子ありて必ずその人を殺す、然らば人の人を殺すこと止むへし、人を殺すときは則ち必ず我身を失ふ、人として身を惜ますと云ふことなし、身を惜むときは則ち人を殺すこと止むへし、玄宗の法立たす親の讐今にをひてこれを伐つ。禮曲禮に曰く、父の讐共に與に天を戴かす

一それ宅に戸あり、障子あり、四壁あり、之を去るときは則ち管に柱礎損じて遮障あし、遮障なきときは則ち天地と一枚なり、身宅の戸障十四壁を去るときは則ち我性と天地と通す、これを神明と謂ふなり、人として直に神明に至るもの之を聖人と謂ふ、悦はしからずや、心は神明の舍なり、外宅の戸障子擁塞するとき則ち神明一時に暗くして神明ならず、一切の理皆塞かりて通せず、万事所爲

皆道にあらす、これを凡夫と謂ふなり、曰く、何をか戸障子と謂ふ、曰く、身宅に六門あり、戸障子を備ふ、六門とは眼耳鼻舌心意なり、六門とは即ち六根なり、何を以て之を戸障子と謂ふ、曰く門あるに依りて戸障子の名をたつ、實は門即ち障子々々即ち門なり、眼に見て憎愛親疎耳に聞きて好惡取捨あり六處皆此の如し、神處憎愛親疎なく好惡取捨なし、憎愛好惡なき處に在りて親疎取捨を生ずるときは、則ち神明に蔽はれて一時にくらし、神明と天と隔障するときは則ち憎愛好惡を以て戸障子とす、この戸障子六門に在り、此戸障子を去るときは則ち神明獨り顯はる、天地一枚にしてこの身を破らすして天地に參はり、此身ぞんじて此身に非ず、四大分離せしめて四大にあらす、即ち之を天真獨明と謂ふ。

一或人水の源を問ふ、答へて曰く、山なり、又問ふ、山水も亦源あるへし、山水の源はまた何を乎、答へて曰く、海なり、海水五行の火に蒸されて上りて雨露霜雪と成り、山に屬し谷に下り河に屬して下入し、再び本に歸するものなり、問ふ、水は卑につくを天に升るとはいかん、答へて曰く、氣は常に升降す、氣につきて昇り氣につきて降る、況んや又火蒸して升るを乎、人の身に逆上なり、痰氣激して上るの謂ひなり。

一譽れを求むるはいやなり、求めずして譽れあるこそあらまほしきことあり、然れども求めずして譽れあることを得ざるよりは、求めても譽れあるは好し、万事其始に求めずして至ることは鮮し、求めずして後求めずして至るを人求めずして至ると云へり、何れの道も初めは求むるなり、功積りて後求めずし、至るものなり、人の人を譽るものは道あるを以て之を譽む、然れば譽れを求むることは道あることを求むるの謂ひなり、道あることを求むるは嫌ふへからず、但名の爲にして實なきは不可なり、學位無學位と云ふことあり、絶學して無學に至る、無學は向上なり、之を學ぶの功積りて無學にいたる、功を積んで無功にいたる、功を求むることを積りて求むること無きに至るものなり。

一酒に紅柿を多く食すれば甚だ酔て正儀を失ふと、傍なる人曰く、柿は酔を醒すこそ云へ、柿にて酔ふとは心得ずと云へり、曰く、諸薬ともに之を用ゆるに時あり、時を得ざるときは則ち藥却つて毒と成る、其時を得るときは則ち毒も亦却つて藥となる、寒は熱に勝つと雖も時を得るときは則ち却つて熱を助けて人をし、熱殺せしむ、蓋酒を飲むこと數盃にして酒胃に在りて未だ順ならざるとき、柿を食すること數顆なるときは、則ち其酒を覆留して酒氣順ならず、胃中に留りて悶絶す酒後紅柿を食へば心痛するも亦これに譬ふるなり、酒漸く半醒に至りて咽口乾きて湯を思ふとき、熱柿を喫るときは則ち觸的に醒め肺渴を治す、人間の万般共に時を得るときは則ち作すこと莫れ

時を得ずんは言ふこと莫れ、時を得ずんは敵を責むること勿れ、城を落すこと勿れ、人を諫むること勿れ、人を成すこと勿れ、人を敗ること勿れ。

一 邵堯夫曰く、物皆數ありと云々、數を知る者は數を惜む、數を惜むものは久しく保つ、數を惜ざる者は早く喪ふ、早く喪ふるものは逆にして苦あり、久しく保つものは順にして苦無し、生も亦數なり、數にあらざるときは則ち生せず、死も亦數なり、數にあらざるときは則ち死せず、太古の人は能く數を惜む、故に百歳を越ゆ、況んや又重百彭祖の徒を乎、行ひ匆忙なるときは則ち數期に先たつて盡き、行ひ安靜なるときは則ち數期を以てつくる、期を以て數を盡す、人は死するに苦無く期に先たち數を盡すものは死するに苦を重ぬ、譬へは瓜蒂のごとし、よく熟して後之を取るときは則ち蒂自ら落つ、未だ熟せずして早く之を取るときは則ち捏るとも亦墜ちず、終に味を損するものこれ數を盡さればなり。

一人の一日を送るは人の命數を減する寸々なり、一日を送るときは則ち一寸を減す、二日を送るときは則ち二寸を減す、屠る所に赴く羊の歩々死地に近くが如く、今の命緒の寸を盡すこと太た速なり寸を以て算ふるときは則ち十度にして尺を盡す、尺を以て算ふるときは則ち十度にして丈をつくす此の如くなるるときは則ち命緒急につき死地に至ること甚だ速なり、蓋寸を以て算ふるものは少欲少

食少酒なり、尺を以て算ふるものは過欲過食過酒なり、是や皆物に數あり、數を惜むべきなり、人の徳も亦數なり、徳にはかに輝く人は必ず其末短し、徳を惜みて廣大ならざる人は必、其徳永く傳ふ、廣大ならんと欲するときは則ち後昆必ず微少なり、先師常に云へり、徳を兒孫に遺すは、衣を温にせず、食を厚ふせざるなり、今日の我儕なを小徳あるものこれ先師の餘なり、文王三年の命を以て武王に譲る亦これ乎。

一人は氣を以て武勇もしたるものなり、意旨の強きと云ふも氣なり、氣の衰へたる時挽ざるは道ある人なり、多分の人は氣盛なるゆへ物を破り、浮世をも何も思はざるなり、死近くなる時は平生と皆變はるなり、曉き方つ懶くなる心あるの心を付ける處なり、曉きは物靜にし、心細くなるものなり。一今の人を見るに伶俐にして却つて伶俐にあらす、氣志に勝つて驟くものなり、驟くもの趨るものは氣これなり、氣行く所に向つて急にして左右を見ず、故に一策書を見ると雖も眼一所に在りて一策の書に涉らす、一策の書中の一條目をあけて早く趨り人に向ひてこれを説話す、其說正儀にあらす靜に彼の一策の書を見るときは則ち策中の正儀明白なり、一條目に着きて早く義を立て廣く策中を見しめて唯一條目に就きて義を取んと欲す、故に已か見を出すと云々、これ正儀に背く、今の人一件を見るときは則ち一件に急にし、二件を見るときは則ち二件を急にするなり、志を持つ所なり、志

を持つときは則ち氣走す、心靜にして前後左右心の涉らざる所なし、今の入何として然る乎、思ふにこれも亦時なり、古は大智の人多し、故に小智のものは小事を知り、人に向ひて之を言ふこと能はず、之を言ふことあたわるときは則ち笑具と成る、今大智の人出でず、故に一事を知るときは則ち早く一事を説く、之を聞きて無智の人之を信じて知識とす、其人後生と雖も智見を高くし先輩に恐るゝことなし、日の光り今季世と雖も猶葦林を歴て多く人に交りて切瑳を受けるものは然らざるなり。

一 惠能師と神秀と同時の祖にして、神秀は山の第一座なり、然りと雖も見解能師に勝らず、假令見解まさらすと雖も何ぞ懸隔ならん、然りと雖も亦此の如し、其談衣鉢に在り、神秀身は菩提樹の如くの句あり、則ち能師菩提もど樹にふらざるの句あり、神秀の曰く、臥輪伎倆あり、能師又曰く、惠能伎倆なし、今世の初學、之を聞きし之を誦すれば箇々點頭す、今世の初學早く知る、而も古の神秀此間に於て什麼となして意を得ず、又今世の初學二師の見解を判斷して口吧吧な、古の神秀什麼としてか今初學に料理せられん、神秀今の初學に及ばざるときは五祖なんの第一座となし去る、今の初學神秀を以て泥の如く看、魂の如く視て直ひ一錢ならずとす、今の初學と神秀と高低又如何、神秀能祖 勝らずと雖も五祖の法を嗣き一方の宗主とす、初學の人神秀すら尙之、欺く、況んや今世

知識と稱する人に於てをや、禮も亦なさず、紫野養真和尚、殿裏にて佛に向ひて曰く、鏡々たる萬徳尊、秋水派々の月、彼れ此出家兒、禮も亦缺くへからすと云々、若し此意を以て世上にあてし禮豈亂れんや、今の初學の人兩祖の間を見る、其眼二偈に在るのみ、五祖衆心によりて神秀長く一方の宗主の爲さるるなり。

一 今の初學の人鎌をのみ傳を見て、即ち一見に其祖を見盡す、甚だ奇怪なり、下を見るだに猶難し、況んや上を見る一乎、糜乳子墻は數仞と道ふことを見ず、古の祖墻は吾儕窺ひかたし、皆人一追祖傳をよむときは、則ち早く其祖師を知りて説話すること水晶を隔てし物を見るか如し、其説話一々若し的當せば今の説者古の祖と同器同水あり、實に此の如きときは則ち遠く古を慕はんよりは、直に今の人を信せんふに如かざるなり。

一 前業により心快潤にして財を惜むの心なき人あり、外に播すことなきときは則ち内に費少からず、内乏しき時は求めすと云ふことなし、求むることを得るときは則ち貪らすと云ふことなし、之を貪りて用脚猶未だ足らず、猶未だ足らざるときは則ち必ず耻を顯はす、これを念ふへしこれを念ふへし、これを念はざるときは則ち管己か一生不自由を得るのみにあらず、未來の世にをひて必ず己か如きものを引出して己か今生の不自由を得るか如くす、彼の別人をして不自由ならしむ、これ己か

罪にあらず乎、佛之を思ひ給ふ故に今日の人を教化して未來の人をして安んせしむ、故に曰く、佛法はこれ三世の治とはこれなり。

一財我家に入るときは則ち之を盡す、以て外に播し明日の不自由を營せず、此の如き人はよく自亡を用ひ得て、有るべきは則ちあるに任せ、無きときは則ち其無きを苦まず、食常に藜藿のあつものあつて厚味を思はず、衣は一布百結も亦苦とせず、播いて外を思ひ貯へて内に取らず、此の如き人は上の章の心に異なり、此の如き人は万人の中に於て一人あるへからず、若し万人に一人あるときは則ち十万人にをひて十人あり、百万人にをひて百人なり、今六十餘州にをひて豈件の人百人を得ん乎。

一今の世に生れたるものを何事につきても、教へて善道にやらんとするに少しも善に移らず、百日教化しても只本の物にてあるを思へば、佛法は早や世になきよと思はれて猿轡し、教化と云ふこと立たずんば佛は何事にか世に出て説法利生あるべきをや、佛在世には教も立て悪人も善に移らん、今の世それに引かへたるは末法の驗なり、法既に無からんば世は皆外法なり、外法は自然と立つ、万事自然にして鸞は晒さるるに白く、鴉は染めざるに黒く、皆自然の様と云へり、人の教化して悪人變して善とならざれば彼の鸞鴉の如し、然るによりて思ふ、法滅して外法となれば、皆自然に歸す

るかど疑ふ、然るに又教化と云ふ、佛の教に限らず、孔子の道教化専らなり、悪人を教へて善人となさしめは自然とは云はれず、己か修因に依りて善人も善人となるなれば、人の仕業によりて皆移りやすければ、自然の道とも云はれず、教と云ふこと立たざれば聖人の法消えて跡なし、聖人の法なければ自然なり、如何となれば悪人は悪人のまゝ、偶ある善人も教なき世ならば唯自然の善人なり、然れば佛法あるときは自然の道消失す、世の孔聖の道も教化立つときは則ち自然とは云はれず聖道すたれたるとき世は皆自然の姿なり、然るを心得ざる人、佛法は因縁なりと云ひ二教は自然なりと云ふ、否我は三教ともに聖教絶えたるとき自然に歸す、三教ともに教立つときは則ち自然にあらず、孔子は生知安行天の縦せる探聖なりと云へども、これは外より嘆美して云へる言なり、孔子自ら云へるは十有五にして學に志し、三十にして立つ、四十にして惑はず、五十にして天命を知る六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に従へども矩を越へずとなり、然れば孔子も修因にして成れる聖人なり、自然の聖人にはあらず、如何にして物ことを自然とは云へるをや、鸞の白きも鸞と云ふものゝ、其始めの始を求めしらは、彼か心に白からん故ありて白きにや有らん、鴉の黒きも其始めの始めを求めしらは、彼か心に黒からん故ありて黒きにや有らん、無始の無明と云ふことを知らず、人はかゝる委しきことは知るまじきなり、鸞鴉も無始無明より成り來れるなり。

一法はろれ鬪くへからず、鬪くへきは法にあらす、法はそれ断すへからず、断すへきは法に非ず、達磨大師の曰く、我法三千年の後未だ曾て一絲毫も移易せずと、これ此意なり、法は其人を得るときは則ち顯はれ、人を得るときは則ち隠る、かくるゝときは日の如く、顯るゝも亦日のことし、大師の二祖を得るときは則ち鬪に似たり、若し二祖を得るときは則ち断するに似て鬪と言ふへからず、又断すと言ふへからず、只言ふこと未だ曾て一絲毫も移易せざるなり。

一法は無始より無終なり、断續無し、只佛出て給ふときは則ち法顯る、迦葉佛の後釋迦出て給ふときは法顯る、五百年を以て正法とす、佛世を去ること久しきなり、正法今如何そ行はれんや、或人問ふて曰く、六時の行道これ佛法の行にあらすや、曰くこれ佛法なり理致にあらす、又問ふ、事理碍なきときは則ち佛法即ち理致にあらす乎、曰く、これ上等なり中下の言に非ず、又問ふ、念佛念法これ佛法の行ひにあらす乎、曰く、これ結縁の一得のみ眞の行と謂はす、又問ふ、論義法問これ佛法にあらす乎、曰く、これ言説のみ、又問ふ、參禪學道これ佛法にあらす乎、曰く、參禪學道は古人の一問一答其語の通せざる所、これを知らんと欲す、又これ眞の禪にあらす、又問ふ、祖師の語録を以て之を讀むこと縦横自在に之を沙汰す、これ達禪の人に非ず乎、曰く、これ辨舌利口の人なり善星比丘、よく三乘十二分教を讀むと雖も地獄に入ることを免かれず、心法を知らざるためなり、こ

れに依りて言ふ、佛世をさること久しきなり、正法如何そ行はれん乎、譬へば法は一口の洪鐘のことし、人を得て扣き聲とせば則ち鳴る、人を得ずしては聲なし、巡りて扣くときは則ち聲なき所なし、法も亦然り、人を得るときは則ち法顯る、人を得るときは則ち法なきに似たり、塵々刹々頭々物々として法に具はらずと云ふことなし、觸背共に皆法なり、鐘を巡り扣くときは則ち所として皆な鳴らざるなきか如きなり。

一正像末のことは人にありて時にはあらざる歟、佛在世と雖も放逸慚の者もあり、飲酒又は非時乞食の者あり、時に佛之を制し之を止めしむるも戒といひ律といふ、況んや又法華會上いたりて五千の退席あり衆中の精進なり、退さぬるも又よしの佛言あり、これ像末の人なり、佛滅後五々百年の間は言ふにをよばず、今時と雖も能信の人は或從經卷或從知識して純一無雜勇猛精進して、辨道工夫し無上の妙道を修證するあり、是正法の人に非ずや、今時は教のみありて行證なしと退心自ら糟粕とると勿れ、至禱々々。

一佛祖通載に曰く、周孔の未だ之を言はざる、物蠢々として弱りなし、詩書これを載せざる事茫々として何そ限らん、信なるかな、書は言を盡さず、言は意をつくさず、何そ六經の局教に拘はりて三乗の通旨にそむくことを得ん哉と云々。

一百尺竿四歩を進むと、此事人の分明に説くを、山谷詩に曰く、百尺の竿頭歩行を放たず、更に脚
 跟に向つて一節を參せよと、百尺竿頭歩を進むと言ふ心は、百尺の竿頭は上に向ふ至極の處なり、百
 尺竿頭に到らんと欲せば第一節を參せよ、もし一句に參せば百尺竿頭も亦自由を得べきなり、百尺
 竿頭は青雲に獨歩するなり、青雲に獨歩せんと欲せば一句を參すべきなり、脚跟下の一節と云ふは
 百尺の竿頭にも第一節のあるもの、第一節を心得たらば節々百尺にいたり、亦異なる節あるこ
 となきなり、又招賢大師の偈に曰く、百尺竿頭不動の人、然も得入すと雖も未だ真となさず、百尺
 竿頭須らく歩を進むへし、十方世界これ全身と云々。

一學をする人は必ず惡慧を生ず、其故如何となれば人を起んと欲して才ある人を壓す、しかも又不才
 のものを笑ふ、我に順ふて一字と雖も之を問ふときは則ち欣ひ、我に違ふて千人に問へば之ををね
 むこと敵の如くす、眼を高くして人を直下に見る、此等は其惡慧の一二なり、無學の人は諍ふ所な
 し、これ學力無き故我本然の心を存するなり、學をする人は曲節多く、學なき人は直心なり、學を
 する人は人を疑ひ、學なき人は人を信す、信はそれ萬行の始終なり、只學をなして惡慧を求めんよ
 りは寧ろ無學にして自己を存せよ、彼の學をする人は自己を失ひ惡慧を生ずるあり。
 一往昔は學ひて道を明め身を直くし心を清くす、今は學ひて惡智を長す、これ時なり、聖人も亦時に

勝つことあたはず、故に孔子も時に遇はざるなり。

一順つて禮するとは、頂肩手腰膝足皆禮あり、佛入滅のとき迦葉、賓闍崛山に在り、正定に入るとき大
 地震動す、これ佛入滅なることを知りて疾く行く、七日の滿つるときに至る、その時悲哀して頂肩
 手腰膝禮をなす、如來の足見へす、その時願心を發し、禮せんことを請ふ、時に佛千輻輪の相を現
 して棺より双趺を出してこれを示す、此事を參する人道理を知らず、只佛の双足を以て這个のもの
 とする而已、千輻輪の相一足皆理あるなり。

一頭面攝足禮とは、禮拜のとき佛の頭面を見たまつり、見下して佛の足を手に承けること、頭面
 より足に至りて攝して禮するを。

一履從韻會に曰く、從は尾なり、從に従と曰ふ、既從は猶強梁のことしと云々、既と云ふは如何に
 も強く健かに人をも何とも思はず、凶横自恣にして人を凌ぐの貌と云々。

一幽歩跡なく、妙動たつねかたし。正宗記下

一我に弟子空侍者と云ふものあり、父母なく兄弟なし、氏族を究め知らず、生縁も言ひかたし、初め
 來ると云ふこともなければ歸り去らんと思ふこともなし、我渠を智罵すれとも懼れる色もなし、疾
 癩の患なければ醫藥の術を厭まず、幸ひに我弟子には一登の相應なりと思へり、渠時々我に問ふ、我

答ふ、又我心に浮ふこと渠かたみに説き、渠と剛對す、管筆のこと城子これを留む。

澤庵和尚玲瓏隨筆 大尾

澤菴和尚茶器詠歌集

澤菴先師爲人心切動入泥
入水片言隻字皆般若光明
也茶器之詠歌刻成走筆書
其端與之

己亥初秋

東海暮翁雄峰英撰

茶

消眠常好啜松風為衆時々
點一中諸佛奠之諸祖奠半
升鐺內十虛空

空行者說話云茶之消眠常也請大衆
衆點一中茶是又叢林之清規也

夫酒者以滿盃為度茶者以點半盃為
常故曰點茶一中或人又曰椀子上橫
茶匙則如勺之字故曰一中吾非其講
者任人之脚脚且道衲子所喫之茶非
尋常茶半升鐺內奠十虛空諸佛諸祖
共尊之此一偈前等之二句者尋常之
茶也轉一轉而為佛祖位中之茶快活
々々以十虛空為一偈落居

飯

鉢裏朝夕盛一空，感齋使者
去忽々十方聖衆同供養，此
外何求香積中。

韋將軍報齊時於十方聖衆故號感
齋使者十方聖衆普同供養正好鉢
裏只盛空○不見香積世界之作

茶器詠歌集

か
か
か



あ
か
し
か
た
月
の

夜
ふ
ね
の
よ
る
く
は

な
は
こ
り
須
磨
に

も
の
お
も
ふ
か
な

きり
ふん



そ
こ
と
じ
り
ふ
く
ら
む

夜
半
に
や
と
と
へ
は

ま
た
ね
ぬ
ま
と
の

ほ
そ
き
と
ゆ
し
ひ

た
ら
し
ら



ま
た
い
か
い
に
も

あ
ら
ぬ
は
か
り
に

い
と
け
な
ま
か
な
ら
ふ

い
ろ
は
の
一
も
し
も

心
常



おもひたちおひは

くるしき道なから

見まくほしさの

ふるさとの山

かきかき



ふかきあさみよなと

山はくちなしに

さかぬかほして

こゝにゆくすれ

みよなし山に口なしをよみて

あはれ



賤しきも身のほとくりに

こひやうき

人のまつはの

浦のしほやき

おのつえん



乙女子よ雪間もどめて

わかなつめ

ともしかくせは

老やしぬらむ

那
の
子



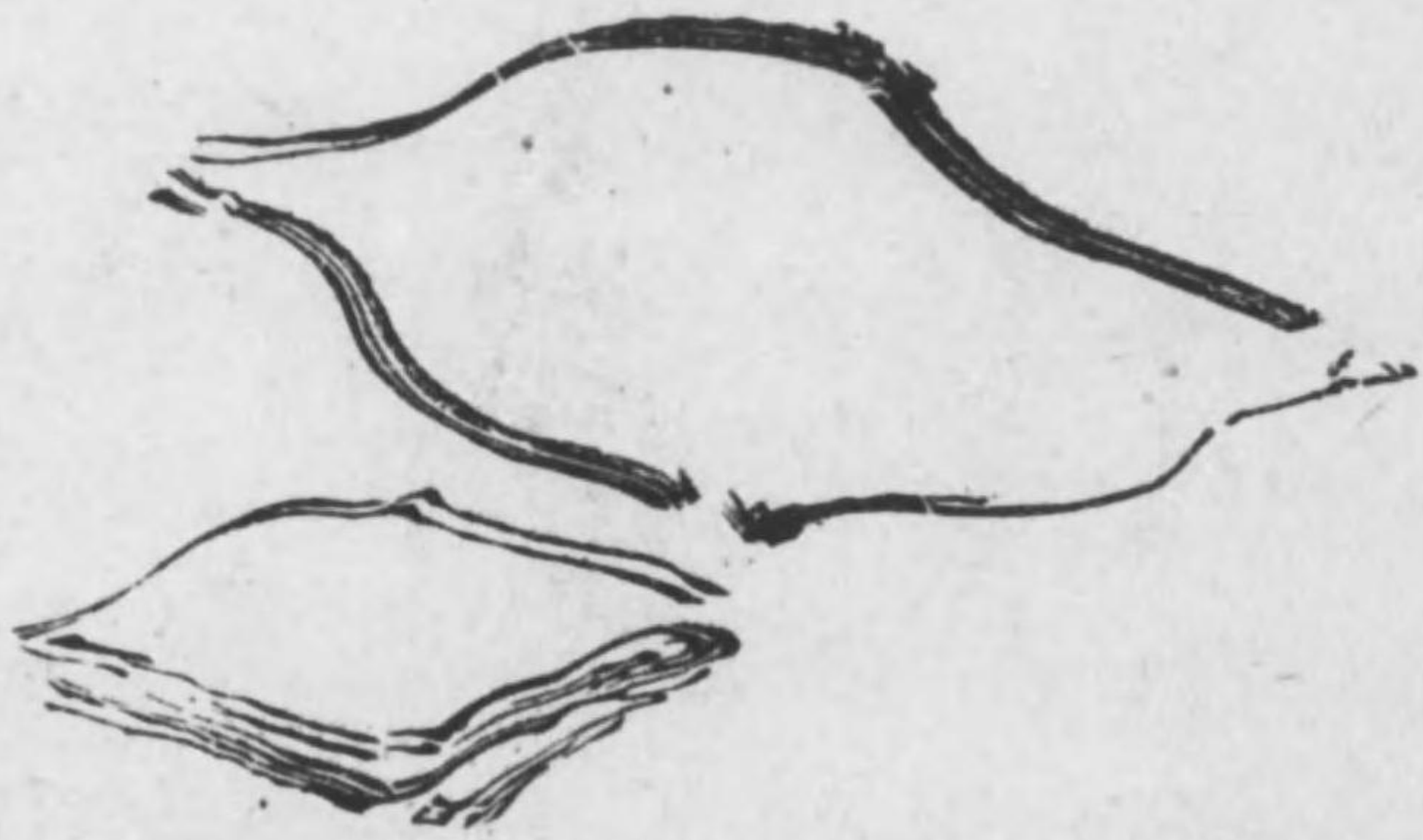
な
か
月
の
よ
る
の
も
の
と
や

か
す
か
な
る

さ
と
も
十
〇
に

こ
ろ
も
う
つ

かゝるころかな



たちやきん霞のころも

おしなへて

山のかたにし

かゝるころかな

ともしけち



ともしけち

ものかむさと野に

こもるといひし

ことのはくさを

ともしけちとは如薪盡火滅命の
きゆるを云ふ

玄
旨



野への火じやくたてぬきの

はたおりは

秋は何をか

身にざりくす

鳥のたか



はしたかをすゑのよ

鳥のたかやせん

とはかり思ひ

よるこよろかな

鷹をはなさんとて鳥によると申事也

難波江にはや夕しほの

さしやくる

瀬津のうらく

ふねもよひする

あし



心



神もさてなさけをかけて

おもひしやくめの岩はし

たえてかなしき

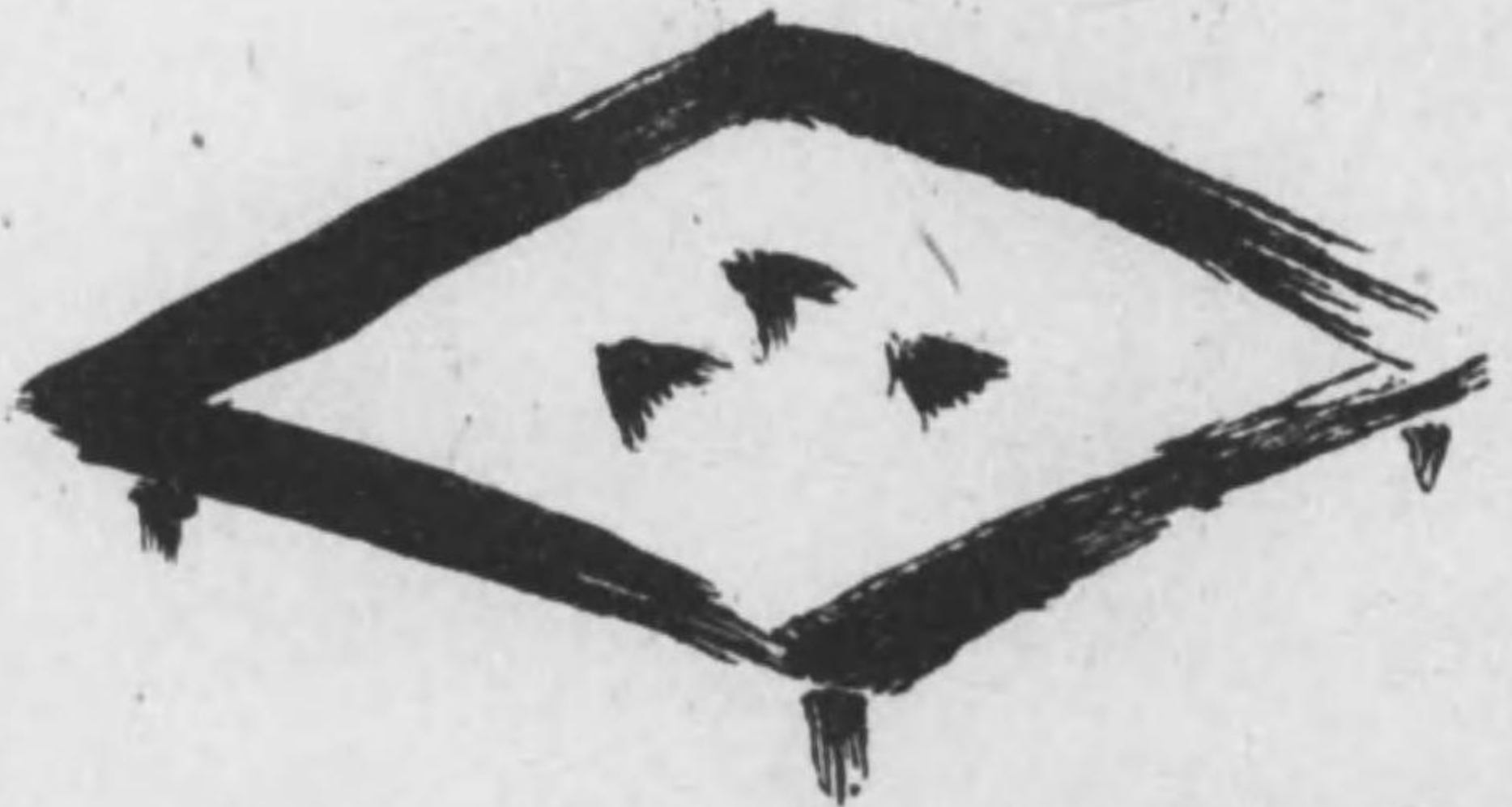
すみの陰きたと南の

そのさかいろり色なる

えふのそらかな

須彌山ツかけ也須彌をよすみとよみ申候えふは闇
浮にて候須彌の南は瑠璃の色なるによりて闇浮國
の空は須彌のかけうつりみどりなるといへり

わ
き
り
の
こ
ろ



大、
あま



思ふことくりかへしく

かたりても

いとたよめやは

うつのをたまき

茶ん



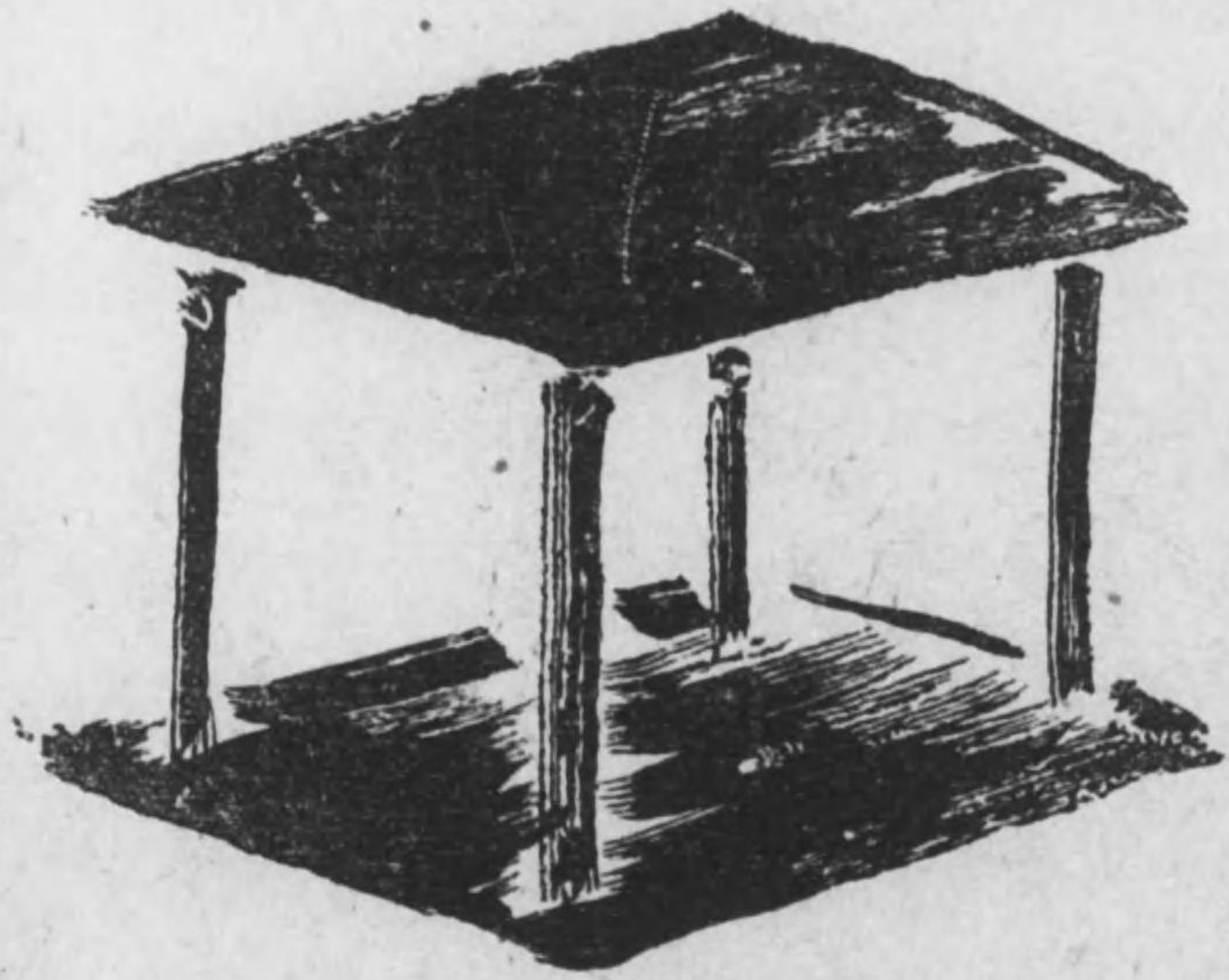
こひすてふろうの上より

なかむれは

山にはなけ木

野はおもひくさ

た
心
交



神
に
な
を
あ
ゆ
み
は
こ
は
ん

又
も
ま
た
い
す
ゝ
の
川
の

す
ま
む
か
さ
り
は

い
す
ゝ
川
伊
勢
な
り

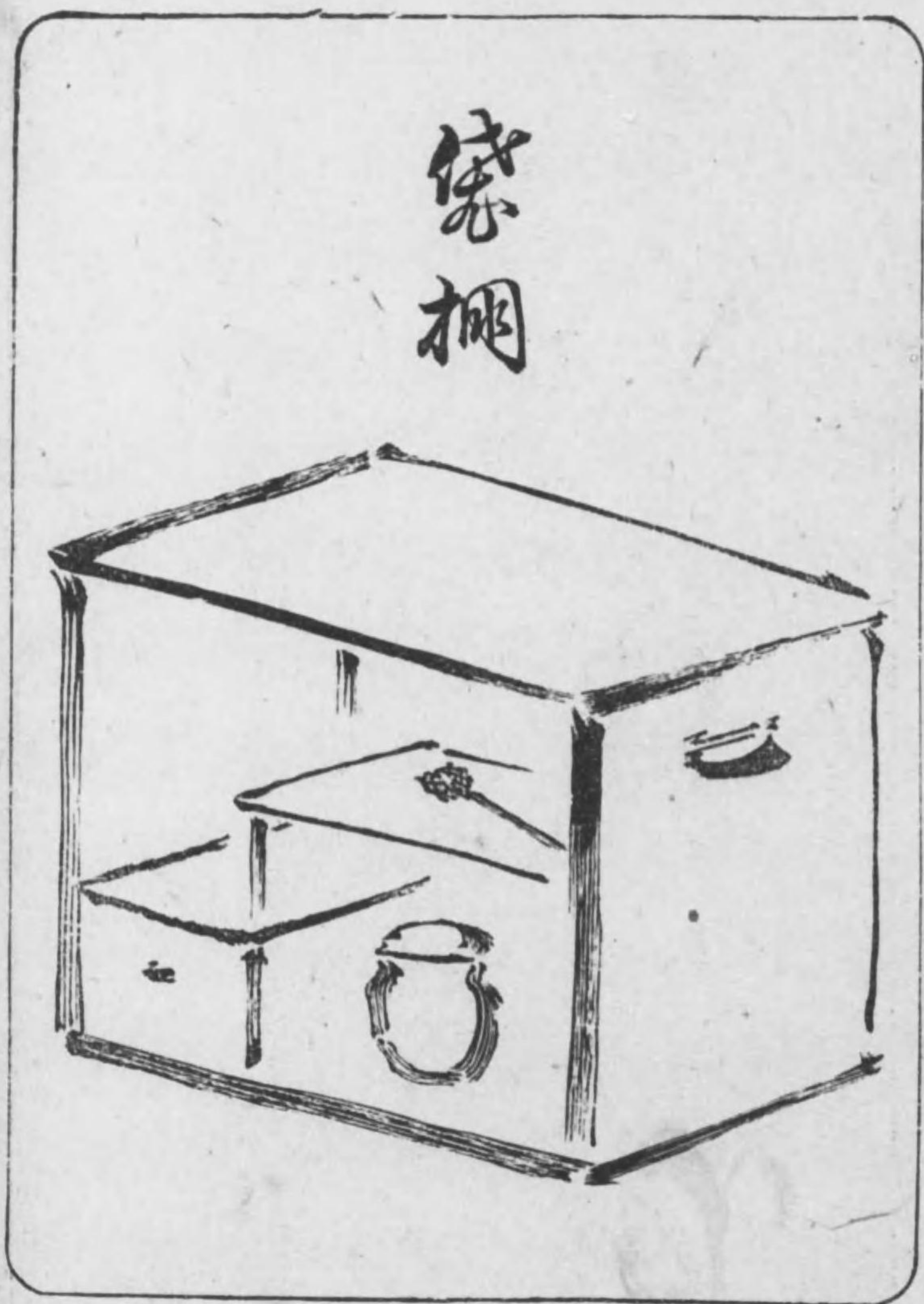
いりあひの鐘の外なる雲間より

ゆふひはしはしさと残つよ

ひき



袋棚



秋
そ
か
よ
ふ
く
ろ
田
な
ひ
さ
て

ほ
に
い
て
は

い
ろ
に
や
見
え
む

よ
ひ
の
稻
つ
ま

茶碗



ときめける人の心はしらぬ世に

思ふとちやはむかしかたらん

今更に思ひすてむもくるしくて

うきにまかせて

世をすこすなり

らん



水
あな



ふたつみつ子はしげに見る

わらはへの

秋の雀の

すたちするころ

ふ
か
き
ん

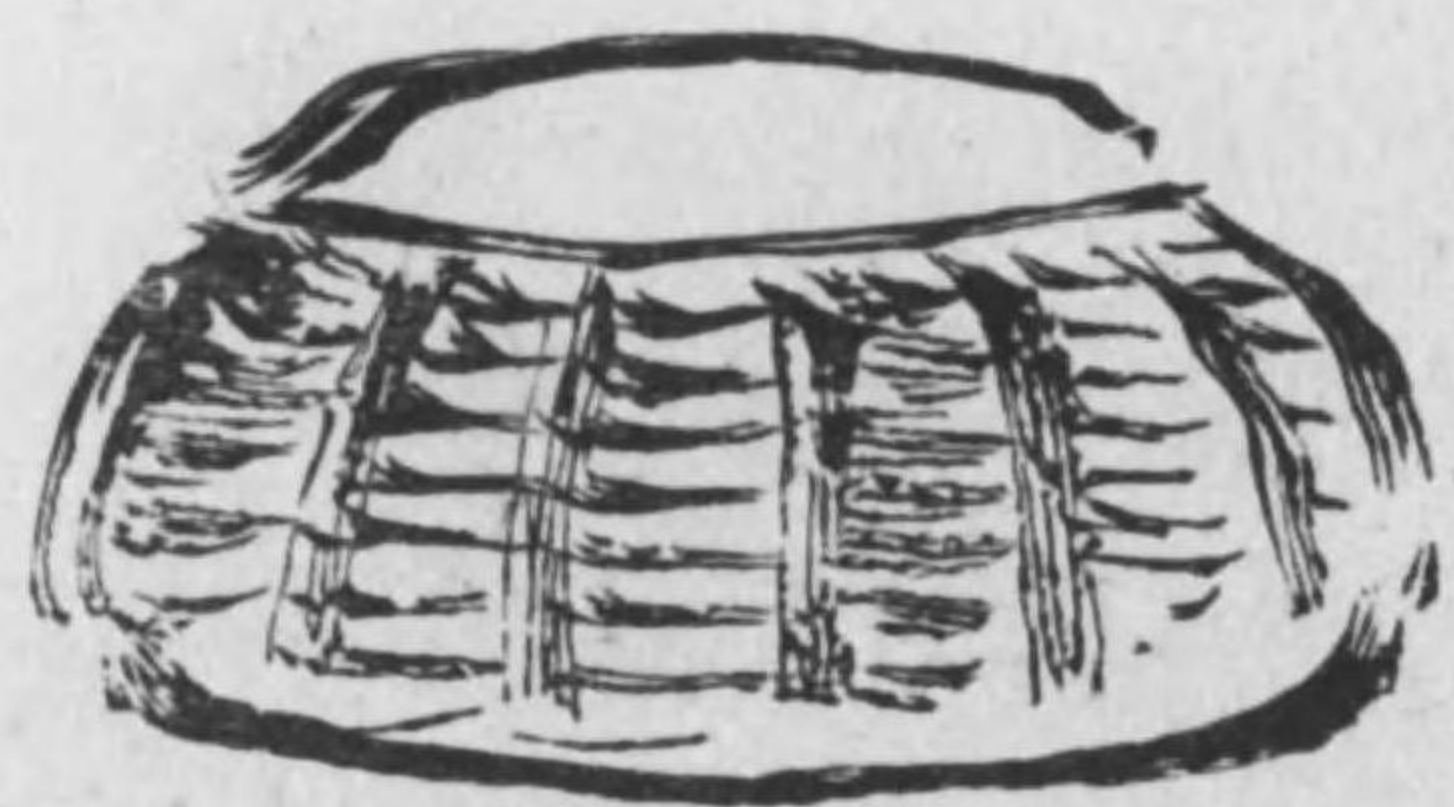


あはれにも妻こふ花の

かよふ田をきてかりねるか

けに賤やしつ

あま
とろ



有明のもかけすみどりも

はやはこゑの空の

きぬくろうき

不動智神妙錄

無明住地煩惱

無明とは、明になしと申す文字にて候、迷を申し候、住地とは、止る位と申す文字にて候、佛法修行に五十二位と申す事の候、その五十二位の内に物毎に心の止る所を住地と申し候、住は止ると申す義理にて候、止ると申すは、何事に付ても其事に心を止るを申し候、貴殿の兵法にて申し候は、向ふより切太刀を一目見て其下にそこにて合はんと思へば、向ふの太刀に其儘に心、止りて手前の働か抜け候て、向ふの人にさられ候、是れを止ると申し候、打太刀を見る事は見れどもそこに心をどめず、向ふの打太刀の拍子合せて、打たうとも思はず思案分別を殘さず、振上ぐる太刀を見るや否や心を卒度止めず、其まゝ付入て向ふの太刀にとりつかは、我をきらんとする刀を我が方へもぎとりて、却つて向ふを切る刀となるべく候、禪宗には是れを還把（鎗頭一倒一刺人）來ると申し候、鎗はほこにて候、人、持ちたる刀を我が方へもぎ取りて還つて相手を切るご申す心に候、貴殿の無刀

と仰せられ候事にて候、向ふから打つとも吾から討つとも、打つ人にも打つ太刀にも、程にも拍子にも、卒度も心を止めれば手前の働は皆抜け候て、人にさられ可申候、敵に我身を置けば敵に心をとられ候間、我身にも心を置くべからず、我が身に心を引きしめて置くも初心の間習入り候時の事あるべし、太刀に心をとられ候、拍子合に心を置けば拍子合に心をとられ候、我太刀に心を置けば我太刀に心をとられ候、これ皆心のとまりて手前抜殻になり申し候、貴殿御覺を可有候、佛法と引當て申すにて候、佛法には此止る心を迷と申し候、故に無明住地煩惱と申すことにて候

諸佛不動智

と申す事は、不動とはうごかずといふ文字にて候、智は智慧の智にて候、不動と申し候ても、石か木かのやうに無性なる義理にてはなく候、向ふへも左へも右へも、十方八方へ心は動き度きやうに動きながら、卒度も止らぬ心を不動智と申し候、不動明王と申して右の手に劍を握り、左の手に繩を取りて、齒を喰出し目を怒かし、佛法を妨げん悪魔を降伏せんとい突立て居られ候姿もあの様なるが、何國の世界にもかくれて居られ候てはなし、容をば佛法守護の形につくり、體をばこの不動智を體として衆生に見せたるにて候、一向の凡夫は怖れをなして佛法に仇をなさしと思ひ、悟に近き人は不動智を表したる所を悟りて一切の迷を晴らし、即ち不動智を明らかに此身則ち不動明王

程に此心法をよく執行したる人は、悪魔もいやまさぬと知らせん爲めの不動明王にて候、然れば不動明王と申すも人の一心の動かぬ所を申し候、亦身を動轉せぬことにて候、動轉せぬとは物毎に留らぬ事にて候、物一見見て其心を止めぬを不動と申し候、なせなれば物に心が止り候へば、いろ／＼の分別か胸に候間胸のうちいろ／＼に動き候、止れば止る心は動きても動かぬにて候。譬へば十人して一太刀つゝ我へ太刀を入るゝも、一太刀を受流して跡に心を止めず、跡を捨て跡を拾ひ候は、十人ながら働を缺かさぬにて候、十人十度心は働けども一人にも心を止めずば、次第に取合ひて働は缺け申間敷候、若し又一人の前に心が止り候は、一人の打太刀をは打流すべけれども二人めの時は手前の働抜け可申候、千手觀音とて手が千御入り候は、弓を取る手に心か止らば九百九十九の手は皆用に立ち申す間敷候、一所に心を止めぬにより手か皆用に立つなり、觀音とて身一つに千の手か何しに可有候、不動智か開け候へば身に手か千有りても皆用に立つと云ふ事を人に示さんが爲めに作りたる容にて候、假令一本の木に向ふて其内の赤き葉一つを見て居れば、残りの葉は見へぬなり、葉ひとつに目をかけずして一本の木に回心なく打向ひ候へば、數多の葉残らず目に見え候、葉一つに心をとられ候は、残りの葉は見えず、一つに心を止めねば、百千の葉みな見え申し候。是れを得心したる人は、即ち千手千眼の觀音にて候、然るを一向の凡夫は、唯一筋に身

一つに千の千の眼が御座して難有と信ト候、又なまものじりなる人は、身一つに千の眼か何しに
 あるらん虚言よと破り譏る也、今少し詎く知れば、凡夫の信するにてもなく破るにてもなく道理の
 上にて尊信し、佛法はよく一物にて其理を顯はす事にて候、諸道ともに斯様のものにて候、神道
 は別して其道と見及び候、有の儘に思ふも凡夫、又打破れば猶惡し、其内に道理有る事にて候、此
 道彼道さまざまに候へども、極所は落着候、扱初心の地より修行して不動智の位を至れば、立歸つ
 て住地の初心の位へ落つべき子細御入り候。貴殿の兵法にて可申候、初心は身に持つ太刀の構も何
 も知らぬものなれば身に心の止る事もなし、人が打ち候へはつひ取合ふばかりにて何の心もなし、然
 る處にさまざまの事を習ひ、身に持つ太刀の取様、心の番所、いろ／＼の事を教へぬれば色々處
 に心が止り、人を打たんとすれば兎や角して殊の外不自由なる事、日を重ね年月をかされ稽古する
 に従ひ、後は身の構も太刀の取様も、背心なくなりて唯最初、何か知らぬ何んなき様の様也、是
 れ初と終と同トやうになる心持にて、一から十までかぞへまはせば、一と十と隣りなり申し候、調
 子なども一の初の下き一をかぞへて上無と申す高き調子へ行き候へば、一の下と一の上とは隣りに
 なり申し候。

- 一 壹越。
- 二 斷金。
- 三 平調。
- 四 勝絶。
- 五 下無。
- 六 雙調。
- 七 烏鐘。
- 八 つくせき。

- 九 鐵(打けい)。
- 十 盤涉。
- 十一 神仙。
- 十二 上無。

づゝと高きとづゝと低きは似たるものになり申し候、佛法もづゝとたけ候へは佛ども法ども知らぬ
 人のやうに、人の見なす程に飾も何もなくなるものにて候、故に初の住地の無明と煩惱と後の不動
 智とが一つに成りて、智慧働の分は失せて無心無念の位お落着申し候。愚痴の凡夫は一向に智慧が
 なき程お出ぬ也、又づゝとたけ至りたる智慧は早ちかへ處入によりて一切出ぬなり、なま物知りな
 るによつて智慧が頭へ出で申し候てをかしく候。今時分の出家の作法ども嘿をかしく可_レ思召_二候、御
 耻かしく候。理の修行、事の修行と申す事の候。理とは右に申し上げ候如く、至りては何も取あは
 ず唯一心の捨やうにて候、段々右に書付け候如くよて候、然れども事の修行を不仕候えは、道理ば
 かり胸に有りて身も手も不動候、事の修行と申し候は、貴殿の兵法にておれは身構の五箇に一字の
 さま／＼の習事よて候、理を知りても事の自由に働かねばならず候、身に持つ太刀の取まはし能く
 候ても理の極り候所の開く候ては相成間敷候、事理の二つは車の輪の如くなるべく候。

間 不容 髮

と申す事候、貴殿の兵法にたどへて可申候、間とは物を二つかさね合ふたる間へは、髮筋も入ら
 ぬと申す義にて候、たどへば手をハタと打つに其儘ハツツと聲が出で候、打つ手の間へ髮筋の入る

程の間もなく聲が出で候、手を打つて後に聲が思案して間を置いて出で申すにては無く候、打つと其儘聲が出で候、人の打ち申したる太刀に心が止り候えば、間が出来候、其間に手前の働が抜け候向ふの打つ太刀と我働との間へは、髪筋も入らず候程あらば、人の太刀は我太刀たるべく候、禪の間答には此心ある事にて候、佛法にては此止りて物に心の残ることを嫌ひ申し候、故に止るを煩惱と申し候、たてまつたる早川へも玉を流す様に乗つてドット流れて少しも止る心なきを尊ひ候。

石火之機

と申す事の候、是れも前の心持に候、石をハタと打つや否や光が出で、打つと其のまゝ出る火なれば間も透間もなき事にて候、是れも心の止るべき間のなき事を申し候、早き事とばかり心得候へば悪敷候、心を物に止め間敷と云ふが詮に候。早きにも心の止まらぬ所を詮に申し候、心が止まれば我心を人にとられ申し候、早くせんと思ひ設けて早くせば、思ひ設ける心に又心を奪はれ候、西行の歌に「世をいと人とし聞けはかりの宿に心止めちと思ふはかり」と申す歌、江口の遊女の讀みし歌なり、歌を我と心得られ候て可然候はんか、心止めなと思ふはかりぞ心得所と可存候、又是れにて御合點可有候、禪宗にて如何是佛、問ひ候は、拳をさしわぐべし、如何か佛法の極意と問は、其聲未だ絶たざるに一枝の梅花となりとも庭前の柏樹子となりとも云ふべし、云ふ事の吉凶

を撰ぶにてはなし止らぬ心を尊ぶあり、止まらぬ心は色にも香にも移らぬ也、此移らぬ心の體を神とも祝ひ、佛とも尊び、禪心とも、極意とも申候へども、思案して後に云ひ出し候へば、金言妙句にても住地煩惱にて候、石火の機と申すもどカリとする稻光のばやきを申し候、例へば右衛門とよびかくるとアツと答ふるを不動智と申し候、右衛門と呼ばれかけて何の用にてか有る可きなど、思案して、跡に何の用か杯いふ心は住地煩惱にて候、止りて物に動かされ迷はざる心所住煩惱とて凡夫にて候、又右衛門と呼ばれてオツと答ふるは諸佛智なり、佛と衆生と二つ無く、神と人と二つ無く候、此心の如くなるを神とも佛とも申し候、神道、歌道、儒道とて道多く候へども、皆この一心の明なる所を申し候、言葉にて心を講釋したふんにてはこの一心人と我身にあたりて、晝夜善事悪事とも業により家を離れ國を亡し其身の程々にしたがひ、善し悪しとも心に業にて候へども、此心を如何やうなるものぞと悟り明むる人なく候て、皆心に惑され候、世の中に心を知らぬ人は可有候、能く明め候人は稀にも有りがたく見及び候、たま／＼明め知る事もまた行ひ候事成り難く、此一心を能く説くとて心を明めたるにてはあるまじく候、水の事を講釋致し候とて口はぬれ不申候火を能く説くとも口は熱からず、誠の水賊の火に觸れてならでは知れぬもの也。書を講釋したるまでにては知れ不申候、食物をよく説くともひだるき事は直り不申候、説く人の分にては知れ申す

間敷候、世の中に佛道も儒道も心を説き候得共、其説く如く其人の身持なく候心は明に知らぬ物にて候、人々我身にある一心本来を篤と極め悟り候はねは不明候、又參學をいたる人の心が明かならぬは、參學する人も多く候へどもそれにもよらず候、參學したる人心持皆々惡敷候、此一心の明めやうは深く工夫の上より出で可申候。

心の置所

心を何處に置かうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり、敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり、敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり、我太刀に心を置けば、我太刀に心を取らるゝなり、われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるゝなり、人の構に心を取らるゝなり、心行く所に志を取止めて、兎角心の置所はないと言ふ、或人問ふ、我心を兎角餘所へやれば、心行く所に志を取止めて敵に負けるほどに、我心を臍の下に押込めて餘所にやらすして、敵の働により轉化せよと云ふ、尤も左もあるべき事なり、然れども佛法の向上の段より見れば、臍の下に押込めて餘所へやらぬと云ふは、段が身さし向上にあらず、修行稽古の時の位なり、敵の字の位なり、又は孟子の放心を求めよと云ひたる位なり、上りたる向上の段にてはなし、敵の字の心持なり、放心の事は別書に記し進

じ可有御覽候、臍の下に押込んで餘所へやるまじきとすれば、やるまじと思ふ心に心を取られて先の用かけ殊の外不自由になるあり、或人問ふて云ふは、心を臍の下に押込んで働かぬも不自由にして用が缺けば、我身の内にして何處にか心を置可そや、答へて曰く、右の手に置けば右の手に取られて身の用缺けるなり、心を眼に置けば眼に取られて身の用缺け申し候、右の足に心を置けば右の足に心を取られて身の用缺けるなり、何處なりとも一所に心を置けば餘の方の用は皆缺けるなり、然らば則ち心を何處に置くべきや、我答へて曰く、何處にも置かねば我身に一ぱいに行きわたるて全體に延ひひろごりある程に、手の入る時は手の用を叶へ、足に入る時は足の用を叶へ、目の入る時は目の用を叶へ、其入る所々に行きわたる程に、其入る所々の用を叶ふるなり、萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くべきなり、思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも残さず、心をは總身に捨て置き、所々止めずして其所々に在て用をば外さず叶ふべし、心を一所に置けば偏に落つると云ふなり、偏とは一方に片付きたる事を云ふなり、正とは何處へも行き渡つたる事なり、正心とは總身へ心を伸べて一方へ付かぬと言ふなり、心の一處に片付きて一方缺けるを偏心と申すなり、偏を嫌ひ申し候、萬事に堅つたるは偏に落つるとて道に嫌ひ申す事なり、何處に置かうとて思ひなければ、心は全體に伸びひろびりて行き渡りて有るものな

り、心をば何處にも置かずして、敵の働によりて常位々々心を其所々にて可用心歟、總身に渡つておれば、手の入る時には手にある心を遣ふべし、足の入る時には足にある心を遣ふべし、一所に定めて置きたらば、其置きたる所より引出し遣らんとする程に、其處に止りて用が抜け申し候、心を繋ぎ猫のやうにして餘處にやるまいとて、我身に引止めて置けば、我身に心を取らるゝなり、身の内に捨て置けば餘處へは行かぬものなり、唯一所に止めぬ工夫是れ皆修行なり、心をばどつこにも止めぬが眼なり肝要なり、どつこにも置かねばどつこにもあるぞ、心を外へやりたる時も、心を一方に置けば九方は缺けるなり、心を一方に置かざれば十方にあるぞ。

本心妄心

と申す事の候、本心と申すは一所に留らず、全身全體に延び廣がりたる心にて候、妄心は何ぞ思ひつめて一所に固り候心小て、本心が一所に固り集りて妄心と申すものに成り申し候、本心は失ひ候と所々の用か缺ける程に、失はぬ様にするが本心なり、たとへば本心は水の如く一所に留らず、妄心は水の如くにて、水にては手も頭も洗はれ不申候、水を解かして水と爲し何所へも流れるやうにして、手足をも何をも洗ふべし、心一所に固り一事に留り候へば、水固りて自由に使はれ申さず、水にて手足の洗はれぬ如くにて候、心を溶かして總身へ水の延びるやうに用ひ、其所に遣りたきまゝ、

に遣りて使ひ候、是れを本心と申し候、

有心之心無心之心

と申す事の候、有心の心と申すは妄心と同じ事にて、有心とはアルコ、ロと讀む文字にて、何事にても一方へ思ひ詰る所なり、心に思ふ事ありて分別思案が生ずる程に、有心の心と申し候、無心の心と申すは右の本心と同じ事にて、固り定りたる事なく分別も思案も何も無き時の心、總身に廣がりて全體に行渡る心を無心と申す也、どつこにも置かぬ心なり、石か木かのやうにてはなし、留る所なきを無心と申す也、留れば心に物があり留る所なければ心に何も無し、心に何もなきを無心の心と申し、又は無心無念とも申し候、此無心が心に能くなりぬれば一事に止らず一事に缺かず、道に水の溢えたるやうにして此身に在りて用の向ふ時出て叶ふなり、一所に定り留りたる心は自由に働かぬなり、車の輪も堅からぬにより廻るなり、一所につまりたらば廻るまじきなり、心も一時に定むれば働かぬものなり、心中に何ぞ思ふ事あれば人の云ふ事とも聞きなから聞えざるあり、思ふ事に心が止るゆゑなり、心が其思ふ事に在りて一方へかたより、一方へかたよれば物を聞けども聞えず、見れども見えざるなり、是れ心に物ある故なり、あると思ふ事があるなり、此有る物を去りぬれば、心無心にして唯用の時ばかり働きて其用に當る、此心にある物を去らんと思ふ心が又心

中の有る物になる、思はざれば獨り去りて自ら無心となるなり、常にかくすれば何時となく後は獨り正位へ行くなり、急にやらんとすれば行かぬものなり、古歌に「思はしと思ふも物を思ふなり思はしとだに思はしやきみ」。

水上打胡蘆子・捺着即轉

胡蘆子を捺着するとは手を以て押すなり、瓢を水へ投げて押せばホットト脇へ退き、何としても一所に止らぬものなり、至りたる人の心は卒度も物に止らぬ事なり、水の上の瓢を押すが如くなり。

應無所住而生其心

此文を讀み候へば、オウムシヨジウヨシヤウゴシンと讀み候、萬の業をするにせうと思ふ心が生ずれば、其する事に心が止るなり、然る間止る所なくして心を生ずべしとなり、心の生ずる所に生ぜざれば手も行かず、行けばそこに止る心を生じて其事をしながら止る事なきと、諸道の名人と申すなり、此の止る心から執着の心起り、輪廻も是れより起り、此止る心生死のきづなど成り申し候、花紅葉を見て花紅葉を見る心は生トながら、其所に止らぬを詮と致し候、慈圓の歌に「柴の戸に匂はん花もさああらばあななかにけりな恨めしの世や」花は無心に匂ひぬるを我は心を花にとりてななめけるよと、身の是れにそみたる心が恨めしと也、見るとも聞くともし所に心を止めぬに至極

どする事にて候、敬の字を主一無適と致す程も、心を一所に定めて餘所へ心をやらす、後に扱いて切るとも切る方へ心をやらぬが肝要の事にて候、殊に主君杯に御意を承る事、敬の字の心眼たるべし、佛法にも敬の字の心有り、敬白鐘を鳴らすと鐘を三つ鳴して手を合せ敬白す、先づ佛と唱へ上げる此敬白の心、主一無適、一心不亂、同ト義にて候、然れども佛法にては敬の字の心は至極の所にては無く候、我心を捉へて亂さぬやうにとて習ひ入る修行稽古の法にて候、此稽古年月つものぬれば心を何方へ追放 やりても、自由なる位に行く事にて候、右の應無所住の位は向上至極の位にて候、敬の字の心は心の餘所へ行くを引留めて遣るまい、遣れば亂ると思ひて卒度も油断なく心を引きつめて置 位にて候、是れは當座心を散らさぬ一旦の事なり、常に如是ありては不自由なる義なり、譬へば雀の子を捕へられ候と、猫の繩を常に引きつめて居ては馴れぬ位にて、我心を猫をつれたるやうにして不自由にしては、用が心のまゝに成る間敷候、猫によく仕付をして置いて繩を追放して行度き方へ遣り候て、雀と一つ居ても捕へぬやうにするが、應無所住而生其心の文の心にて候、我心を放捨 猫のやうに打捨て、行度き方へ行きても心の止らぬやうに心を用ひ候、貴殿の兵法に當 申し候は、太刀を打つ手に心を止めず、一切打つ手を忘れて打つて人を切れ、人に心を置くな、人も空、我も空、打つ手も打つ太刀も空と心得、空に心を取られまひぞ、鐘倉の無

學禪師、大唐の亂に捕へられて切らるゝ時に、電光影裏斬春風といふ偈を作りたれば、太刀をい
捨て、走りたると也、無學の心は太刀をひらりと振上げたるは、稻光の如く電光のびかりとする間
何の心も何の念もないぞ、打つ刀も心はなし、切る人も心はなし、切らるゝ我も心はなし、切る人
も空、太刀も空、打たるゝ我も空なれば、打つ人も人にあらず、打つ太刀も太刀にあらず、打たる
ゝ我も稻光のびかりとする内に、春の空を吹く風を切る如くなり、一切止らぬ心なり、風を切つた
のは太刀に覺ゆるもあるまいぞ、かやうに心を忘れ切つて萬の事をするが上手の位なり、舞を舞へば
手に扇を取り足を踏む、其手足を能くせむ舞を能く舞はむと思ひて、忘れさらねば上手とは申され
ず候、未だ手足に心止らば業は皆面白かるゝじ、悉皆心を捨てさらずしてする所作は皆惡敷候。

不見放心

と申すは、孟子が申したるにて候、離れたる心を尋ね求めて我身へ返せと申す心にて候、譬へば犬
猫鶏など放れて餘所へ行けば、尋ね求めて我家へ返す如くに心は身の主なるを、惡敷道へ行く心が
逃げるを何とて求めて返さぬぞと也、尤も斯くあるべき義なり、然るに又邵康節と云ひしは必要に放
と申し候、はらりと替り申し候、斯く申したる心持は、心を執へつめて置いては勞れ猫のやうにて
身が働かれねば、物に心が止らず染ぬやうに能く使ひなして、捨て置いて何所へなりとも返放せと云

ふ義なり、物に心が染み止るによつて染す止らずな、我身へ求め返せと云ふは、初心稽古の位な
り、逆の泥に染ぬが如くなれ、泥にありても苦しからず、よく磨きたる水晶の玉は泥の内に入つて
も染ぬやうに心をなして、行き度き所にやれ、心を引きつめては不自由なるぞ、心を引きしめて置
くも、初心の時の事よ、一期其分では、上段は終に取られずして下段にて果つるなり、稽古の時は
孟子が謂ふ不見放心と申す心持能く候、至極の時、邵康節が必要放と申すにて候、中峯和尚の語に
見放心とあり、此意は即ち邵康節が心をば放さんことを要せよと云ひたると一つにて、放心を求め
よ引きとやめて一所に置くなど申す義にて候、又具不退轉と云ふ、是れも中峯和尚の言葉なり、退
轉せずには替はらぬ心を持ってと云ふ義なり、人たゞ一度二度は能く行けども、又つなかれて常に無い
裡に退轉せぬやうなる心持てと申す事にて候。

急水上打毬子念々不停留

と申す事の候、急にたさつて流るゝ水の上へ手毬を投せば、浪にのつてばつばと止らぬ事を申す義
なり。

前後際斷

と申す事の候、前の心をすてず又今の心を跡へ殘すか惡敷候なり、前と今との間をば、きつてのけ

よと云ふ心なり、是れを前後の際を切つて放せと云ふ義なり、心をどめぬ義なり。

内々存寄候事、御諫可申入候由、愚案如何に存候得共、折節幸と存じ及見候處あらまし書付進し申候、

貴殿事、兵法に於て今古無雙の達人故、當時官位俸祿世の聞えも美々敷候、此大厚恩を察ても覺ても忘るゝことなく、且夕恩を報し忠を盡さんことをのみ思ひたまふべし、忠を盡くすといふは、先づ我心を正しくし身を治め、毛頭君に二心なく、人を恨み咎めず、日々出仕怠らず、一家に於ては父母に能く孝を盡し、夫婦の間少しも猥になく、禮義正しく妾婦を愛せず、色の道を絶つ、父母の間おごそかに道を以てし、下を使ふに私のへだてなく、善人を用お近付け、我足らざる所を諫め、御國の政を正敷し、不善人を遠ざくる様にするときは、善人は日々に進み、不善人もおのづから主人の善を好む所に化せられ、悪を去り善に遷るなり、如此君臣上下善人にして、欲薄く奢を止むる時は、國に寶滿ちて民も豊ふ治り、子の親をしたしみ、手足の上を救ふが如くならば、國は自ら平に成るべし、是れ忠の初なり、この金鐵の二心なき兵を、以上様々の御時御用に立てたらば、千萬人を遣ふとも心のまゝなるべし、則ち先きに云ふ所の千手觀音の一心正しければ、千の手皆用に立つか如く、貴殿の兵術の心正しければ、一心の働自在にして數千人の敵をも一劍に隨へるが如し、是

れ大忠にあらざるや、其心正しき時は、外より人の知る事もあらず、一念發る所に善と惡との二つあり、其善惡二つの本を考へて、善をなし惡をせざれば、心自ら正直なり。惡と知り止めざるは我好む所の痛みあるゆゑなり、或は色を好むか、奢氣隨にするか、いかさま心に好む所の働きある故に善人ありとも我氣に合はざれば善事を用ひず、無智なれども一旦我氣に合へば登し用ひ好むゆゑも善人はありても用ひざれば無きが如し、然れば幾千人ありとも、自然の時、主人の用に立つ物は一人も不可有之、彼の一旦氣に入りたる無智若輩の惡人は、元より心正しからざる者故、事に臨んで一命を捨んと思ふ事、努々不可有、心正しからざるものも主の用に立ちたる事は、往昔より不承及どころなり、貴殿の弟子を御取立て被成にも、箇様の事有之由、苦々敷存候、是れ皆一片の數奇好む所より其病にひかれ、惡に落入ると知らざるなり、人は知らぬと思へども、以より明かなる奇しとて、我心に知れば、天地鬼神萬民も知るなり、如是して國を保つ、誠に危き事にあらずや、然らば大不忠なりとこそ存候へ、たとへば我一人いかに矢猛に主人に忠を盡さんと思ふとも、一家の人和せず、柳生谷一郷(但馬守の領所)の民背きなば、何も皆相違仕るべし、總て人の善し惡しきを知らんと思はば、其愛し用ゐらるゝ臣下、又は親み交る友達を以て知ると云へり、主人善なれば其近臣皆善人なり、主人正しからざれば臣下友達皆正しからず、然らば諸人みななみし

隣國是れを侮るなり、善なるとき、諸人親むとは此等の事なり、國は善人を以て實とすと云へり
 よく御體認なさるべし、人の知る所に於て、私の不義を去り小人を遠け賢を好む事を急に成さ
 れ候は、いよく國の政正しく、御忠臣第一たるべく候、就中御賢息御行跡の事、親の身正しか
 らずして、子の悪しさを責むること逆なり、先づ貴殿の身を正しく成され、其上にて御異見も成さ
 れ候は、自ら正しくな、御舍弟内膳殿も兄の行跡よならひ正しかるべければ、父子ともに善人
 となり、目出度かるべし、取ると捨つるとは義を以てすると云へり、唯今寵臣たるにより、諸大名
 より賄を厚くし、欲に義を忘れ候集、努々不可有候、貴殿亂舞を好み、自身の能に奢り、諸大名
 衆へ押して参られ、能を勤められ候中、偏に病と存候なり、上の唱は猿樂の様に申し候由、まア換
 拶のよき大名をば、御前に於てもつよく御取成しなさる由、重ねて能く御思案可然歎、歌に
 「心こそ心迷はす心なれ心に心ゆるすな」。

不動智神妙錄終

歸西日記

在歲乙亥依台命難遁、臘月初五日起但州入佐山之草蘆、同二十日入幕府、同二十八日微入殿備人事
 以禮謁台顔、恩意不淺而後時時依命窺城垣矣、光陰不留春往夏來秋亦去、惟時十月下旬吾山開祖三
 百年忌、當此歲臘月二十二日不可有不香拜、依此奉請歸京之暇蒙許可、仲冬初七日出幕府矣、亦夢
 寐去又夢寐醒寐何時乎、光陰不留時不待人、吾夢中之世壽六十四不得半日閑、東漂西泊而身已老矣
 吁是難過乎。

| | |
|---------|---------|
| 世上光陰下坂車 | 歲云暮矣欲歸家 |
| 士峯白雲雖無飽 | 又思長安一日花 |
| 過品川 | |
| 橋過品川倚旅亭 | 知音携酒好叮嚀 |
| 又相別去問前路 | 我此生涯水上萍 |

世をわたる品川賤かくちにさけひ

かたになふにうきやいらるゝ

六郷の橋をもすぎ、あご見し人もまへになり、前にたしし人もたくれぬる、老し不定のさかひもかくやとぞ思ひし。

今宵かな川にやどり占めて、

うき世かなかはる淵瀬は人ことこの

こゝろの水にふみまよひぬる

八日にこの宿を出て戸塚を過ぎぬ。

のふる手をにきる十東にたらぬことを

なかくも我はたのみぬるかな

所の名をたてているばかり也、名所ともきかねば寄枕も知らず、藤澤に晝のやすらひして、

浪かくと岡にやかねてつくるらん

花咲くころの藤澤のてら

この暮に大磯の宿につく、此里に虎石とていにしへの遊君石となりて今にありといへり。

石どのこる姿もさそなものゝふの

矢もたゝしおほ磯のどら

こよろきのいそも此つゝきといへば、

世のなかはいづくも海と浪わけて

小磯もかへりこよろきの磯

九日に小田原に晝のやすらひして、

賤男かいつくしにもる小田原は

らうたけし人のしらぬわさ哉

小田原といはんばかり、且宿次のしるし也。

出小田原上宮根、山路繞羊腸崎嶇二十里、漸臨湖水、見之思之妙高峯頂行舟亦何難、直入宮根寺則
主山聳安山立、暮鐘應空谷樓觀列波心、親覺身是到竟宮城、山隈有新村行以卸角駄、則入坐湖水湛
前土峰涵、寔世外之壯觀也。

遠到宮根山轉重 十年古寺智樓鐘

影枕湖水有奇觀 樵夫乘舟上土峰

（はならぬ宮根の海のみつけふり）

その影さへ富士やもゆらん

十日午時入三島、先參詣於明神矣、本社未社新造華美不可勝言矣、

南無三島大明神 本地大通佛變身

蓬大瀛洲是當處 不紹弱水得仙真

浮島原

行處是皆浮島原 此生如寄不留痕

雖藏身尙未藏影 歸去來兮無月村

思ふことなくていつくにありはてぬ

しはしなる世を浮島かはら

のぼる左の海原に松のしけり有りといへば、これこそ駿河の國千本のまつばらとて、多く人を白刃

よめてし所といふ。

むかしこゝに人やなけきを植つらん

今もちもとのしけさまつ原

過 吹 上

客路風寒吹上松 惟時天序在三冬

夕陽收盡浦雲合 數杵猶敲海寺鐘

世にたかく吹上のまつの名にたつや

木末にかよふをさつとほかせ

多 子 浦

魚思擅竈暖空相 世路艱難最堪憐

似愛風光多子蛭 擔頭潮汲月明遠

田子のあま汲しは煙風をいたみ

さえゆく空に身をやるらん

清 見 關

不鎖關門○吏生 只能令勝境留行

暮雲埋景有遺恨 清見寺中鐘一聲

人やたれとむるどもな一清見かた

うらのなかめや波のせきもり

過 三 保

三保松原緑攝波 江東絶勝不尋花

客中風景未知飽 強策羸驂信脚邊

世をわすれ三保の松原ふしの雪

しはやく煙海士のつり舟

十二日の朝江尻の宿を誰も旅なれば府中とても心ごまらず、阿部川とやらんもすぎ、まりこ川にのそめは夕日やにしきの波、水鳥や鴨履をあけて渡るあり、葛袴のすそぬれて恨みながらうつつ山にかゝる。

いく〇そよは石のまをうつつ山

ひかりのまさへたとき細道

旅人には心おかへの郷ながら、晝のやすらひして、さく頃思ふ藤枝の花、波かゝる大井川をわたる。

瀬はふちと思ひかはさは大井川

人のこゝろのそともたのまし

十三日にかなやの宿をいでたどるに、こゝぞ音にきく川も過ぎ、中山にかゝれどもさよあけず、世にゆつるやからは心常にいそがし、うれらにいざなはれておもひの外にやどりをとく出で、中山より富士のながめもなりかねて、心にかけしもいたつらになれば、

世をおもふ人ゆゑ宿をとく出で、

またあけやらぬ小夜の中山

年たけて又とはかねて思はさり、また越ると思へば、

思ひきやとおもひながらも又こえて

ゆくゑはしらぬ小夜の中山

かけ川にて、

ゆくまゝにたち歸るべき老が身の

とはかり袖にかけ川のみ

風ふくろひも身にしむばかりながら、富士を見付のこふといへば、

富士といへば時知るものを三寒さへ

めづらしからぬ雪も珍らし

望 士 峰

富士山高甲大倭 中朝五嶽亦如何
峰臨東海所何似 只見漁翁雪一簑

去歲日富士合作記于此

直上山旬碧落間 千秋積雪擁東關
月明夜若星無影 富士峰前不見山

十四日濱松の宿を出で、

里の名はどはてもしるし沖つなみ

木末にひくくはま松のおと

あら井の渡して白須賀の海にのぞみ、

しら菅のねさしもしらてよる浪の

岩にくたけてひきぞわづらふ

鹽見坂をのぼりて、

暮まちて見ましや海をわけのはる

つきかけそへてさす鹽見坂

坂とはのぼり行く道をいふにはあらず、のぼりノ上たいらにして海を見かろす、是を坂の本意とすと思ひき、松原遠く行く右に道あり、杜若の名を得たる澤邊は行く道あり。

ことのはをどめて三川の杜若

花こそあらめねさへかれぬる

時しも三冬なれば今は理なり、其時を得てさへ花は名にさけるのこ、これぞ三河の澤といふべきかたちもなし、田ばかりありて杜若もなしと興せしも理とぞおもふ、ふた川とやらんにつきて、

かきわけてあらひやなかすかち人の

よをうみわたるかたふた川

舞波津の事のあしも吉田と聞くにいさみあり、里の名の五位をへてのぼればしめをひろいて世をわたるへき山中なり。

あふにいつと定めなければ定めある

いのちのつゆの風の聞かき

赤坂にやどりければ日もくれぬ、十五日の朝こゝを出で、

しろたへの雪もうつめぬ赤坂や

名にさく花のつゝしならまし

岡崎にひるやせりて、

鉢袋手をさしいれてさかせども

なに岡崎の茶の錢もなし

鳴見を暮かけて過くる。

さとの子の夕どとろきに沖のなみ

なるみど是や人やいふらん

池の鯉鮒と書きて、里の名のちりふといへり。

水底のうろくつまてもすめる世に

あふや嬉しき池の鯉鮒

あつたにつき、夏を思ひ出で、

夏とてもいかてあつたの宮人は

すゝみどるらん月のいりうみ

桑名の城主干身は幕府にありながら、家老に仰せてさきたつて三日迎舟たまはる、薄暮に宮の前を
いだす、七里の渡なり。

過熱田前初月寒 三更雨進不心安

征帆遅速風消息 渡是嚴陵七里灘

十六日の明がたに桑名につく、此渡をこえて人皆東路の難を、かれたる心地しぬ、桑名にかくして

あづまかたいく海山にこゝよりは

うけくはなしにかへる都路

こゝを晝にさかりて出で、四日市といふ宿に一夜をあかす。

見渡せはいせや尾張のうみつらを

ふりあけてゆくまほの追風

行末に宿あり、右に瓦の軒高く御堂あり、とへば石薬師といふ、もじをかゝして

どはぬよりこひしやくしのはいことに

かさやるふみの數はつもれど

下興 薬師

拜石藥師其製工
露含虛碧瑠璃色
應供方土本常東
問出身途龜鑿中

庄野をへて龜山にのぼる。

關之地藏大悲深
酒肆思房錫杖音
清光昨夜在蹄沔

誰見高天一輪月

宿坂下詣鈴鹿御前

鈴鹿明神古池深
靈燈一點月懸峰
溪水山風神樂音

聽消業際盡煩惱

十八日こゝを出て、

松のかせ水のひきやふのつから
さねか袂にふるすしか山

名をきけばはなれかたきと思ふ、

ねきこともわれにはさかす名を思ふ
こゝろやみねと神をいのらば

山をこえ水口といふに畫のやどりして、所の名をたち入れて、

惜のをしむ身さへ骨さへみな朽ちて

のこるは後の名のみならずや

横田石部をとほる。

ひさしかれたまはる君かよこ田山

さゝれいしへも苦むせるまで

右に鏡山を見てすゝみ行くに、

これもまた君か心のすくなれば

すくなるを世のかゝみ山かな

草津といふ所に一夜寐て、

まかなくに人の心をたねなれば

こぞ草つきぬしきまの道

十九日ひるまへに大津につき、あけて廿日に宿を出て、

いにしとし折出の濱の潮の海

關にいとて、

又このころにかへる波かな

山科の春をしまらすむめか香に

誰にもまざる關むかひかな

粟田山をいで、初めて都の空に向ひて、

粟田山やま口いて、ほのくど

都にけふは入るそ嬉しき

廿日ひる頃紫町の舊店にゐる。

歸西日記終

澤菴法語

天地之部

天地の間に三ツの理といふものあり、この理感と動いて氣といふものに變じ候、變ずるといふは根に風が來りて聲のする如くなり、例ば水と波とのことし、水動けば波となり、氣一度動きて一度は靜りて候、其靜るを陰と申す也、靜りて又動き候を陽と申す也、この陰陽が五つにわかれて木火土金水の五つとなり、此五が和合して人となり、鳥獸草木萬の物となり、是をわしこめて萬物と申す也、一理、一氣、陰陽、五行、萬物とわかれ、又萬物が有通しには無き物なれば、人も死し草木も枯れ候へば變じて無くなり、もとの五行にかへり、五は陰陽にかへり、陰陽は一氣にかへり、一氣は又一理にさはまり候、さはまりて又はしまり候へば、いつをかぎりともいつかはじめとも申しがたき子細にて候、是はまづ天地の事にて候、人身は是をつめて作り出したる身のうちにて候、蟻ほどの小なる虫と思へども、廣き天地のつもりに少しもかはらず候、まして人間牛馬などのたぐ

ひ、皆天地をつらめて作りたる物にて候へば、合ふて天地に少しもちがひなく候、九つ入子の鉢をまはすおどく、外の大きな鉢がまはれば、内の小さい八つの鉢も皆ついでまはるごとく、人と天地と一つに廻り候へども、人はそれどもしらずして作り申し候也、然るにより春は人の心も春になり、秋は人の心も秋になり、空曇れば人の氣も曇り、空晴れば人の氣も晴るなり。

理 天地の間に一つの理と申すもの候、此理と申すは形なくして空なるもの也、空なるゆゑに目に見えず候、魚の目も水見えず人の目に空見えずと申すことの候、水がまじく混へてあり、その中に魚泳ぎまはれども、魚の目に水が見えず候、然れどもその水が變じて其魚となり、鱗、肉、骨腹わた、尾ひれ、皆水にて作り出して水の中に居れども、水を見ざる也、人も空にて作り出して空の中に居ても、空は目に見えぬものにて候、空なれば目に見えず、見えねばひとへになき物とおもふ人あり、愚なること也、例へば風は形なき空なれども、無きものとはいはれず候、あるものなれば來りて松の木末をならし候、是形なくとも有るしるし也、事この理と申すものは形なれども、明々として有るものと心法を悟る人は是を見る、心眼にて心眼あり、心の眼にて見るを觀と申す也、觀念から見ることに候、人は皆眼二つあり、悟りぬれば眼三つあり、心に一の眼なくては見がたき所は見出されず候、鶏に三足ありと申すことの候、なぜになれば二つの足にて立て居るもの

ならば、死したる鶏も立をるべけれども、死したる鳥は立てみられざる也、身の内に今一つの足なくては立つ事ならず候程に鶏に三足ありと申し候、二つの眼はひまれ子も物見ることにて候、色形もなき物を見るは心の眼といふものなくては見られざる也、心の眼を開くがせんなる事に候、玉子に毛ありと申し候、赤だあらはれぬ所に道理が備はりてあるゆゑに、顯るべき時にあらはれ出づる也、いまだ顯れざるべきを見るは心の眼也、又かやうの理をよく説く人はおれども、それは七つ八つになる子があはれなる謠をうたひ能をして、見聞人はおれども我をく事もいらざるたぐひ也口に説き心に知りたる人は萬づにちがひ候、そのしるし其身 見え候、かくされぬ事にて候、其身の行口どかはり候、口に道を説き身に行なれば、道知りたるにてはなく候、道にかなふ事は古今成りがたきことに候。

氣 右に書きつけ候一つの理と申す物が動いて氣となり候、この氣もまたかたかなし、理と曰様なることながら、前の理と申すは例へば水の波なきときのごとく也、大海に水の満々ど混へたるやう也、又この氣は大波小波の起つて海のおもていそがはしく成りたるがごとく也、氣は形なれどもれきとして有るしるしには、氣が動けば風が吹く也、人の強く走りて氣が動けば息が強くなることく也、人の息は氣の動くせい也、形なければ何もなしと思ふはたれるか也、春は氣の動くはト

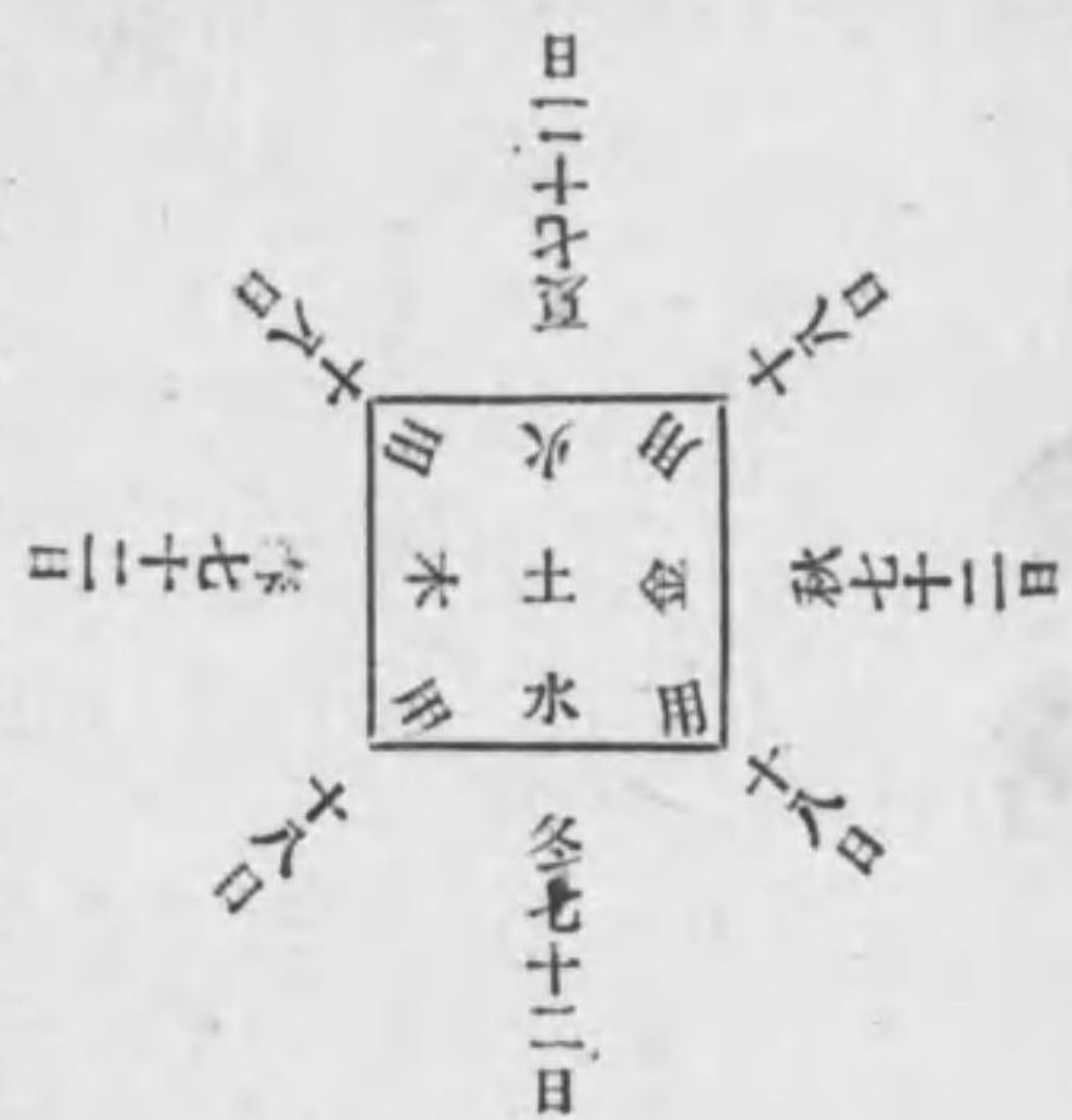
めなるゆゑに風は専ら春吹くものなり、春風刀のふとしと申す句もある也、然れば理は天地の間に
のびてみち／＼とて、上りも下りもせず、ちりもあつまりもせず、此氣はうごくにより上り下り、あ
つまりちり、さまざまに變ずるもの也、雨をふらし、風をおどろかし、火をれこし、水を生じ、か
みなりいかづち、いろ／＼のことなすは只一氣のなす所也、この氣の至らぬ所もなし、火のうち
水のそこ、金石土尾の裏へもどをる也、粟一粒のうちにもいり、大磐石の内へもどをり候、貝一つ
のうちにも満ち、桶甕のうちにもみち／＼と有る也、其るしには桶の内へもどをり候、貝一つ
つけて是を水のうへにふせて、まつすぐに水の内へかしくひに、桶の内へ水入らずして火が消ざる
は、是は桶の内にも氣が一ぱい満ちてあるゆゑに、うちか塞がりて水の入るべき所なし、桶のうち
はなにもなく空なれども氣のある證據なり、少しなりとも桶が蓋み傾きて明くかたあれば、明きたる
かたより氣が出づるによりて、水は氣と入りかはりて桶のうちへ水か入るはどに、火かきゆる也、是
氣の物にみちて水も入れざるしるし也、茶碗天目にてするもおなじ事也、かゝるあさきわらはへの
遊びなどのやうなる事に、大道のしるべとなること多し。

陰 右に書きつけ候一氣動いてしづまる時を陰と申す也。

陽 右にある陰の又動き出づる時を陰と申す也、一たび動き一たびは静りて、動くを陽とし静る

を陰として、いんやう／＼と互に動きしづまり候、陰陽と申すも一つの名はありて只一氣にて候、水
と波とのこゝろにて候、一理一氣陰陽五行との次第仕り候。

五行 木火土金水の五つ也、是を五行と申す也、右の陰陽を五つに割りたるものにて候、木と火
とは陽にて候、木をば春ととり、火をば夏にとり候、春は陽氣が動きはしめ候、陽は火にて候、木
のうち火を含みて、夏に至りて甚だのつき時を火と定め候、夏の火は木より生ずるゆゑに、春を
木とさため候、金水は陰にあり候、心はまづ春の陽氣はうごいてのぼる物也、火のせいはいはのぼるも
の也、春から夏の終りに至るまで陽氣はまはりて、はや氣が秋の下へくだるなり、花も春は梢に咲
きのぼれども、きはまれば根にかへる也、月日も天のなかばへのぼれば、はや西へ下るなり、川に
すむらをまで春なつは河上へひかふて居る、秋冬は河下へひかふなり、天地と付てまはるもの也、夏
の陽火漸く秋になりて下る時を金にとる也、金は重きものなり、おもきものは下るなり、陽は輕き
ものなるによりてのぼれり、陽も上るほどのぼりて老すれば、重くなりてはや下るなり、人の年寄
りて身のおもくなる位なり、故に秋を金にとる也、萬木黄ばみおちて根にかへり、氣沈むごきと冬
といひて水に取る、水は下りて低き所にたまる物なれば、一年のそこにて是を水も取る也、春は木
也、木も朽果つれば土となる程に春のはてに十八日土が司りて土用也、夏は火也、火も消えて灰に



づ、四つにて合せて七十二日、又木火金水何れも七十二日づゝよて合せて三百六十日、一年の内をこの五行にて司り候。

萬物 萬物申すに何れもこもり候、人々鳥獸草木虫けらに至るまで皆此中にこめて、かず／＼の物は一氣よりはトまり、わかれて陰陽となり、五行の木火土金水は和合して萬の物となり候、一類相續ぐとしてその一類々々があひついで、人はひとのるゐ、馬牛はむまうしのたぐひ、虫けらは虫け

なり、灰は土となる程に夏のはてに十八日土が司りて土用也、秋は金也、金もくさりて上へかへる程に秋のはてに十八日土が司りて土用也、冬は水也、水も乾きぬれば

あどは土なり、冬のはてに十八日土司りて土用也、木火金水の四つ皆土より生ずる也、木は勿論土より生ず、火も土より生じたる木から出づれば、是も火の根本土にあるなり、富士淺間何れも大山なぞ焼け候は土の中に火あるなり、金水は勿論土より出づるなり、かるかゆゑに土は四季にかわりたる物にて一年に四土用ある也、十八日

ら、鳥けだものはそのるゐ／＼あひついで生ずれども、此陰陽五行に外れたる事なく候、是を本として萬物ある事にて候、變通有り、萬古さわまらず。

右は天地の間にて理、氣、陰陽、五行、萬物、始終を付る。

人身之部

性 人の身に一つの性と申すもの候、此性と申すは何ぞといへば、天地の間に一つの理といふものありと、右にかき付け候ひし其理人の身より出て性といひかへたる物にて候、草の名も所によりてかわりけり難波の芦は伊勢の濱萩にて候、然れば此性は色もなく形もなく、空にして目に見えぬものにて候、見えぬとてひとへになき物にてはなく候、形なきゆゑに空と申し候、譬へば風は形なく目に見えぬとてなき物とはいはれず候、吹來れば松の梢をひやかしか候、此性も目に見えず形もなければども、人は此性動けば聲をいだし物をいひ、立居よろづのなす所、れし動き働さする事、皆此性よりなす也、此性は人に限らず鳥獸虫けらまでおなじく受けてかはらぬ物なり、指のさき、爪のはしまで、此性行渡りて有る物なり、少しなりとも此性のなき所は身がなくなてたぬ也、この身の主人なり、天にあつては理といひ、人にありては性といふ也。

心 右にかき付け候性と申すを譬へて申さば、鏡のごとくにて候、鏡に梅の花をさぐれば梅が

うつり、竹をさぐれば竹がうつる、かくの如く性に何なりとも向へば、向ふものがうつりて即心となるなり、向ふ物に此性が動くを心と申し候、天地の間にて理と申す其理のうぶを氣といひ、人の身にありて性と申し候、性のうぶを心と申す也、然れば天にありては氣といひ、人に有りては心といふとまつ心得らるべく候、是によりて易を天地の心と申すなり、易とは何ぞと申せば、天の一氣が陽とかはり陰とかはり候を易と名付け申し候、易はかはるとよみ申し候、然れば易と申すは一氣の異名にて候、其易を天地の心と申す時は氣が天地の心にて候、さあれば人の心を天地にありては氣と申し候、人にありては則心と申し候、天地にては理のうぶを氣と申し、人の身にありては性のうぶを心と申す也、理と性とは所によりて名かはり、氣と心とは無波の芦伊勢のはまをぎにて候、粗きと精しきと本末のかはりあるべし、粗くいへば氣を心ともいひて違ふべからず、細にいふときはかくべつなり。

氣 人の身に氣と申すもの心の外に在り、是は何ぞといへばまつ根本の元氣と申すもの候、臍の下にありておして見ればつくひにをとり候、氣の源これなり、この氣の扇ぐことふいがうの風のごとく也、この氣のふんぐに身の血が波の立つごとく、一寸づゝ先へはこびめぐり候、是を脈と申す也、此元氣が絶えてうごかねば則血こつてごゝまり脈絶えて人死するなり、是によつて人の死す

るを氣を失ふと申す也、この氣はむされ候とき臍の緒と申す物候、此臍の緒よゝ母の氣を子につたへ候、其氣をへその下にうけとめておき候、是が夜晝あふぎて血を廻して、身生きて居り申す也、この元氣盡れば命絶え候、この氣が身のうちを普くめぐり候、此氣が心をのせて右へなりと左へなりとも行くなり、この氣が動きてつよすぐれば、心がこの氣にひきつられて物を仕損ひ手にもちたる物を打落し、足にふむ物を踏外しつまつまごころびなどす也、心が氣に従へばあしく氣が心に従へばよし、譬へば氣は惡人なり心は善人なり、善人が惡人にひかるればあしく、惡人が善人にひかるればよし、此氣をよきほどにすること萬づの道、宜しきなり、此元氣動きて血めぐり、氣と血と正しければ性存す、性存すれば心正しく、然れば心は性より出で性は血氣の間より出で、血氣おのりて居る物なれば氣といひ、性といひ心といひ、さまゝに有れどもその源は一つと知るべし。

識 識と申すはまつ初めの一念よ、あかき物なりともしろき物なりとも、ちやくと見て赤いよ白いよと見付けたる時の初めの一念を識と申すなり、識はしろよみ申し候、ちやくと見て赤き白きと知つたばかりなり、いまだ分別の出ぬときなり、耳にきくも、鼻にかぐも、舌にあはふも、身にふるも同じ心持ちなり、まつ最初の一念なり、是よ、はじまりていろくの事起るなり、此識の次に

意 ぞ申すは、右に申す識にはや分別の出来たるを意ぞ申す也、初めちやくと赤き物を見て、赤きとばかり見たは初めの一ねん識あり、一ばらく見る内に分別が生じて、この赤きものは露岡か柘榴の花か、いやつゝの花と辨へ知る心を意とし申し候、見るよりおこりたるも、聞くよりおこりたるもいづれも同ト申す候、此意の心は當座々々に付て出せ、心にて吾身に備はりたる本心をなやましけがすもの也、此意の心にひかれて我本心をけがし害ふものなり、此意の心は吾本心と心術違は、盗人を捕へて吾子となしたるごとく也、わが本心がこの意にひき害はれぬやうにすること肝要也、この意は色にそみ香にめづる心なり。

情 是も心とよみなさけともよみ申す也、此情の字は時にあたり月花にむかひて、すきにし事を思いで動くをなさけと申す也、よろこびかなしみは時移り事去りて、よろこびかなしみ共にあともなくなれども、この身に八識と申すことの際、此第八識に残りてエりて月花に向ふとき、昔その人の知るをいはれは、身の一期は忘れがたきなど、かもふ事が、我身にかくうと出づる也、此動く心は性と申す也、物に譬へていは、根本の元氣は根也、臍の下にあり、性は竹なり、心は枝葉なり、元氣のりて居るなり、識は風か来たりて葉のうごくなり、意は葉かうごい一聲の生する也、その聲も風かさまれば止むなり然れども又時としてそよくとも聲のするは情の心也、本末終始何れと

も一物也。

性 より起り心に二つの差別ある事、水動いて浪となるがごとく性動いて心となるは、心が二つになるなり、性より生ずる心が性のごとくなれば、聖人の心なり、しかるを性にうむいて血氣は従へば此心悪人の心となる也、譬へば正路正直なる親のうみたる子が、親には似ずして隣りなる盗人の心に似るがごとく、心は性の子なり、性はすぐなるもの也、すぐなる性には似ずして曲り私なる血氣に、がふ也、性のすぐなるといふは、指を一つあぐれば一つとみるなり、五つあぐれば五つと見るなり、然れば性は正直なり、然るを血氣に従ひて指一つを二つなりと加すめ、よき人をあしきごひなすは皆血氣の私なり、性に従ふて性のごとくよきとよきとし悪きを悪きとするは、定規をあて、物を切るごとくあり、性が定規也、血氣に従ふは定規なしに物を切ることとく也、血氣にまかする程に直なること無し也。

機 此機大事の物なり、まづ機といふはたとへ物也、機は樞機とて家の戸にあるクル、といふ物なり、家よりクル、をわけて外へ人が出づるに、よき所へゆくもあしき所へ行くもこのクル、を明ける所にある也、こゝから別れて二道になる故なり、わが心は善にも移り悪にも移るものなり、善へやらんも悪へやらんも氣次第なり、この氣が心をよき所へやらんとあしき所へあらんと儘也、こ

の氣がゆるせばあしき所へ心か行くなり、此氣がまわりかためて惡所へやらねば善に行くなり、此故に氣を機にたとへて氣を機といふあり、心の善所惡所へ行く戸口なり、此戸より奥にては心は善にも惡にもつかぬなり、戸口の氣にて善心惡心かさだまるなり、譬へば小さき子が井のはたに居るを走り出て、井へつきはめんか引きのけんか、二つの善惡心が善につくか惡に付くかの定る所を機といふ也、クル、といふものは戸のうちあり、外からは見えぬ物なり、人の氣も内にあれども善惡の心か外へあらはるゝ物なり、この氣をよく見付けるか入る事也、鈍なものはこの機を得ざる也、さりながら犬さへ人の機をよく見る也、犬をよそろしかる機あればそのまゝおどす也、何となき人をば知らぬふりにて通すなり、又打つか逐ふかすべき機があればやがて見て立退くなり、人として機を見ざるは愚なり、又つと至りたる人の機は、微機とていかにもかすかにして一切人に見られぬなり、名人の位也、天下にもよ、治まらん機亂れん機がある也、此機は善惡治亂の機なり、廣く天下の人の上にて見るべし、さりながら天下の機は一人の機なり、一人の機も天下にあらはるなり然る間一人の心は千萬人の心といふ先言あり、まことに天下をしろしめす心はやすからぬなり、よき時は一人の心が天下にあらはれ、あしき時は一人の心天下にあらはるべし、かたしかたし、易きはかすならぬ身なり。

心

機善惡此機大事也、善へ行かんも愛にあるなり、心か外へ出て善をなさんも惡をなさんこの機にあり、此機に善も惡も治らんも知れんも、兵法の勝ちも負けも、身を立てるも身をたさんも手をあけ手をひらき、太刀をあげ身をひらき、飛びあがり走りかゝり、さまゝのはたらきも此機より出て外にはたらくものなり、大機大用とはこの事也、かやうのだんゝをさはめずしてはならん機を忘れきつて何事も我ものになる位、又至極の所なり、是を機を忘るゝと申す也、忘るゝ機とよむなり、今こゝもどの田ふ群れ居る鴈白鳥などが、人かそばを通れども立たんごおもふ事をわすれてゐるなり、これらを忘機と申すなり、人におそるゝ義をわすれたるなり。

神

神の字を伸なりと注をいたし候、のびたるを神と申す也、のぶるとは身のうちにのびひろがり、手足のゆび爪のはしまでいたらぬ所もなく、いたりのびてあるを神と云ふ也、この神はさて何物ぞごんかく工夫して是よと見届けて、おもひさだむる事なれば、言葉に説き紙にかき付け候を見申す分にては我ものになり申さず候、譬へば甘きものをあまきと言葉にどき紙にかき付けんは、あまき道理がどくどしられ候、直にあまき物を口に入るゝ時は、説かずして甘きをしるがどくどく工夫から知る事にて候、それによりて禪宗は不立文字と申して、文字をたてず、教外別傳とて、教の外の別の傳へと申し候、水を繪にかきても冷かならず、火を繪にかきても熱からず、水はかやう

なるもの火はかやうなるものと知るばかりは知れども、今一だんのひやゝかなるわたゝかなるといふ事は、直に火水にふれざれば知れぬごとく、神ぞ心ぞと申すわけも大方かやうにかき付け申し候へはしれ申し候へども、とくと知れ申さぬ所あるべく候、それは面談にすべく候、神との此事よとさとり候はねば會得かりがたきものにて候、先づ人の身に元氣と申すもの候を右にくはしくかき付け申し候、この元氣動き申すゆゑにつく息が口へ出で申し候、つく息ばかりにて引く息なければ人死するなり、又引く息ばかりにてもつく息なければ死する也、この元氣がつくいき引く息ともに入出るゝなり、その氣に血がめぐり候、氣血の二つを家として、此神この身にあつてこの身の主人なり、或は性或は心にて、その別ち少一づゝかはり有りといへども、源一つにて候、あさきたとへなれども道にあらざる事天下に一つもなし、理は同じ、譬へば黒き砂糖より白き砂糖が出で候、白砂糖より水が出で候、譬へば黒きは氣血、白きは性なり、氷は神なり、又金銀銅鐵の四種の金、根本はたゞ一種なり、そゝひ出し、吹きぬきて其極上なるもの黄金なり、その次は銀、その次は銅、その次は鐵なり、銀銅の内にもよく吹けば黄金あり、鐵の内にも銀あり、金のかすゝおほけれども皆一種の物なり、根本を正せば土也、万物一理と申してさまゝの形あらはれ候へども陰陽の外へ出でず、この神は黄金のごとく也、この神内にたつて外にいろゝの妙をなす也。

佛神

同躰異名也

躰は同じ事也

人毎の身の内に神あり、愚痴の人は此神を情識にてくらまし、物毎の理に關くゝて物毎にとゞまり屈してのびず、生きて居るとき物ごとくに心がとゞまりて聞ければ死して猶暗し、是を鬼といふ、明君聖王其外道に明なる人の果て給ひたるを神と申し候、神は伸なりとてのびひろがりて一所にとゞまらず、水の大海にのびひろがりて通して障りなきとて候、又鬼は屈なりとて愚痴のたましひはくゞまり、物にとゞまりて本神おかへらずして物によりつくなり、是は鬼道と申す也、又鬼より人へかへる也、神にかへらざるなり、明君聖王道明なる人の魂をば祭りいはひて明神と申す也、いきてましませば明君聖王とあふぎ、果て給へば明神と申す也、内にあると外にあるとのかわりにて候内にて外にて神は同じとて候、五尺の身の内にて神明なり、天地を宮として天地にありてもひろがらず、五尺の身の内にてませばからず、目に入る虫の躰も神はまします、それとてもせばかり、宮室殿を高くひろくしても、一尺二尺にしてもれなト、然ればよく得道したる人は一間の家をませばしと思はず、二十間にすまても住みあまさず、是神の大小にかゝはらざるが如し、心がひろければ家のちいささをさらはず、心がひろければ家をも心の内へいるゝ也、家に心をはせば苦しむ也。

神 神は正直の首にやどると申し候は、餘所より必ず神のやうがうありてやどり給ふにあらす、我心正直にして明なる時はわが心即神にて候、是を正直の首にやどると申す也、神はすまじしすみたるもの也、人の心にくねりてにあり候、正直ならねば神はありながらかくれ申し候間、かみくらくとも正直なる時は心のみづすみ候、此時正直のかうべにやどると申す儀に候、にありたる水にも月のかげはさせども、月かけはあらはれぬとおなじ事に候、又空の雲霧もにありにて候、雲霧があれ月はありながらくらく候、此比譬のごとく心がにこり候へばかみがくらくなり、よろづのしわざくらく候なり、神も佛もさざれば我也、道の明なる人は生きながら佛なり、明君聖王は生きながら神にて候間、死しませし／＼も神なり、いきて道に闇きは死してもくらくさゆえに、悪人の魂をは鬼と申す也、神に二つある事、一には明君聖王の生きては道あきらかにして、國を治め民を安くし天下のもの、父母とおもひたてまつり、死し給ひたるをかみにあがめ申し候、是は明神靈神也、殊に官位高き御神なるべし、一に邪神と申すべきは、生きて人にうらみ深く慣つよく、あくしんなどある人、その神のびすして物によりつき人に取りつき、つかれたる人は男女によらず物に狂ひ、人をなやましわざわひおほきによりて、この怒をやめんとて神にいはひ官位などを與へられて、是に満足していかりをやめ給ふ事などあり、これらは邪神にて候、酒の酔狂人などをたらし候ごどくに

て候、明君聖王などの上にはかやうなるひけうなどは生きても死してもなく候間、まことの御神にはかやうの事もなく候、又神はさやうにもなく候へども、わが氣から申しなして神にふそくをうけ申すことも御座候、ひとへに人のいひなしとばかり心得たるものしく也、北野の神、時平の大臣の讒言によりてあら人神となり、さま／＼あれ給ひしゆえに、天神とあがめ給ひてより怒をやめられ候是等も邪神たるべく候、道ある人などがかやうに人に怨深くあくしんをおこし、其あだを報せんなど、いふ心は小人にて候、さりながら邪を正にひるかへされ候へば、神は本にかへり申し候間明神にても天神にても候、そのときの怒も必ず菅家の怒にておこして、時の氣のへんたるへく候を神と申しなすときはそれになり申し候、又まことの神の怒にてもこれあるべく也、松山の神の怒解けたまはすしてあれ給ひし也、西行法師詣で、

いにしへの玉のうてなのうちとて

なからむのちは何にかはせむ

とよみしかば、そのうちあれ給はぬとなり、いかにも何ぞによりてとげぬればあどは氷の解けたる如くに候、其怒がにおりくねりにて候間、かみはかくれ給ひて明神にてはなく邪神惡神にて候、いかりはとげ候へばまことの神あらはれ候、住吉の明神の託宣に我にさぞくなし、ぶつをもつてきぞく

とす、これらは真に奇特なり、何事ぞ一くせあらば奇特にてはなし、さぞくなく何事もあく無事なるが奇特なり、人もまとの道に至りたる人は、なにの奇特もなくいかにもふじなものなり、神變化に奇特ありさうなるきよなる人は、さまでしかるべき人にはあらず、かみには奇特あるものにてはなし、きつたる事さへわれさどくなしと住吉は託宣し給ふなり、われど大悪事くわたて、悪行身にあまりなんぎ身にかゝる時、かみをたのみて其どがをちんじ、首をきる刀を折らし命を助け給ふやうなるさどくはなきと也、うこそ我に奇特なしとたくせんしたまふなり、唯正路正直なるものを守らんと神はのべ、正しき正路にて道にかなひ心明なれば、わが身即明神なり、わが身明神なればわか身を守り給ふほどに、神を外にたのますどもあしき事は有るまじきゆゑに、正直のものを守らんと也、正直正路にさへあらば神の守り給ふ道理なり、北野の神詠に

こゝろだにまことのみちにかなひなば

いのらずとてもかみやまもらむ

と、此歌のごとくなり、然れば神をわがめ宮室殿をたつといふ事も、いらぬものとやいふべし、神を神とし佛を佛とする事は、其道理ある事也、わが悪事としてそのどがをちんじ給はずば、いらぬものとおもふは無理也、かみはどけへあがむる筋ありてあがむるもの也、だん／＼御合點あるべ

く候、よろづの事すみやかに會得ならぬもの也。

正直 と云ふ事、人の物をかくしどらず偽言はかぬばかりを正直とは申されぬ也、正はどつこにも物の一ばいありて至らぬ所もなきを正と申す也、偏と申すは一方にありて一方には物のなく、片ゆきのしたるを偏と申し候、然れば正と申すは九まがりの具に入れても水は至らん所もなく至るもの也、其如くに心か片ゆきせずしてひおき偏執と云ふ事もなく、心に私あれば私の所へ心かはや片ゆきするほどに、心の身一ばいこのひろがりて有るを正と申す也、直とは右へもかたよらず、左へもよらず、少しなりとも歪みたる所あれば、傍へよるほどに、糸を引きたるごとくなる心を直と申す也、正は横、直は堅を申したることばにて候、堅にも横にも片ゆきのなき心を正直と申す也、直も正、堅と横のかはりにてかたゆかぬといふ事にて候、心がかくのごとく候へば則此心が神に候間神は正直のかうべにやどり給ふと申すにて候、この心が生きてかくのごとくなれば生きながら神にて候、死して後にも神を社壇宮の内へいはひこめて尊み申す也、今東照權現とわがめ申すごとくにて候也。

鎌倉之記

宮柱ふとしきたて、萬代に今ぞ榮えん鎌倉の里と聞えしは、昔年三浦の一黨頼朝に思付きりして、北條より此里へ迎ひ入れ奉りてより、威光めでたうし。天下を掌のうちに治め給ひけるが、鳩が峯遠く鶴か岡移ります神垣も、宮柱いやましに立添ひ萬代の祝ひなるべし、もとより神々佛は水波の隔一体異名なれば、本地をあらはせば西方の化主目の本に跡を給ふ神佛の如し、されは瑞垣も一たてなく神の宮寺には、東方の化主醫王善槌を安置し、夕曉の鐘の響無事の夢をいどろかし、四方かためどて四隅に四ヶ寺門を創め、國泰民安の禱をつとめ、佛の威儀をあらはし衆生を利益し給ふ、我禪法流布の時やいたりけん、後鳥羽の建久二年に明庵榮西禪師大宋より歸り、御土門建仁に洛陽河東に禪寺を立て、顯密を兼ねふかる、順徳院の建保三年に鎌倉實朝のとき、壽福寺を立てしが是五山のその一なり、總べて上をうやまひ下をめぐみ、現當をかねつとめられけれ共、夙目のつむ所や薄かりけん、現在の果報家も短くして、獅子身中の虫とかや、身の中にして身を破ることとなり、實

朝はやく公曉のために失はれ給ひて、家たしろきぬれど、萬代のちかひや残りけん、後の九代鎌倉どかしつかれ、天下は一人の天下にあらず、道ありて世をしつめ給ふ人の天下なれば、家は平にかはれども、洪基をひらき給ふは源なり、中垣の隔をいふは人情なり、然るに此家も數代重ぬれば、上をうやまひ下をめぐむ心も薄らき、侈に家かたふきて、其後尊氏公天下の武將として一統の代となりて、都には長男義詮皇國を守護し給ふ、關東をば二男基氏に預け給ひて、此里はごこしなへに榮えけらし、前代の形見とて世に残るものは神社佛閣なり、平時頼建長寺をばしむ、五山の第一なり大覺禪師を開山とす、此禪師の字は蘭溪、諱は道隆、大宋より後嵯峨の寛元の四年に來朝し、蜀の人なり、昔年千光國師築西建保年中に入滅したまふ、我世を去りて後三十三年に來朝の僧あるべし我三十三年の拈香の師に請すべし、是を布施しまゐらせよて、藕紫の袈裟を殘されけり、年月移りて三十三年の忌を、筑前國羽堅聖福寺にしていどなみけるに、來朝の僧もなく識らぬなりといひける所に、半口の時分に太宰府に唐船入りぬる、いかなる人や渡りけると尋ねければ、大覺禪師此船にて來朝なり、即拈香に請しける、拈香の語は建仁録に見えたり、

蜀地雲高 扶桑水快 前身後身 兩彩一賽

千光扶桑の人なり、水快といひ千光をいへり、大覺は蜀の産也、雲高といひ大覺自らいへり、自贊の語

なり前身といひ千光をいひ、後身といひ大覺自らいへるなり、合一人、然れば兩彩一賽といへるなり、藕紫の袈裟今に大覺禪師の塔西來院に在り、千光卅三年に大覺卅三年にして寛元四年に來朝し給ふ昔年千光の遺言、大覺の來朝、千光寂卅三年、大覺の年卅三、誠一符を合すが如し、又來朝後三十三年ありて、後宇多の弘安元年に壽六十六にて入滅ありき。

瑞鳳山圓覺寺は、時頼弘長三年に興と給ふ、ある山大覺禪師時頼遊山のをり、禪師のいはいはく、この地は叢林相應の所なり建立あるべしと、時頼時節をうつすべからずとて、折ふ一田かへしをる耕夫の鋤をとりて、時頼一下し給ふ、同じて大覺鋤を取りて一下し給ひ、其どころに草を結び給ふ、其後弘安元年に大覺入滅ありて、同五年癸丑の年に時宗立ておさめらる、時に詮藏主英典座兩僧を使として宋に渡され、住持を請せらる、其帖に曰く、

時宗留意宗乘積有年序建營梵苑安止緇流但時宗每憶樹有其根水在其源是以欲請宋朝名勝助行此道
願詮英二兄大覺之弟子莫禪鯨波險阻誘引俊傑禪伯飯來本國爲望而已不宣

弘安元年戊寅十二月廿二日

詮藏司禪師 英典座禪師

時宗和尙

兩僧是に仍りて宋に入る、同二年の夏佛光禪師請を受けて來朝し給ふ、即圓覺寺の開山祖是なり、圓

滿常照國師號諱は祖元、字は子元、自ら無字と號せらる、第三龜谷山壽福寺は實朝の時建立、時代も先きりけれども十刹の位にてあらじ、のちに五山に任せらる、故に、龍倉五山の第三に列れり、千光國師開山祖たり、塔を逍遙院といふ、第四淨智寺は龜山院の文應元年に來朝ありし、徑山無準の法嗣元庵禪師開山祖たり、師檀の縁や淺かりけん、のち四年に時頼卒して後、禪師は志ありて宋に歸り給ふ、附法の弟子心齋禪師南淵宏海和尚年わかきを以て、宋徑山石溪和尚の法嗣佛源師を開山に定めおき給ふ、元庵を開山とせざるは故ありとぞ、第五淨妙寺山を稻荷といふ、千光の法嗣退耕行承禪師開山たり、塔を光明院といふ、其外十刹諸山の禪院、代々の新營敷しらず、來朝の諸師歸朝の列、皆此里に跡を残し給ふ、其昔延暦のころ、和州大安寺行表和尚示寂、其光神宗派の禪師來朝あり、即行表大安寺の禪院を立つ、行表空海最澄寺等參禪ありし其禪は宗派斷絶す、兩南宗の禪日本に傳りてより、此里は誠は禪師の源なり、おのが十二世の先師圓通大應國師も、龜山院の文安三年の秋に歸朝ありて、建長寺に住持し給ふ、此間筑前の興徳寺、同國横岳山崇福寺、京師の高壽寺に住し給ふ、相合せて四會の縁あり、後宇多院其道をしたひ給ひて、國師遷化の後城西に龍翔寺を創草し給ひて、師の遺像を安置し跡今に残れり、其外城南新里妙勝寺所々に跡を残し、終に建長寺に入滅を示し給ひて天源庵といふあり、天筆を染め給ひて塔の額に普光と賜はる、一度かしこに

行いて一番を焼いて報恩の志をどげ、其外諸祖の塔焼香順禮せばやとて、寛永十年癸酉の仲冬初に江府を出づれば、旅より旅に立つ衣手さむき曉、左は江水渡りして白く、右に向へば富士の根白し、のめも明行く空に村寺鐘を聞きて、

曉出江城對士峰

路邊水白照襄客

往人馬上知繼夢

道者緩敲村寺鐘

旅人の朝立て行馬のうへに見つゝや宿に残しつる夢またさめぬ此世の夢にゆめの世を見ならはしともしらてはかなき旅衣かたたく袖に入夢はふる里人のよるの心か旅枕かりねの夢は夢の世を見ならはしともしらてはかなき明行海道をふるに袖も引ちさらす上り下りの人しるしらす打過く行人いづれか世に残りともまるべき夢に逢ひ夢に別れいつれをうつとや行とまるべき終のやどりを知る人やある本覺の都とやらんも名には聞きつらん覺東なし

東往西還見幾人

人々相遇孰相親

親疎不問草口露

露晚風前夢裡身

いつくよりいつくに通ふ道なれば

この世を旅のやどといふらん

どかゝる事を聞くも身の行衛思ふ人そまればなる、

どまる身もゆくも此世の旅ならば

終のやどりを人にしらせよ

どまる身もゆくも此世の旅ならば

終のやどりはいつこならまし

ど口の内につふやさなから行くに、かしこの里のこたなより道に付て行末こそ、金澤へ入る道なればといふ、その郷の名をとへばかたひらの里と聞て、

地白なる霜のあしたに肌寒く

夏そ来てみんかたひらのさど

ど俳借して谷水の道をへて行く、やう／＼にして高き所にのぼれば、ふるき寺など見付てのかれたき心もやぶれぬ、魂傷山俵深愁破崖寺石と、杜工部か作りし詩を思ひ出しぬ、又一坂をのぼれば一本の松あり、おひのぼしたる正木のかつらは、つみくる人もまれなるよ、山男ひとり爪木取る、これにどへば能口堂の松はトといふに、立寄りて金澤を見おろせば詞もな、實やこの入海は古より唐の西湖ともてなしけると聞くもいつはりならず、追門の明神とて入海にさし出たる山あり、古

木くろみ麓に橋あり、橋の下より遠さし入ぬれば、はるか遠き山のいりまで湖水となり、遠引さぬれば水鳥も陸にまよふにころ、水陸の景色もあした夕にかはり、金岡も筆及はさりしとなり、来て見る今は冬枯の野鳥か崎、としふるは秋の千草の色もなく、水むすひつゝ、すみとるをりにふれてや名付けん、名は夏島になつともなし、鳥根にあまの小屋見えて網をほしたる夕附日、漁村の口一是なり、そめてかはかぬ筆の跡、硯の海のうるひかや、雨に來てまし笠島は、人の國なる瀟湘の夜のこゝろもしられけり、目路とほけれど富士の根を心によせて、またふらぬ江天の雪と打なむ、浪立かへる市の聲、風まち出ぬ沖つ舟、烟寺の鐘もひらき來ぬ、洞庭とても餘所ならず、月の秋こそしのはるれ、水のそこなる影を見て、臂とやのふる猿島は、身のおろかなるなけきより、おゝくけるな鳥帽千鳥、蛭の子どものかり残す沖のちちめか龜の音、あら磯浪に釘うたせ、朝夕はやさしぬらん、箱崎なりとおしふるは、松さへしけりあひにあふ、しるしの箱をおさめつゝ、西を守るど聞きつるに東の海の底ふかき、神の心ぞたうどかりける、

しま／＼や幾浦かけて大和歌

いかになかめん三十一文字

かくて爰に日をくらしなんもいかならんとて、山を下り里に入りぬれば、都日比の山の端に續月か

すかにして、鐘ひき海宵の底にこたへ、岡のやかたは浪にうつる龍の都に入りぬるやと覺つかなし海士のいさををたよりに、宿どひて一夜をあかし、まづ寺に詣りけるよ、本堂一字あり諸堂みな跡はかりたり、五重の塔も一重残りぬ、井金澤川稱名寺にいつの年にか、龜山院の御願所と號せらる、此所は一切在家をましへす、今の在家は皆當寺境内なり、殺生禁斷の浦なりし、漁人など、申すもの一人もなし、時うつり國一度亂れ、寺廢亡し、再ひいにしへにちへる事なし、庄園悉く落ちて武家押領の地となり、房跡は漁の栖家となり、院々は跡なく海士の小屋敷そひ、當寺畧口の下郎ごもは武家の手につき、門外に有りながら都ておのれらが顔色を窺ふありさもおもひやるべし、佛前の燈はほそく、朝夕の燈もたぬかちなりと、寺僧達三人かたられけるに、袖をうるはしつ、昔船を遣して一切經をも取渡し、其外俗之外典ども世にたくひなき本ども、金澤文庫と書付けあるは當寺より紛失したるなりと語る、經藏もこぼれぬれば本堂に一切經をこめおくよしなり、寺の致境を見めくらしぬれば、山かこみ古木そびえたちて、松杉の隙も秋よりけなる紅葉のは、めきて、青地なる錦をばりたらんはかゝるへきかなといひあへり、

何とた、空にしぐれのふりはけて

みつる楓にまどるまつ杉

堂前の池には蓮葉みだれ冬の水ひやくかに、伽藍の跡どもは野菜のうねとなり、一の室といへるは簀か軒かたふきて、めぐりの房々もひへはたりて人の音なひもせず、おもへは却て寂寥無人聲の扉をどち、禪觀法の床をしめたるに似たり、かくて佛法零落の時節いかなる人か世に出で給ひ、絶えたるをつぎすたれたるを起し給はんか、慧尊三會の曉をたのひばかりなる世に生れて、人のどきめささかえ、何事をなすもこゝろにまかせ奉らずといふ事なし、いきはひなびさぬること幾世の因縁をつみてか、果報のかゝる事にはいたるべきぞや、只人と生るゝのみさへかたき事なり、たどひ天つそらより針をねろして口海原の底なる栗をさゝんどし、浮木をもとめる龜の如し、況んやかゝるされなる果報に生れあひて、三ツは四ツはの殿づくり、軒に軒をならへ、さき草のさきくいやましに榮えん世は、濱の眞砂を數々かぞへどもなほ足らず、祈にはいつか世も下より上をたしなへてうどからぬ心からもいにしへの跡を見れば、淺茅か露にやせる月は夜なくかはらず、何事もむかしは蓬かそまに引きかへたるを見るにも残るは名なり、宮寺などはいとなみしかたばかりも世はちままりて、今の世までも是は誰のはじめて草を結び置き給ふ、これは誰が絶えたるを重ねてどりおこし給ひて、今迄かくなんと所の者の口に残りてつたへ申すを、其代の人形見と見る、是を思へは自の栖居は、いかにもして形見を神社佛閣に残さまほしき事なり、此世にあだながらも残る名

は朽ちずして傳へ、後の世は佛果の縁ならん、然るを時の人はかゝる事ばかりそめにも聞きては、かたはらいたき事にいひなせども、かゝる世々の君ははかり、御惠ある人も信じ來りたる道なれば、降りたる世の淺き智恵にて、此法をそしりやふりがたし、破るはやすく立つるはかたし、やすきは道に遠し、道はいたりかたきものなり、百日かゝりていとなみし家も、破るは一日の中にあり何事もかゝる理と思ふへき也、此寺に來て見します笠の軒も落し、時雨も露にふりそふ有様ながら、農鐘夕梵の聲のみかつくもたえぬはかり、如此法の今少し残りたるしとぞ聞えし。

山言金澤寺稱名

關谷農鐘夕梵聲

時去池蓮餘敗葉

院荒籬菊尚殘英

狹風松竹留秋見

吟雨芭蕉入夜鳴

尾上峰宇廊下海

登臨終日隔人晴

池のほとりに一木の楓樹あり、いにしへ爲相卿

いかにしてこの一本の時雨らん

山にさきたつ庭のみぢ葉

とよみ給ひしより、此木時雨に染ぬと 青葉の紅葉と申しならはしけるよし語りぬ、むかしのぬし

に手向とて、世々にふるその言の葉のしくれより、染ぬる色はふかきもみぢは、二日めも爰をこりがたくてかなたこなた見ゆりて、追門の明神に詣でけるに、千歳の古木雲をしのき、回岩宮をつゝみたる山のいきほひ、實に巨靈神の手を延べでいつくより此山をうつしけんどあやしき斗なりいかかる御神すと尋ねければ、三島の大明神、本地は大通知勝佛、伊豆と御一体なると神職の答へられける、まうでつる昔を今に思ひ、伊豆の三島と同一神垣の内。

法身妙應本無方

三島不阻一封疆

山色極波顯無跡

朝陽出海是和光

社の前は島をつき出して辨才天の社あり、島へは第一第二の橋あり、島のめぐり古木浦風になびきよる波木末をあらふ、一根清浄なる時六根どもに清し、家人のかうべに神やぞらざらめや、頼しき予覺ゆ。

波風もこゝろもなきぬ大海を

さなから神の廣前に見て

宿のあるト舟もよひして自ら艦をわけて汀を出るに、萩も過行く野邊なれば、身のあきを思ひあはせて哀なり

野島の草のふゆかれの色
夏しまは名のみなる、時は冬なれば、

三〇〇にもふるーら雪のたまらぬは
これなつ島の名にや消らん

笠島に來りて、

かさ島や來てとふ里のゆふしぐれ
ぬれぬやどかす人し有ぞや

鳥帽子島といへるは、こゝでもそれと一るべし、

あさ夕に波よせ來ぬるまほし島
奥よりあらかさかふりやこれ

箱崎といふあり、

神の守る西とひがしとかはれども
こゝもしたしの箱崎のまつ

あくれば三日鎌倉へおもむくに、一坂すぐれば里あり、こゝなんむつらの浦かごとへは、それとこ

たふ、海人の子どもの遊みを見て、

四つ五つむつらの浦のあまの子の
あうふは沙の遠干潟かな

あまのすみ家のあはれを見て、

浪あらすむつらの浦の蟹の小屋
かこふとするもまはらなりけり

山路十町ばかり行きて、山の高みをたゞちに切りとはしたる道を入ぬれば、鎌倉山を見る岸べそびぬたり、是にならびて松の重み、是を右大將の御殿のあととなりとて、民今にたねものをまかぬとたり、徳は尊きものはなし、大將偏に威光口徳ましまさずば、いかでか今の世までかくあらん、桀紂は古の人主なれども威有りて徳なれば、今の世の人を桀紂にたとへればいかる、夷齊は古の餓夫なれども賢にして道こそんすれば、今の人を夷齊にたとふれば悦ぶ、徳をはねがふべきなりと思ひつゝ、過行けば、やう／＼日も山のはに入相ばかりと鎌倉の里につく、爰を雪の下といふ、折からあひにあふ宿なり。

冬されに宿とひよれば折にあふ

雪の下てふ名さへあやしき

やどりは瑞垣ちかきところなり、くれがたより社頭にきやかなり、いかに問へば、今日は霜月に入りて卯日なり、神拜有るよし聞ゆ、幸なりとて夜に入りて社参す、拜殿には神樂始まり、五人のをこの八乙女戸拍子の豊松にひき、笛鼓の音肝にめいす、宮々の御燈のかけほのかにして、社参の人々の足音ばかりは聞えて、其人はさだかに見えす、燈ちかくなれば袖の行かひ色めくあり様、夜の神事なぞ殊にすぐれたるいなし、石のきだはし高きほりて本社に詣でければ、神主若座し供人左右になみ居たり、御器めくり三献過ぎて樂初まり、左座より十人出で舞ふ、入音のひき内陣も感動し、鶴がをかの松風千とせの聲をそへ、鎌倉山も万歳とよほふ、神事終り宿に歸り、明くれば四日なり、冬の日は頼みがたし、木枯のかせやしけりけん、時雨の雪やきおひけん、先いさどほき方をさはめて其指す所の寺に行へをしめんとて、五山の寺々をおくにひめをき、江の島におもむく道すがら浦山かけてけしきも所々にかはり、目をこらす所多し、金銅の大佛新長谷寺をも、歸るさを心お契りてたへちに行くに濱邊ちかき山本の一村をも坂の下といふ、名もくもりなく底すみたる星月夜の井にかけみれば、身のおとろへ爰も老の坂上と越行けば極樂寺といふ津寺ありていひつゝ門に入りてみれば、極樂といふ名にも似ぬ有さま、佛は臂をちくしかたふき、堂はいとやぶれ

むなきたをみからくべき寺僧の力もなく、あらき繩もてまどひ立てるは、これや七寶正眞のまき柱ならん、極樂寺のかしる零落を見て、地獄門のさか行く事そらにしられけり、しかあれど去人のいへるは、地獄極樂の境もささて遠しとも聞えず、方寸の胸の中一心の上よりみづからつくり出る事なれば、時の間に地獄も消れて天堂と成るべし、地獄天堂皆爲淨土とさく時は、此寺のめぐりにしげき梢をば七その寶樹とも呼、囀る鳥の聲々は實迦衆鳥の和雅とも聞き、或は大身滿虛空中と聞く時は、佛はまのあたり億土も遠からず、去此不遠と説けり、是に迷へる衆生にかりの姿を方便して、己心の覺悟を表すれば、實に利益無邊なり、誰も心をはふらすべからず法は機によつて修すべし、樂みをさはむる寺の内ども、世のうき事やはらざるらん。

極樂寺前地獄門

人々具足業障根

野曉幾回春風草

迅死受生原上魂

濱の道もはるくと行きて、腰掛に舟をかり島へはたり、つづらをりなる坂をのぼり、一坂くに海の面を木の間より見おろしたるけしきいふ方なし、丹青も筆及びがたしとぞ覺る、來て見るわれも餘所のながめとやららん。

見盡瀟湘景乗船入畫圖とは、かゝる事をやいひつらん。

詠つゝわれをもこめてゑのしきを

筆のあとにや人のとむへき

下□□際上登空 一鳴名高妙入京

皷景何知自成景 人乘舟入畫圖中

於□島和天祐和尚之韻

西湖□地是君山 江島眺望天水間

潮滿則舟潮落步 波心一路有人還

ほのくかへるさ俚して島をばみれ、もと來し道に向ふ、流を片瀬川といふ。

思へども思はぬ人のかたせ川

わたらばすそやぬれ増りけん

星月夜の井を過るに、夕日もかたふけば、

雲はれて道はまよはじ星月夜

かまくら山は名のみなりけり

新長谷寺に詣て

大和路やうつせはこゝに初瀬寺

尾上の鐘のよそならぬこそ

あま小ふね伯瀬とよみしは、實にこゝなるべし、海山かけてながめひとかたならぬどころなり、く
れて雪の下のやどりにかへり、五山の機体とも處の者に問ふ、建長寺圓覺寺はならびの山なり、淨
知寺もむかふの山也、壽福寺淨妙寺は各別の所なりとぞ、こゝの道すがらを委しく伺ひ、燒香順禮
の爲なれば香の資などとりしたため、威儀をこゝのへて、先建長寺にむかふ、左の偏門には海東法
窟と云ふ額あり、右の偏門には天下禪林と云ふ額あり、正門には巨福山といふ額あり、山門には西
口の筆にて巨福山建長興禪寺と二行に額あり、中央の爐は石あり、圍壞れて今なく、仰いて見れば
かりお板をしき、其上に觀音の像を安置す、だゝちに佛殿にむかふ、ゆくての右を嵩山といふ、古
木からをしき、口盤の松に秋の色をまじへ、折からの山のはえいはんかたなし、開山塔西來院は此
山陰にり、總門に嵩山の額あり、佛光禪師の筆なり、方丈あり、庫院あり、照堂よけ圓鑑と云ふ額
あり、圓鑑と打ちたる額に故あり、開山隨身の鑑あり、入滅のきわに是を志深き隨傳の僧に授け玉
ふ、開山入滅の後時頼師をしたひ給ひ、愁歎なゝめならず、或夜師夢に時頼に向つて宣ふ、其か
世隨身の鑑をしめしかの僧に授けぬ、我をしたふ心あらば此鑑を見給へ、其鑑に我姿を残すなりと

いめし給ふ、夜明けて不思議の思をなし、しかくの名付けたる僧やあると尋ね給ひければ、さし
と申、鑑や持らたるといひ給へば、夢のうち師のしめしに違はず、さらば其かゝみをとて取り
あげ、時頼常に此鑑を見給ひ師をしたひ給ふ、鑑の金をみがきたるに、観音の像と見えたる金の紋
あり、是を我妻を鑑にのこすと師のしめし給ひしは、實に大悲の示現有りて碎き佛の身をあらはし
世をすくひ給ふなるべし、時頼卒して後開山塔ふ籠め給ふ、さてこそ圓鑑と額を書きたると寺僧語
られし、鑑の体は爐の形なるが、爐の丸みを鑑の面に見せて、みがきたる金の紋に大悲の姿ほのか
にありて遠目に見るが如し、開山焼香をとけ、みつからの先師大應圓師の塔天源庵に入りぬる道す
がら、よのつねならず其むかし我山の開山祖朝參普請して、此道を行還り給ふこと、しらぬむかし
を今見るやうに覺えてあはれなり、爰に雲關のあととて石に切付けたる柱のあとあり、蓋過雲關無
舊洛と頌せられし、我祖の勺裏雲關を過ぎて普光の塔にいり、香をたきて慈顔を仰ぎ拜す、諸師の
塔どものこらず順禮し、次の日は圓覺寺に入り佛光禪師を拜す、どこ常ならず仙境なり、かくあ
らんと覺ふ塔様誠勝れたり、慈眼うるはしく生る人に向ふが如くあり、いかなる屈強の人も涙を
もよほす斗り也、野鳥來つて肩になれ、白龍袈裟に現すと傳へしは、在所の有さまをうつし、倚子
に白き鳩のとまり、袈裟に白瀧をささみし、實や谷虛して山れのづからこたへん、無心にして物よ

く感ず、芭蕉無耳雷を聞き、磁石無心にして鐵をてんず、無心の力いくばくぞや、菩提心さへ胸に
残らば煩惱なるべし、まいて煩惱を胸におかみや、煩惱即菩提といへるは、一坂越らん人の眼より
いへる言葉なり、已眼明かならずて達人の言葉をもて来て、わが物といへる類世におほし、玉
はもと石なれどみがされは光なし、みがざる石をさして玉なりといはんや、玉といは玉なる
べし、ひかりなくば何を玉の如くせんと達人のいへる心は、石皆玉なりなど書きて、光をさざる
人皆はだいなり、修して何に菩提の光をはなるべとなり、又修もなく證もなしといへるは、修證
得の人の言葉なり、祖師先徳に花實をなはりたりとも今の世にはあな花のみ咲いて實なし、言葉を
とる斗りなり甘といふ文字をなめたりとも、口あまかるべからず、火と唱へたりとて口あつかるべ
からず、口のほどりに有る佛法頼もしからず、何事をも腹にあちはへん人こそ床しけれ、佛光の塔
を出て、第四淨智寺に入りて見れば、三間四面の堂一字古き佛を安置して、いつくを開山堂といふ
べきやうもなく、末流邊土の僧一人來てかるく茅屋ちいさくいとなみ、かたはらに有りて、其次に
又一僧一字をかまへて居たり、佛殿の本尊もやぶれてもといふ物にてつゝみてありしを、われら
みづから立負ひ持來りて、膠付杯してわひつゝも立置ぬどかたりける、あさましき有様なり、天上
の五嶽などかくの如くなり、果ぬる事やあると嘆息やみがたし、又此日は建長に入り佛國禪師を拜

す、正統庵は夕に扉を開す、人住まされば夜はけだもの、栖と成ると見えたり、いかにしてかゝる
様にと問へば、所領庄園いさゝかもなければ、兒孫末流の有りなから我祖の庵をさへ守りかねたる
事なれば、本庵をいかにもしがたくてと語る、常寂の塔も風扉をひらき、さし入るものは夜半の月
より外はあらじ、禪師そのかみ

月はさし水鶏はたゞく楓の戸を

あると顔にてあくるやまかせ

と詠ト給ひけるが、今見れば跡を識し給ふにころとおほゆる、まましく色どり繪きたる棟うつばり
を雨にひたし、現容よく似ん事を思ひ志をささみ一尊像も、今は露半にうるほふ、後門の方をみれ
ば、から様にささみなしたる曲録くづれころびておれども、誰おさむへき人もなし、かやうにすた
れはつつる事やとなげく外なし、いさゝか香の資を奉りしり、たれにかくいふへき人もなく、門派
の人をたづね授けて歸りし、禪居庵は大鑑禪師清拙和尚の塔へ香物して歸りぬ、一老僧後に宿坊に
尋ねられ、古今の物かたりども有りし、次の日に鎌谷山壽福寺に入り、逍遙院も今はなし、逍遙院
はあやなしに水かれて草青し、入定の石籠荆藂かこみ藜□□せり方丈もいまはなし、残りたる一院
にいさゝか開山塔をかまへて香燈を備ふ、千光國師の尊像儼然たり、佛殿もかたばかりの体なり、淨

智寺は小佛殿方丈是も又かたばかりの体なり、天壇只一僧寂冥 尸をどち 音もせず、開山塔をば
光明院ときげど、光りや地に落けんと思ふばかりなり、爰を出てむかふの山に報國寺と云ふあり、總
門に漸入境塔といふ四字を題す、是より認入る岩のめぐりたるうげに、佛殿方丈ありきはかりのわ
どあり、爰をも出て又むかふの谷に入りぬ、左に深き谷あり覺園寺といふ、つかあり實に古跡なり
尊氏將軍の再興し給へより此方の寺なり、むねの札にたしかに見ゆたり、今の世の工の造りたるに
違ひ、見所多し、長老坊の造りなどは□□はいまだ見えぬさまなり、月中行事の順遊なり町噂なり
むかしはさて今は定めて十か二三も勤はあらトと思ふ、八十の老僧一兩人うち眠り、壁に寄りかゝ
り、る有様いつくにたどへん閑さど覺えず、いささか世の中をばしらすかほなり、心にまかせな
ば爰に留りて生を送らさほしく思ふ、捨ぬる身さへこゝろの儘にならぬ事なり、人のおもふに違ひ
ぬ、此寺庄園少しは残り山林もあれども、人をかくより境日々におどろへ一見えたり、甲斐力の人
あらば人少し軒をもかかけ、庭の木の葉をまはらひつくべしと覚へける、いつとて任にあたる
人まれなり、境は人に依りてあらはるゝと云ふ事實なり、五山などのかやうまで淺ましくなりぬる
事は、いつの時よりかど問へば、伊豆の早雲關八州を領せられけれども、そこくの國郡を知る人
達、みな北條に隨ふといふちぎりばかりにて國郡はむかしの如く預り居るおれば、八州の司といふ

はかりにてしるゝ處せばかりけん、事たらされば力もいらすして、落しやすき寺社の領地々皆あとして我臺のにきはされてより如此成りぬとなり、五山などいふ地をけづりてはたすべきもいかゞとて、僧一二人朝げ夕げをつげよとて十貫づゝ残し置きて皆ふとされ、建長圓覺は所ひろきとて百貫残せし、今もせめてむかしの地ならば物の數にもたるへきに、一る所も此世にかはりぬればもどゝいふ名ばかりにて、庫院も賑ひうすきなど語るに付て、今思ふ人は世によき名こそ残さまほしき事なり、早雲かゝる事をして寺社皆はて、我家さらば千代万代も榮えバ、其家も善人生れ合ふて悪しき道をよきよあらためなば、先祖の名も重くてあらん、家はやく果ぬれば悪しき名のあしき儘にて、世に残れるは譏多き事なり、家をば万歳千秋と祈るべき事なり、一度悪きことありともあらためてよきにかへさば、悪しきときのかくれゝよき名を残すはめでたし、我身に事たらぬからに外をむさほり、寺社をついやす、はれこそ有りてつけずとも人の付けかるをふとすは重罪なり、されども無道ながらもなべて世の人の心なり、事たらぬより心の外の事有るべし、あまる財あるは外にほどこして一は菩提のため、二は名を治代に残す外の徳あるならん、此頃神社佛閣修造の御沙汰ありと聞くころ、御家も久しく傳はり御名もよろつ代迄と知らるれ、世のやすからん事を上のおほすより、下が下迄のいきはひかはりて、目出たうと見えける、この山陰の僧徒まで末頼もしき事かなと

ふひあへり。

龜か江のやつと聞きて、

くちぬ名のあごはかはらしおのか身の

ふるよろづよの龜か江のやつ

爰は梅か谷とさへば、

むかし誰か軒にさき一梅かやつ

わすれぬやどの香に匂ふらん

梅か梅開憶昔年 昔年榮進盡黃泉

紫羅帳程珊瑚枕 會宿此花誰作賦

あふぎか谷に折れいゝ見れば、扇子がたにはりたる石の井あり、名水といへども夏とてもむすびつべくも覺えず、山のかたにもみち色よく染みて、つまきれないのあふぎが谷とそ見えし。

夕貌の日扇子の谷なれや

つまこにしたる山のもみぢ葉

花の谷にて、

さそなむかし咲けん春の花の谷

あどの名までもなほ匂ふかな

いにしへ阿佛此里にくだり、月影の谷にかりの宿りして居給ふあどし聞きて、

その身ころ露ごきへてもなき玉や

今もすむらんつきかげの谷

かくて爲相卿もくだり給ひて、もろごもにこゝにてなくなり給ひぬどか、爲相卿口の石塔とて慈恩寺の上の山あり、名の手向に

石の碑はたかのちの世のためすけど

問ふこそ朽ちぬその名なりけれ

谷々を見めぐるに爰はたれそれがし、かしこは其なにかくとにや、古き跡ども限りなし。

建久封疆多變寺 寺終廢壞又平蕪

千旅万化不留跡 昔日英雄骨又無

九代のあどし云ふを見て、

見てそけん思ひあはする麻はなく

新勅撰に入るとやらん歌に、

こゝろのまゝのあどの蓬生

世の中にあさはあどなく成にけり

こゝろのまゝの蓬のみして

とあるを今思ひ出てなり、

麻はなく蓬とよみし言の葉の

はや我世のあどをかねていひけん

同じき歌のこゝろはへなり、あれなる岡べこそ文覺上人の遺跡なれどあんない頼みし人の申せば、よそなから見て

かくどいかに住世に思ひ岡部なる

ひとむら薄あはれこそ見る

有文覺口跡 唯不見其人 遮眼霜餘草

斷根水上蕓 懷今復懷古 觀世更觀身

四百年前事 于時感慨新

幾度も□□をたぐ入幡宮にまうで、

十かへりの梢をならすかせの音に

聲をわはする鶴か岡のまづ

吹千年綠鶴岡松 永翠蔽源家後蹤

禱則感應如在扣 神官寺裏一聲鐘

入巨福山建長寺□拜開山大覺禪師於西來院

經日照于東方八千土云々

不覺從前大覺寺 下載清風月一痕

拜瑞庶山圓覺寺佛光禪師

圓覺伽藍包大千 大千日月道中旋

展虛午禮三拜□ 宇宙損身老鉅禪

入龜谷山壽福寺拜千光國師於逍遙院

照暗千光一光□ 逍遙大宋止扶桑

請看黑漆崑崙耳 敬爲祖師燒作香

金峯山淨智寺開山塔

門庭不設祖師禪 淨智莊嚴松竹旋

見塵我宗直建立 草深一丈法堂前

拜稻荷山淨妙寺開山塔日光光明院行勇禪師

月沈野水光明院 峰披青雲祖塔婆

當昔澤菴蛇陳所 看來今日一僧伽

拜報國寺開山佛乘禪師題門漸入佳境

認題門空入佳境 枯木園岩疊古鐘

想見祖師行遁日 其聲今開意中鐘

拜佛國禪師之塔光問塔主山風暗答常寂塔者無香灯之備雖法門之正統菴欠提綱之任否空房而老鼠白日

行狐入夜宿禪扉不閉風霜飽浸慈影吁時乎回昔年之盛事見今日之頽廢感慨非一卒賦俚語云

土曠人稀一塔荒 禪扉不鎖飽風霜

可憐此法今墜地 佛國光輝有若亡

拜大鑑禪師清拙和尚於建長寺禪居菴

盤口乾坤作草廬
 出無門矣入無戶
 覺園律寺智氏將軍再興有棟銘
 覺園律寺日苦生
 八十五僧不言戒

大唐日本一禪居
 塔樣直見先劫初
 本葉鳴風布薩聲
 唯依末壁陸爲榮

鎌倉之記終

明治三十年十月二日印刷
 明治三十年十月十日發行
 明治卅一年六月十日再版

澤庵全集奥附
 定價四拾錢

XXXXXXXXXXXX
 版權
 所有
 XXXXXXXXXXXX

編輯者 阿心菴雪人
東京市日本橋區本石町二丁目十六番地
 發行者 田平義三郎
東京市日本橋區本町二丁目壹番地
 印刷者 楠 磯太郎
東京市日本橋區本石町貳丁目拾六番地
 發行所 上田屋書店

終

